全日本リアリズム演劇会議

演劇会議

VOL.115　2004年7月

劇団四紀会『100万回生きたねこ』『大工と鬼』

創造の栄養は職場活動から　城谷　護

「リアリティ」と「自由さ」と　――役者たちが話しあった――

馬山あげての演劇祭　こばやしひろし

北京演劇事情――訪中記　津田　伸

劇団を訪ねて〈劇団「ひの」〉　よしだはじめ

第9回全日本演劇フェスティバルinくわな

開催日　2004年8月20（金）21（土）22（日）

場　所　三重県桑名市　市民会館　TEL. 0594－22－8511　福祉会館
桑名駅下車（名古屋から25分の近さ）、徒歩7分

参加費　1人17500円（2泊費用を含む）　1日参加、ご家族参加など料金の詳細は事務局まで

20日（金）　17:30　受付
18:30　記念講演　寺脇研氏（文化庁文化部長）（約1時間）
19:30　韓国・劇団馬山　ミュージカル「ゴスペル」（約1時間）
20:30　開会集会

21日（土）　9:00　日韓ミニ・シンポジウム
10:30　劇団大阪（大阪市）「スナーを探して」（約1時間40分）
14:00　劇団すがお（桑名市）　朗読劇「60歳のラブレター」（約1時間）
15:00　劇団はぐるま（岐阜市）「外郎売り」ほか（約30分）
16:00　劇団息吹（東大阪市）　喜劇「日本の牛」（約2時間10分）
19:00　上野市民劇場（上野市）　一人芝居「芭蕉桃青―その内なる枯野」（約1時間）
20:00　大交流会（星空の下で）

22日（日）　10:00　京浜協同劇団（川崎市）「収容所から来た遺書」（約2時間10分）
12:30　閉会集会（13:00終了）

プログラムは6月1日現在のもので、変更される場合もあります。

総会　フェスに先立ち、全リ演の総会を開きますので加盟集団は出席してください。
8月20日（金）13:00～東西別総会　14：00～17：00東西合同総会　同市民会館

主　　催　全日本演劇フェスティバル実行委員会・全日本リアリズム演劇会議
共　　催　桑名市文化・スポーツ振興公社
後　　援　桑名市
問合せ先　TEL／FAX　052－821－3691　フェス事務局長　栗木英章
申 込 先　劇団はぐるま　〒500－8882　岐阜市西野町1－11
TEL. 058－265－1852　FAX. 058－262－1652

藤沢　薫著『わが芝居人生』　山猫軒書房　2000円

「京都から一流を目指す」妥協のない舞台づくりを展開、俳優、演出家、劇団代表として京芸を引張り続けてきた芝居人生。その節目、節目になった舞台や出逢った人々、観客との交流を鋭く暖かい筆致で描く。

▶注文・問合せ・連絡・振込先
中谷眞紀　〒615－8113　京都市西京区川島梅園町27－2
TEL&FAX　075－393－3013　E－mail　tomekichi55@yahoo.co.jp

『100万回生きたねこ』
佐野洋子／作　劇団四紀会家族劇場／脚色
岸本敏朗／演出
劇団四紀会『100万回生きたねこ』
2月8・15・21・22日、3月13・14日

表紙のことば

里中　真

毎年新春に行っている家族劇場公演は今年で、中10年のブランクを除き19回目。演目は、大作1本または新作と再演の2本立というケースが多く、今回は後者の形態となりました。

震災後に家族劇場を再開してから、大半のチラシデザインは、演劇教室卒業生でイラストレーターの清水みどりさんにお願いしており、チラシだけでなく、舞台美術でも大変お世話になっています。

今回は、「100万回生きたねこ」の方が著作権の関係上、絵本の原画を使うことが義務付けられ、清水さんに力を出し切っていただけず、申しわけないことをしました。次回にまた、思う存分腕を奮っていただきたいと思います。

四紀会の舞台は、こうした清水さんのような協力者の皆さんによって、支えられているのであります。

舞台演公

◇劇団未来半島
「ゴジラ」
11月8・9日
大橋泰彦／作　仁木　宏／演出

◇劇団海鳴り
「恋歌がきこえる」
11月9日
小池倫代／作　我孫子正好／演出

◇劇団石るつ
「相寄る魂」
2月14日
ギィ・フォワシィ／作
利光哲夫／演出　境野修次／演出補

舞台

◇青年劇場
「GULF―弟の戦争」
2月18～25日
ロバート・ウェストール／作
篠原久美子／作　高瀬久男／演出

◇神戸職演連
「雄さん」
2月21・22日
本多弘志／作

◇劇団すがお
「桑名萬古焼―沼波弄山物語」
2月28日
栗木英章／作　吉良史郎／演出

公演

舞台

◇東京芸術座
「遠い水の記憶」
3月26日～4月4日
神品正子／作　印南貞人／演出

◇劇団名芸
「楽屋」
4月9～18日
清水邦夫／作　栗木英章／演出

◇劇団はぐるま
「TWO」
4月10・11日
成井　豊／作　三島幸司／演出

公演

2004年7月3日発行　第115号

演劇会議

◆ もくじ ◆

グラビア（舞台）…… 1

巻頭言……藤沢　薫　6

働きながら演劇活動シリーズ (3)
　創造の栄養は職場活動から……城谷　護　8

「リアリティ」と「自由さ」と　――役者たちが話しあった――…… 16

馬山あげての演劇祭……こばやしひろし　28

北京演劇事情　―訪中記……津田　伸　35

劇団を訪ねて〈劇団「ひの」〉……よしだはじめ　45

ベルリンでの在外研修を終えて……堀江ひろゆき　52

追悼　梶　武史……「勝手に逝きやがって」……岸本　敏朗　56

北から南から（劇団通信）…… 58

劇評　劇団石るつ『相寄る魂』……鈴木　太郎　74
　東京芸術座『遠い水の記憶』……〃　75
　劇団銅鑼×ヴァイトクス・スタジオ『sakura―イン・ザ・ウインド』…〃　76
　青年劇場『GULF（ガルフ）―弟の戦争』……〃　77
　関西芸術座『リズム』……神澤　和明　79
　Reptiles『心の面影～マイケルと私～』……〃　80
　人間座『翁家』……〃　82
　上野市民劇場『芭蕉翁桃青―その内なる枯野から』……久保田　明　83
　劇団名芸『楽屋―男と女の』……〃　85
　劇団演集『坂の上の家』……〃　87
　神戸職演連『雄さん』……今泉おさむ　89
　劇団四紀会『大工と鬼』『100万回生きたねこ』……〃　90
　劇団かすがい『貧乏物語』……〃　91

観劇記　『夏の夜の夢 ―ムーンアンドサン―』……杉本　進　92

情報BOX
　【第2回八雲国際演劇祭】11月3～7日　福田陽子　94
　全リ演〈東〉　第8回作家会議の報告　栗木英章　95
　全リ演関東ブロック「新春大交流会」報告　郡司　勇　97
　河東けいさんに心のこもったおめでとう　平田　康　99
　藤沢　薫さんの「わが芝居人生」――出版を祝う会　赤松比洋子　100
　梶　武史さんを偲ぶ会　里中　真　101
　新刊紹介「子どもの夢・子どもの劇」戎　一郎著　城谷　護　101

2004年7月中旬以降の公演 …… 102

舞台

◇劇団名古屋
「あした天気になあれ」
5月14～16日
ふたくちつよし／作
久保田明／演出

◇劇団だいこん座
「空とぶ大どろぼう」
5月22日
小田健也／作　石川富志夫／演出

◇劇団かすがい
「貧乏物語」
5月28日・29日
井上ひさし／作　楢崎英三／演出

公演

巻頭言

議長　藤沢　薫

今度、「わが芝居人生」なる本を出すことになり、図らずも自分が生きてきた戦後史をたどることになった。

中学3年で終戦をむかえた僕は、根っからの軍国少年だった。もの心ついた時から、なんのために、誰のために生きるのかの訓導を受け、国のために死ぬことが最高の名誉であると、骨の髄までたたきこまれていた。

戦争が終り、気がついたら民主運動のデモ隊の隊列の中にいた。戦時中に培われた国のために尽す体質は、「平和・民主」と名を変えて、そのまま民主運動にスライドしていた。大義名文の旗の下に、命令に準じる体質が僕の中に根深く巣くっていたのだ。

それと気づかないまま十数年の歳月が流れた。この恐るべき自己喪失の状態は、もの創りにとっては致命的だ。己の実態を省りみず正義の上にあぐらをかく傲慢な体質に気づくまで時間がかかった。

本来の自分を取り戻すのは容易なことではない。やはり作品創りの中で苦汁した先人の後を辿りながら確かめるしかなかった。

あるシンポジウムで「私は長い間、世のため人のために芝居をやっていると思っていたが、今では自分のためにやっていると言えるようになった」と発言した。終ってから若い人から「藤沢さんは、金と名誉のために芝居をやっているんですか」と、怒るでもなく、冗談でもなく真面目に質問され、返す言葉を失なった。

この年齢になると、若い人との年齢の開きはますます大きくなるばかりだが、大抵のことは理解しているつもりだ。だが、ときたま自分が痴呆になったかと思うほど戸惑うことがある。

私は自分の体験から、中学・高校生たちに「正解を求める前に、まず自分がどう思うかを考えよう」と言って

きた。

先日、ある高校生が「僕は先生から、自由にやれ、なんでもいいから好きなことをやってみろと言われるのがいちばん苦痛だ」と聞いて、背筋が寒くなった。

これをやれと命令されれば素直に応じる。だが自由にやれと言われた途端、なにをやっていいのか分からなくなる。完全な自己喪失ではないか。

戦時中の「自己喪失」は過去のことではなかった。しかも誰に強制されたわけでもない、強制されたのであれば、まだ反発も生まれよう。これは、ここ二・三〇年の間に培われてきた〇×式の管理教育が、完全に子どもたちから考える力を奪ってしまったのだ。「個性の尊重」という謳い文句とは裏腹に、生きる力を奪われたに等しい。

なんとも恐ろしい危険な状況ではないか。

子どもたちばかりではない。労働現場は戦後最悪の状況に陥っている。リストラの名による労働者の大量首切りは日常茶飯事となり、労働協約もへったくれもない無権利状態に追いやられ、資本のなすがままになっている。ずたずたの寸断された組織は、完全に団結権を奪われた格好で、反撃の狼煙はあがりそうもない。

このような過酷な労働状況は、労働者から完全に余暇の権利をも奪ってしまった。働きながら文化活動すらできない、かつてこんな時代があっただろうか。

日本だけではない、世界も狂っている。

世界の超大国アメリカは、アフガンにイラクに圧倒的な軍事力で侵略し、「民主主義」の名のもとに暴虐の限りをつくしている。イラク戦争は「大量破壊兵器」の有無をめぐって始まった。最大の大量破壊兵器は核兵器である。自らはそれを使い、大量に蓄え、核実験を繰り返しながら、他国には禁じて軍事力で抹殺しようというのか。

唯一の被爆国である日本が、そのアメリカに追随してとうとう自衛隊のイラク派兵を強行した。

日本国民が必死に守ってきた世界に誇る平和主義・平和憲法9条の改悪は、もはや時間の問題となっている。

21世紀を展望する9条の思想が、これから力を発揮する時期に、自らそれを捨て去ろうという愚考を見過ごすことはできない。

「時代は変わった」と、マスコミもいっせいに改正賛成の論調に変わってきた。

窒息寸前の世論が息を吹き返す日はないのか。われわれはなにをすればいいのか。

時代に翻弄されず、常に根元的な問いかけをする必要を歴史は教えてくれた。

働きながら演劇活動シリーズ (3)

創造の栄養は職場活動から

京浜協同劇団　城谷　護

劇団をやっていなかったら職場でがんばれなかったかもしれない。職場で活動していなかったら劇団活動も続けられなかったかもしれない――私は働きながらの演劇生活44年間を振り返って、そう思うのです。

私たち全リ演の多くの劇団員が、「働きながらの演劇活動」です。しかし、一口に「働きながら」といっても、働きながら演劇活動を続けるということは大変なことです。でも、大変だからこそその活動には重味があるといえるのではないでしょうか。

ゴローちゃんに教わった

昨年8月、全リ演東会議の熱海ゼミが開かれたとき、私は腹話術の「ゴローちゃん」で定年退職のときのエピソードを話しました。それがきっかけとなって、今回の執筆を頼まれたのです。働きながら活動しながら演劇活動をどうやって続けてきたのかを語れというのです。

話は定年退職時のエピソードから始めます。私は九州の片田舎から上京してある大企業に就職しました。約40人が一緒に入社したのですが、定年退職式のときは私1人でした。みんなそれ以前に肩たたきで辞めさせられていたからです。還暦の同期会のとき、同期生たちが言いました。「お前はいいな。言いたいことを言い、やりたいことをやって、最後まで生き残れたんだからな」。そうです。組合活動をやって言いたいことを会社に言い、やりたい演劇活動をやってきたのです。

実は私も定年（60歳）前に肩たたきをされたのです。人事室に呼び出され、「辞めてほしい」と言われたのです。

「なぜ辞めなければならないんですか?」

「会社が危機存亡のときだからです。」

「えっ、そんなに大変なんですか?」

「そうです。」

「じゃ、辞めるわけにはいきません。」

「なぜです?」

「会社がそんな大変なときに、自分だけのうのうと退職金をもらって辞めていくわけには行きません。会社を建て直すまでがんばります」

――人事室の2人、固まる。長い間。

こうして私は1人生き残ったのです。同期生が言いました。「そんなうまい断わり方があったのなら、俺たちにも教えておけよ」

そうしたことをだれに教わったかというと、ゴローちゃんです。ゴローちゃんというのは私が20年前からやっている腹話術の人形のことです。ブラックユーモアというか、相手が突っ込んできたらまともにはぶつからない、体をかわすのです。体はかわすけれども、ちゃんと生き残る権利は守るのです。

韓国語で腹話術をやる筆者とゴローちゃん（韓国馬山市で）

インドのガンジーという人の非暴力主義を見て、私は胸を打たれます。本当に優しい人は本当に強い人だと思うのです。組合活動でも同じですが、威勢よく、パァーッとやる「強い人」がいます。しかし、そういう人ほど流れが変わると寝返ったり、やめていってしまいます。自分の思うようにならないと、もろくもくずれてしまうのです。そういう人をいっぱい見てきました。本当の強さというのは、強がって見せることではなく、「理不尽なことは許しませんよ」ということを相手に分からせることだと思うのです。それさえ自分の中にしっかりあれば、相手がガタガタ言ってきてもびくつくことはないのです。

私は定年退職をする日に、お礼のあいさつに人事室に向かいました。ちょうどその日は年末の納会の日でしたから、掃除も終ってそれぞれの職場で「乾杯」をやり始めていました。ゴローちゃんを連れて行ったので女性事務員たちは大喜びでしたが、男性たちはびっくりしただけでなく身構えました。

ゴロー「いい企業って、首切りや人減らしをしないで、地域に貢献するんだって」

城谷「ゴローちゃん、そう言うなよ。43年間もおせわになった会社なんだから。今日は退職のあいさつに来たんだよ」

とやりました。会社構内では演説行為をやってはいけないと就業規則にありますが、私のやったことは演説ではありません。芸であり、あいさつに過ぎません。人事室でいわば〝パスポート〟をもらい、ビルの1Fから7Fまで回って、「リストラなんかに負けるなよ」と労働者を励まして回ったのでした。一杯気嫌の納会ですから、どこに行ってもゴローちゃんは大喝采を浴びました。

飼い犬に手を噛まれた話

「働きながら、組合活動をやりながら、演劇活動がよくできるね」とまわりの人たちからよく言われます。「よく」なんかできていないのです。演劇活動だけに専念できる人はそれだけの仕事をしているのです。私だって、できるものならそうしたかったのです。でも私は働かざるをえなかったし、組合活動からも逃がれられなかったのです。

よく、「今は組合活動があるから」とか、「今は子育てがあるから」とか、「今は母の介護があるから」と言ってはやりたいことを先送りする人がいます。でもそういう人の多くは先になってもやりたいことがやれません。なぜなら、やれる条件が整うなんてことはほとんどありませんし、仮りにやれる条件ができても今度は自分の体がいうことをきかなくなっていたり、まわりの環境が悪化していてやれなくなったりしているものです。

私は思うのです。人生が二度もあるのなら一つをやって、次に二つ目をやって……とできるでしょうが、人生は一度しかないのですから、やりたいことがあればそのときから始めればいいのです。100%はできなくてもいいじゃありませんか。例えば、仕事が忙しい人も、お母さんの介護をやらなければならない人も、週1回でもいいからその時間を確保して劇団に来ることです。1回しか行けないからダメという発想から、「私だって週1回行けるじゃないか」と発想を切り換えるのです。そうすれば1回は2回になっていく可能性もあるのです。

私は18歳で働き始めました。寮から会社へ行き帰りする毎日は味気なくて耐えられませんでした。一緒に何かを創り出す仲間がほしくなり、劇団に入りました。週3回、劇団に通う日々は楽しいものでした。

ところがある日、私の人生を大きく変えるできごとが

起こったのです。私に労働組合の職場代議員という役が回ってきたのです。現場では選挙をやるほどでしたが、私のいる船の設計という職場では組合の役員なんてやる人がいなかったのです。このため、くじ引きとか指名とかでやっと選出するというありさまでした。労働組合について何の知識も関心もない私はある日、会社の労務に呼び出されました。組合の今日の代議員会で春闘のストライキが提案されるので反対してくれというのです。私は「反対するもしないもない、職場の代表なんだから職場の人の意見に従う」と答えました。職場の全員に紙を配って意見を聞いたところ、圧倒的多数が「ストライキをやるべきだ」という意見だったのです。当然私は職場の意見に従いました。

しかし、これが会社側の私に対する差別の始まりでした。そして私が組合活動から足を洗えなくなっていくスタートだったのです。会社側は労働組合に何の関心もなかった私を目覚めさせてしまったのです。私が職場代議員になってから、会社側は私の対抗馬を立候補させて私を落とそうとしましたが、失敗しました。それどころか、職場代議員より上の執行委員選挙でトップ当選してしまったのです。

後に、会社側は私のことを「飼い犬に手を噛まれた」と言いました。そうか、私は「飼い犬」だったんだ。思わず笑ってしまいました。「飼い犬」はやがて、同期生にくらべ年収250万円の格差をつけられます。

「同期にくらべ車1台分くらい差がついたろう。どうだ、このへんで考え方を変えたら?」 労務は私に車1台分の差をつけて転向を迫ったのです。

目をつぶって通り過ぎることもできないわけではありませんでした。しかし、人間には譲れることと譲れないことがあります。私は仲間たちと14人で、不当な差別だとして会社を訴えます。またまた忙しくなるのですが、人権を侵害するのを許しておいて、劇団でいい芝居ができるわけはありません。労働者におおいかぶさっている

労働組合の執行委員をやっている頃の筆者（26歳）

圧政とたたかわずして「働く人々を励ます芝居」はできないはずです。京浜協同劇団は、職場でもがんばっている人を多くかかえてきたのです。

職場の体験を演劇に生かす

とはいえ、職場、活動、芝居の三つを同時にやっていくのは、実際には大変なことでした。出番のある稽古の日に、重要な会議とダブったときは泣きました。いろんな仕事を片付けるため、徹夜、睡眠3時間という日も続きました。「急ぐ仕事は忙しい人に頼め」の諺どおり、活動の方も劇団の方も仕事が次から次へと舞い込んでくるのです。仕事をこなすため、「今日やる仕事」というメモ帳を作り、毎朝書き込んでは済んだ項目を消していきます。1日平均20項目から25項目くらいあります。重要な項目には◎印をつけてやっていきます。毎日それをやっていくのです。

一番辛いのは、職場や活動仲間の一部から劇団活動が単なる「趣味」としか思われなかったとき、逆に劇団の一部から組合活動が理解されなかったときでした。それでも職場や劇団の仲間たちがやはり支えてくれたのです。その支えがなければできなかったのです。

さて、職場活動をやっているんだから、その体験が生かせないか、しきりに考えていました。東リ演が提起した「七〇演劇行動」で造船労働者の苦悩を描いた「波うちぎわ」という作品を書き上演しました。そして、黒沢参吉を中心とする集団創作グループに加わり、造船現場を描きました。題して「九〇二番船、進水！」。これは現場をよく描いたということで大きな反響をよびました。劇作家の大橋喜一氏は、「この公演は川崎の文化的事件といえよう」と新聞に劇評を書いてくださいました。佐藤張二のダイナミックな装置も話題となりました。

職場活動の経験から学んだものを劇団活動に生かせた例としては、今述べた創作の他に制作・普及活動があります。

組合活動には会社という相手があります。勝つか負けるかなのです。だから、劇団と違って、目標がはっきりしています。目標を明確にし、それに向かっていろんな作戦を立てるわけです。そこにも学ぶものがありました。また、労組や民主団体に対し、どのように働きかけていけばよいかも学びました。どうやって具体化していくか、それが大事であることも学びました。もちろん、職場活動をやることによって友人がふえ、券も広がっていくのです。

年に2回も3回もやる公演で毎回100人前後の観客

造船現場をリアルに描いて大きな反響をよんだ集団創作劇「九〇二番船、進水！」

を得るには、稽古場にとじこもっていてはできないのです。

いろんな経験を生かした仕事に、全リ演関東ブロック10集団の合同公演「西風に起つ」があります。三宅島のNLP（夜間離発着訓練）反対のたたかいを描いた作品であるだけに、いろんな妨害もありました。また、寄せ集めであることからくる困難、作者との齟齬など困難な問題が次から次へと起こりましたが、結果としては約7600人の人々に観ていただくことができ、成功させることができました。この公演の制作を担当したのですが、ここでも職場活動の経験を生かすことができたのです。問題提起や目標は大胆に、しかし、やることは緻密に――ということを実践したのです。後藤陽吉実行委員長と肩を抱き合って公演の成功を喜び合ったことが忘れられません。

こうした経験をまとめて、今からちょうど10年前に「わくわく制作、いきいき劇団」という小冊子を自費出版したところ、おかげさまで500部が飛ぶように売れました。そして全国各地から制作についての講演を頼まれ、10回ばかり話してまわりました。それがまた、私自身を奮い立たせることになり、身丈にも合わない、1億6500万円の稽古場建設へとつながっていく

のです。

私は、何か一つの構想を実現するためには5年くらいはかかると思っています。劇画「はだしのゲン」を劇化するときも原作者の中沢啓治氏に断わられ、5年かかってようやく上演許可をいただくことができたのです。赤字が続いていた劇団の公演会計を黒字に転じさせるにも5年かかりました。稽古場建設も構想から実現するまでは5年かかりました。劇団員の力量を高めると共に劇団の収入をふやすため、提起した「一人一芸」運動もやはり数年かかりました。

制作の仕事は、(1)不可能を可能にする、(2)仲間を奮い立たせる、(3)集団を生き生きさせることだと思っています。どうやればみんながその気になるか、それを考え続けることです。

劇団で得たものを職場活動に

こうした制作についての考え方、劇団の創造活動から学んだものを職場や地域での活動に応用したことも数多くあります。

私は大企業に在職中、臨時工裁判支援、組合活動家差別争議、55歳以上賃金カット事件の三つの裁判をたたかい、いずれも勝利解決を果たすことができました。

勝因は何かと問われれば、「楽しくたたかったから」と答えてもいいかと思います。争議というのはどうしても暗く重たいイメージがあります。「今は苦しいが、勝つまでは」と力んでしまうのです。私はそういうのが嫌いです。何事も「今」が楽しくなければ力は湧きません。どうやって今を楽しくするか、それが結果として勝利に結びつくのです。

私が腹話術を始めるきっかけの一つは、争議のことを市民の皆さんに分かってもらうためです。仲間の一人は講談でそれを訴えましたし、紙芝居のようにパネルにして分かりやすく宣伝もしました。また、争議をやっている人やそれを支援したりする人たちの中には音楽をやっている人も少くありません。そこで、尺八や三味線、太鼓など和楽器をやっている人たちと、ギター、ドラムス、トランペット、ピアノなど洋楽器をやっている人たちに和洋混合のオーケストラをやってみないかとよびかけたところ、30人くらいの人が集まりました。作曲家の安達元彦さんに話を持ち込んだところ、「面白い、やりましょう」となって、とうとう実現したのです。その集会には1500人の人たちが来てくれ、争議勝利に大きな力となりました。

定年は60歳なのに不況を理由に55歳で退職させられる

ことになったとき、私たちは「定年まで働こう」とよびかけ、「希望の会」という会を作りました。その新興宗教にも似た名称がうけたのか、予想を上回る人々が結集してきました。そして、とうとう60歳まで働く権利をとり戻したのです。

また、55歳になると自動的に月額3万円（約1割）がカットされるようになったときも、これは年齢差別だとして裁判に訴え、カットされた3年分をとり戻しました。

高齢者に対するこうした差別やいじめは、バブルがはじけて以来、多くの企業で常態化しつつありました。いわば〝常識〟になりつつありました。しかし、私たちは「認められないものは認められない」として起ち上がりました。そして私たちの勝利は社会に一石を投じることになりました。

組合活動家差別に勝ったとき、工場の門前で従業員の退社時に〝ふるまい酒〟をやりました。四斗樽を門前に並べ、「皆さんのご支援で勝つことができました。一杯やってください」とお酒をすすめたのです。女性にはチョコレートを配りました。これは帰りの電車の中や翌日の職場で大きな話題となりました。ビラを受け取らなくなる人が増える中で、こうした「変わったこと」をやることによって、何が勝ったのかが話題となるのです。そしてそのことが、もう職場で差別は許されないのだというモラルを築いていくのです。

職場から創造の栄養を

「働きながらの演劇活動」といえば、職業劇団と違って、「甘い」とか「時間がない」など負の面が多いのも事実です。しかし、「働きながら」の人でしか知らないことや「働きながら」の人でしか表現できないものがあるはずです。それをいかに深めていくかが私たちの課題です。職場に根を張り、そこから創造の栄養を吸収しなければ意味がありません。若い人にフリーターが多くなっていますが、職場が単に「めしのタネ」を稼ぐ場にならないことを願うばかりです。

私たちの演劇行為が、単なる個人的趣味にとどまらず、人の心を揺さぶり、人と人とを結びつけ、新しい共同社会＝地域を創り出すことにつながっていったらいいなと思うのです。

労働や生活を通して、人生の深部で観客と同じ呼吸をしながら、共に生きていくところにアマチュア主義の良さがあるのではないでしょうか。

（京浜協同劇団代表、全リ演事務局長）

「リアリティ」と「自由さ」と

—役者たちが話しあった—

〝あ、なんかつかんだぞ！〟というとき

司会　きのう編集委が集まって、きょうをどうすすめるかって酒飲んだんだけど（笑）、いやちょっとは話したんだが、あまりいい知恵はでない。まあ、みんな相当な役者だから、集まりのアンサンブルもふくめてなんとか創ってくれるだろうということになって。でも、はじめの切り口として、それぞれ演ってきた仕事で、〝なんかわかった〟という体験、それがどうしてだったかもふくめて出し合うところからいきたい。

護柔　だいぶ以前、『金冠のイエス』で小田健也さんを演出に迎えた仕事で、怒っているセリフの場面を、〝ちがう、もう1回〟〝もう1回〟と一晩中くりかえし。それで、自分がほんとに怒ったときはどうなんだろうということをキッカケにしてやっていくうち、〝護

参加者（敬称略）

いとうエリコ（石るつ）
小田原美保（東京芸術座）
護柔　一（京浜協同劇団）
重野　恵（青年劇場）
清水　泰子（蒼生樹）
藤井　康雄（京浜協同劇団）
森本拓治郎（埼芸）
安原　昇（土くれ）
司会「演劇会議」編集委員
よしだはじめ
境野　修次
郡司　勇
協力　中谷　源（青年劇場）
NAOMI（石るつ）
日時　04年3月14日（日）午後
場所「青年劇場」会議室

右側から、森本拓治郎・清水泰子・よしだはじめ・小田原美保・境野修次・藤井康雄・重野恵・いとうエリコ・護柔一・安原　昇

柔、それだよ〟といわれ、そうか、芝居ってのは自分が心を動かしたときに成り立つんだなあ、ってわかった気がした。あれから20年余、あのときはよく理解してなかったけど、そのことが役割りの出発点だったんだろうな、って思いがあるね。

藤井　逆のことになるが、『鉄道員』で音松の役者が倒れちゃって、急に代役をやることになっちゃった。上演1週間くらい前だったかなあ。セリフを入れることにいっぱいで、役を創る時間がもうないんだよね、全部自分にひきつけるってのか、自分のなかの手持ちの材料でね、それで当日を迎えたんだが、〝よかったよ〟とみんなにいわれた。そういうこともあるんだなあって経験したんだけど。

清水　〝よかったんじゃないか〟〝だめだあ〟っていう役者の思いと、お客側の受けとめがちがうのは当り前なんだけど、両方があわさったと感じたのは、『逞しき女々』って芝居をやったとき。稽古過程から相手役とアドリブ的につくっていって、コメディが生まれていったんですけど、4ステージとも同じところで同じようないい反応がかえってきて、のりすぎないようにと意識しながらも、役者として快い体験でした。

でもわたしたちアマチュアだから上演回数が少なくて、同じ作品で舞台を重ねながら発見していく経験がなかなか出来ない。そんなこと専門劇団の人にききたい。

重野　はじめのころ、ガムシャラに役にぶつかっていて、〝よかった〟といわれることがたまにあっても、どうしてなのかわからなかった。いくらか経験してきて、その人物が少し見えてきたり、こう創

ろうなんて考えたりしてくると、こんどは「観せよう、観せよう」という気持ちが出てきちゃうんですね。いわゆる「作っちゃう」んで、自分ではそう思ってなくとも、お客からは「作った」ことばかり見えて、おもしろくないんでしょうね。『愛が聞こえます』の耳の聞こえない役を7年くらい演ってきまして、最初は「聞こえない」ことがどうにもわからなくって、でも続けているうち、あ、聞こえる、聞こえないはあまり関係ないんだ、同じなんだ、と思えたあるとき、フッと肩の力が抜けて役に近づいていける気がしました。

旅公演のなかで障害者のお客が多い上演もあるのね、そんなとき、客席に対してへんな意識をもたずに、ホントにふつうの状態で、舞台のアンサンブルをしっかりつくっていけば、相手役も観客も信頼すればいい舞台になるという体験もしました。観客にどう「投げよう」が前に出ているとダメで、相手役と交流をきちんとつくっているときに客に届くようです。

いとう　不思議な感覚の体験をしたことがある。江戸川乱歩の原作で大橋喜一さんの『芋虫』という芝居を演ったとき、知ってる人もいるでしょうが、傷痍軍人で手足をもぎとられた夫と彼に性行為をいどむ妻、そして悲劇的結末をたどる、おどろおどろしいドラマなんだけど。

あるとき、行為が終わったあとかな、大正時代の「ジンタ」がきこえたところで、なんだか分からないけど、涙が出てきて、鼻水といっしょにそれこそほとばしるようにグシャグシャにあふれてきたの。感動しているわけじゃない、悲しかったのでもない、泣きながら実に冷静に舞台の隅々を見、次の展開を考えている自分。持っているものを出しきっちゃったかなあという解放感、快さというのがあった。その回の公演のあと、実にすがすがしい思いだった。

役者ってのは、自分のもっているもの、顔、からだ、そして心と脳、それで演るしかないから、その自分を超えることなんかできないと思う。とにかく自分のすべてを使って、戯曲の意図にどうやって近づいていくしかない。それが役者の作業かなあって、このごろつくづく考えてます。

安原　あまり考えてないんだよね、考えてもろくなことはできないんだよね。でも、作品を最初に読んだときに浮かべたイメージ、それが頭のどこかに残ってる。稽古では、ああやろう、こうしようよりも、相手のセリフをよく聞く、そのことがいちばん大事だといつも思ってる。そうすれば何かがでてくる、と思うので、セリフはあまり覚えようとしない、稽古のなかでいつのまにか入る事が多い。

どっぷり感情をいれて創ると、自分じゃ気持ちよくても「ダメ」っていわれる。たしかに、感情がはげしく動いていても半分は覚めてるって状態が理想かもしれないんだけど、それがむずかしいんだよね。ともすると感情に流されることの多いタイプなんで、ぼくは。

森本　〝よかった〟と思うことがないんでね、一生これでいくんでしょ。（笑）『看護婦のオヤジがんばる』って芝居で、稽古をくりかえし深夜まで、そこから会社へ行ってまた稽古場に来る。さっき護柔さんがいったような状態。……そして本番、舞台に出ていって戻ってきたら、演出が〝それだよ〟っていう。なにが「それ」なんだかわかりゃしない。（笑）どう創るかなんかまったく考えてもいなかった。打ち上げのとき「あれは自然だったよ」といわれて、〝そうかなあ〟。でも「あれ」そのものなんて覚えてないんですよね。

小田原　自分がいいと思ったときにはお客はいいと思わないってよくいわれるじゃないですか。演出家ともそうですよね、「いいよ」といわれてもなかみがわからない。研究生のころ、稽古が延びに延びて、わたしのところになかなかやってこない、イライラしていたのね。そのときわたしのセリフは、〝全部あなたのせいよ！〟と泣き叫ぶんでしたけど、演出家への怒りをそこにふくめてぶちまけた。そしたら「それだよ」。人にもいえないし、くりかえすこともできない、という経験ありましたね。

うち（東京芸術座）では「役の年譜」を書かされるんですが、何の役に立つんだろうと思い、他人にもよくいわれてました。あるワークショップで、〝「15年」とあるセリフ、その人の15年をお客にちゃんとわからせるしゃべり方を考える、それが「年譜」とかかわってるんじゃないか〟といわれ、〝ハア〟とわかる気がしたんですが、お客にわかる表現はむずかしくとも、脚本はそうか、こう読んでいくのかというヒントを与えられた気がしました。

「実在感」「自由さ」のある演技

司会　みんなの発言には共通するものがある気がする。役を創る営みを通して、舞台の上でその役者の、そこで生きてる存在感があるかど

うかがポイントになってること。

藤井　芝居の質にもよるんじゃないかなあ、人情的なドラマでは情緒たっぷりでなきゃ成り立たない、またプレヒトのように提示型の芝居もあって、そこでは情緒過多はそぐわない。このあいだの『ラーゲリから来た遺書』でのぼくの役は、ナレーター的な立場をもちながら相手役との芝居もある。台本にはなんの説明もないんだよね。だから、ここは客に向かって話した方がいいとか考えて演じていかなくちゃいけない、創っていくプランをもたなくちゃいけない。ぼくは、創るありようは作品からもらってくると思うんですけどねえ。ただ、つくっているのが観客から丸見えなのはいやだな。

護柔　舞台で「パフォーマンス」をくりひろげる役者がいる、〝これでダメなら、それではこれで〟って。でも、ぼくはね、作品に描かれた役をからだと感情と知性を動員し「構築」していく創造、そういう役創りが必要だと思ってる。

重野　若い人の小劇場芝居を観にいったら、それはまさに「パフォーマンス」なんです。はじめは〝これはつらいなあ〟と思ってたんですが、演ってる人が役と状況を疑いなく信じて、客がどう感じるかなんかとびこえて、入りこんでやってるんですよ。わたしは役創りの基本は、信じてそこに入ることかなと思う。それが中途半端だと「つくっている」がどうしてもみえてしまう。〝わたしが信じて、こうやって、こう創っている〟ようになって、舞台での存在感が出るんじゃないかな、と思うようになってます。

あるワークショップで「日常の表現」の「手紙を読む」というのをやったんです。やったあとで〝その手紙がどこから来て、わたしはうれしいということを、ぼくらにそんなに教えてくれなくてもいいんだよ〟といわれて、ガーンときました。つまりは「つもり」の表現だったんですね、過去の体験を示すことが頭にあって、いま、この場で手紙を読むってことがなかったんです。そのとき、〝ああ、そうか〟と思った、「演じる」ことでなく、その場の発見が重要なんだということをです。そこで役者が「自由さ」を感じることです。

司会　役者が「創りながら自由である」というのは大切なことじゃないかな。さっき、いとうエリコさんが自分の体験を語ったけど、それは、きわめて「カッコいい」ことばでいえば、プレヒトのいう「異化」と「同化」とを「弁証法的に統一した」状態だったんだな、

カッコよすぎるけど。（笑）それは、いま重野さんのいった「自由さ」と重なっていると思う。そういう状態にどう入れるか、どう創れるか。「あまり創らない」といった安原さんはどう創ってるかな。（笑）

安原　役の年齢が問題かなあと思う。うちの場合、どんな役でもやらなくてはいけなくて、自分の現在と大きくかけはなれた年齢の役を演るときにはどうしてもつくっちゃう。若い役だと体型とか動きとか若さを示そうとする、そういう役と自分とのずれに苦しむことがあるね。「自由さ」、ほんとに理想だと思うし、たまのたまにないこともないけど、それが創れればいいと思うよ。

清水　「結論」みたいのがでちゃったようで、（笑）これ以上いえない感じ。（笑）

むかしむかし『ワーニャ叔父さん』のソーニャを演ったことがあるんですよ、なんにもわからないからただただ演ってしまって。まもなく「モスクワ芸術座」が来日、観にいって、チェーホフの世界はロシア人にはかなわないと思いました。あの人たち「お芝居」してないんですよね、〝ああ、退屈だわ〟ってエレーナさんがいうと、ほんとに退屈なんですよ、ソーニャもいじらしそうなことなんかしないんですよね、そこにいるだけ。そういう芝居がしたいなと思ったこと、いま話をききながら思い出した体験です。

うちは「髷（まげ）もの」の芝居もやるでしょ。江戸時代を借りた現代劇なんだけど、時代劇というスタイルが、程よい距離感を生み、観客にリアルに伝える仕組みになっている気もして、〝ああロシア人にはかなわない〟の体験に近いことを自分たちがやっているということになればいいなあ、と思ってやっています。

森本　稽古のはじめには「つもりあり き」でもいいと思うんですよね、それを演出といっしょにけずったりふくらませたりして。ただ、観客がいうことに、「芝居はちがうのに、出てくる人間はいつも同じようだな。」（笑）何やっても森本拓治郎であって……、いろいろ表現をつくってもいいような気がするんですが、「寅さん」ならいいけどね。

小田原　こうすればできるなんてわたしにはないなあ、そういう支えがあればやれてるはずだもん。（「そりゃそうだ」「あれば稽古しなくていい」の声）今まで話きいていて、いちばんひかれたのは重野さんの「自由さ」ということば。

舞台の上で自由になる、それをみんな求めてるじゃないですか、でもどうしていいかわからない。役に恵まれて、演出家にも恵まれてないと。

心が大事というけど、外をつくらないと近づけない。おばあさんの役をやることがあるけど、形をある程度つくらないとおばあさんに近づけない、自分がおばあさんであることを信じられるようにならないと、心が自由になるところにいかない。つくり方は役者それぞれで、外から入っていく人もいる、わたしはそうかな。

演出家の「ダメ出し」も、役者それぞれにあわせて出されないと本人にはわからないことが多いのね。はたできいてるとよくわかるし、正しいと思っても、本人に伝わらなければ、「ダメ出し」は「ダメ」なんじゃない。（笑）「自由」のためにはいい環境が必要なんじゃないかなあ。いま新劇で「自由である」のはむずかしい問題かもね。

役・作品へのイメージをもつ

藤井　ぼくの場合、創るというより「わかる」「わかりたい」というのが出発じゃないか、と話をききながら思ってたんですけどね。ドラマもそうだけど、役の人物の存在のしかた、歴史をふくめた生活がわかりたい。うまくいかないときは、それがアイマイなとき……つもりになっちゃう。すべてわかるなんてことはないけど、しゃべりかたとか、その人のクセもふくめてわかりたいと思う。「わかる」ことをキーワードにして役創りしてるということかな。

手がかりがないときは「念ずる」んですよ。（笑）なんともならないとき、なんとかしようと思うとなんとかなるときもたまにあったりしてね。とにかく役のイメージがあるときはなんとかいくんだけど、それがないときは空まわりしてる。

清水　「イメージ」は大切ですよねえ、作品全体についても、役の役割についても。全員がそれを共有できるといいプロジェクトになる。作品に対して劇団全体がホレちゃうと、マホウがかかっていい舞台ができちゃうし、逆もある。演出家と抱いてる夢がちがうとき、いちばん辛いと思います。長く劇団やってると、夢を共有してるつもりになって、実際はできていないのにどんどんとりくんでいってしまう状況があるんですね。

司会　役への近づきのきっかけは

ほんとに具体的なものじゃないかな、作品によっても、ひとによっても、その時々によってちがいはあるけれど。

安原　稽古やってるとき、「ア！」と感じたり思ったりすることがあるよね。それぞれ経験あるんじゃないのかなあ。

護柔　「ある馬の物語」で、若い馭者の役、指笛吹くのを練習して練習して、これができたら役が全部できた（笑）、そういう思いがあった。自分のなかのハードルをとびこえられたら、自信につながって役創りに有効に働いたって経験があるんですけどね。

藤井　その芝居で、ぼくは公爵の役を演ってね、ぼくは体型が前天皇に似てるっていわれて、猫背で、歩き方も美しくない。歩き方を改善しましてね、すると気持よくなる瞬間があるんですよ、ああこういうことかなってね、そしたら芝居が少し変わってきた、そういうことがありましたね。

いとう　わたしはね、自分でイメージをつくっちゃうんですよ、最初に。戯曲を読んで、映像にしちゃう、頭のなかで。このあいだの、『相い寄る魂』では、まず着るもの、それを観客がどう見るか。それからセリフをどうしゃべるか。役者はとにかく「演じる」んですよ、そのための技術が必要。例えば、ロシアの俳優の「自然さ」は、演技術をもっているからで、つまり自然に見える立居振るまいや、物言う術を……。

まず、自分で、イメージを探し出さなきゃダメだと思うの。はっきり示されてる脚本もあるけど、そうじゃないのが多いから……本から学ぶということなのかな。だから創作劇を多くやっていても、たまには、ほんとにいい本、すぐれた戯曲をやるべきだと思います。たくさんのイメージをもらえるしね。

司会　久保栄が、役者・演技に必要なのは二つのことだといってます。一つは、「現実感覚」、現実や歴史に対するその人間の切実な考え方、もうひとつは「演劇的センス」。両方がないと役者としても演技としても成り立たないんだって。そうだ、そのとおりと思うけど、あの人えらいからね。（笑）ことばでいうと簡単だが、現実にはね……。

護柔　芝居が好きだということと演劇的センスとは別のことだからね、芝居大好きというやつが演劇的センスがなかったり。（笑）

「アンサンブル」をつくる苦労

護柔　「京浜」の場合、可能なかぎり、現地調査ってことをやるんですよね。作品の世界を共通認識しようってことで。『郡上の立百姓』では定次郎の墓までバスで出かけ、『北の提灯』では北海道の三笠まで炭坑の荒れ果てた様子など行ける人が見てきた。今度のラーゲリの芝居でもシベリア抑留体験者の話をきく学習をもった。集団としての共通認識を役者同士がもっている力は大きいと思うな。ひとりひとりのやらなくちゃいけない仕事はあるんだけど、当然。

藤井　稽古後、役者の話し合い、とくに悩んでるやつを入れて……まあ飲むんだけど、演出は入っちゃダメっていって。（笑）やったからどうということないんだが、共通の想いを持つということで、少し意図的にやっているんだ。

いとう　『美しきものの伝説』をやったとき、登場する人びとが実に魅力的で、何か月かのあいだとりつかれた。そのあと二つの劇団の『美しき……』を観たんだけどほんとにつまらなかった。どうしてかって考えたら、それらには、いわゆる「うまさ」はあってもエネルギーがない、エネルギーの発散がなかった。わたしたちの舞台にそれが充分あったとはいえないんだけれど、少くとも全員に熱い思いはあって、そのことが芝居には大切だなって思うのよね。

藤井　黒沢参吉の門下生だからいうんじゃないけど、黒さんがよくいっていた。〝芝居は必ずしもうまくなくてもいいんじゃないか〟って。〝下手でもいい〟とはいわなかったけどね。（笑）うまさだけを求めてはいかんということだろうね。真実が伝えられれば、うまさ下手さはあまり問題ではない、それはもう伝える手段としてうまさがあればずっといいということでね。……うまさだけを求める役者もいますよね、でもそういう役者はのびないと思うね。

清水　でも、「うまさ」追求型の人でも同じねらいを持ってればその特徴をよく生かすことができて、みんなへの刺激にもなるんじゃないですか。われわれのようなアマチュア劇団はメンバーがいろんなところからきてますし、いまさら考え方、生き方をやり直せっていえない。ありのままの一人ひとりが協同体つくって一つのもの創っていくことに徹するしかない……同じことやってても通じ方、受けとめ方がバラついてかなりツラい。でも、だれか輝いている人が

でてくれば、それにはげまされ、いっしょにやろうって気にもなる。

司会　専門劇団ではどうなんでしょうね、どうやってアンサンブルをつくるのか。

重野　そうですねえ……どうなんでしょう。

藤井　20代が3人ほしいっていったら、すぐそろうでしょ、こっちは1人しかいない。（笑）

司会　専門劇団でも、若い人が集まりにくくなっている傾向。その点ではアマチュアと同じ困難があるようで、〝リアリズム派〟はいまきびしくなってるんだよ。（笑）

小田原　同じことをいっていても、20代の人と感じ方が大きくちがうってこと、年配の人がぼやいてますよ。わかるんだけど、世代感覚のちがいがアンサンブルのとれない理由じゃないよな、という思いもあって、そのせいにして何もしなけりゃダメだ、という気持がする、それはお互いにね。

原点は、一人ひとりのものの考え方がちがうこと、共通認識をつくるために、いろんなとりくみをくふうして、つみ重ねの稽古をしていく、ほっといたんじゃアンサンブルは生まれない。

安原　入ってくる人は20代、ずっとやってるのは50代、ひらきが大きいから、レパ選びに苦労する。せっかく入ったんだから役につけてあげようということになる、そこから作品もえらぶもんだから、うちはいったい何をしようとしてるのかということになる。（笑）そんな現状があって、役につけないと1年くらいでやめちゃう……どうしようもないなあ。（笑）

森本　うちも同じような状況……アンサンブルはいかなるものなりや。（笑）

小田原　うちは総会でレパを決めるじゃないですか。若い人が共感示す作品を出すと、お兄さまお姉さまが〝わたしにはわからん〟、先輩がたの〝これはいいのよ〟という作品に、若者たちは〝何がいいの？〟となる。お互いに認めあう作品もあるし、ほんとにいい戯曲は世代をこえて受け入れられるんでしょうがね。

清水　劇団のなかだけでなく、観客でもそうなんですよ、そういうこともふくめた危機感を芝居づくりに感じることがありますね、10年後はいったいどうなるんだろうってね。

藤井　若い人を定着させるのに、個人の、演技の、なんていっちゃいられない状況もある。（笑）

清水　ほんとねえ、「登校拒否」を心配しちゃって。（笑）

司会　「石るつ」のように外から参加してもらう人がそれぞれ自分なりのものをもってるから、その力が発揮されるといい仕事ができる場合もあるんじゃないかな。

いとう　やはり「不登校」は心配しますよ、客演だって。（笑）

森本　若い人たちのやってる芝居にたくさん観客が集まってるんですよね、あの人たちがぼくらの芝居を観てくれたらどんなにいいか。どうすればそれができるのか。劇団の数もお客もほんとに多い。

司会　そこをすすめると「制作」問題になるからね。（笑）

小田原　でも、いま、〝そうだなぁ〟という顔しちゃって、みんな。（笑）

いとう　世代間の較差は昔からあったんじゃないかな、永遠に続く課題。やっぱり、一つの芝居をいっしょにやって、そのなかでわかりあっていく、お互いに変わっていく、その積み重ねでいくしかないんじゃないかなあ。

演出とのかかわりはどうなのか

藤井　演出者によってずいぶんちがうんですよね、テーマや展開を明らかにし、役の役割を示しつつ稽古をすすめる演出者もいるが、やりながら考えていこうとするひとが多いのかな。うちは演出経験者がけっこういるんだけど、どっちにしても、役者の側からいうと、役者の自立が求められているんだ、と思ってる。

重野　うちでは、かなりお年の方が多いからかもしれませんが、演出と役者との緊張関係ですすむというより、じっくりかまえて稽古をすすめる場合が多いようです。わたしは稽古場が楽しくなればいいなあと思っていて、役者の方からどんどん意見も行動も出さなくてはということでしょうがねえ。

森本　演出のねらいと自分の思いとがくいちがうこともありますね、そんなとき、わたしはうまくしゃべれないんで……無言の抗議を続けます。（笑）そのときは、他の劇団員にきくのがいいですね、よく見てくれてますから、参考になることが多い。

安原　演出とぼくとの役のイメージのつきあわせは上演1ヵ月前くらいからはじまるのかなあ、その前の5ヵ月、演出は新人教育にもっぱらかかりっきり。

演出との仕事では、いわれるとやはり気がつくことがある。演出は客観的にみているところがあるから、素直にきいて……なるべくね（笑）、表現を直すようにしている。

清水　中堅以上が増え、演出と役者

とが互いの腹の内をよむことができるようになり、鋭いかかわりをもたなくなっている傾向。役者が成長していく努力をする一方、演出も劇団の中で育っているという実態をつくりたいですね。

藤井　油断してるとどんどん後退していくでしょ、経験主義におち入るしね。常になにかに挑戦していないとダメになる。演出も役者もそれは同じ。うちでは、立稽古に入るときには台本をはなしましょというのが不文律になっていたけど、そうじゃない傾向が目立ってきた。自分では必死になって守ろうとやっている、すると藤井さんは特別なんだという目でみる、わかっちゃいないなと思うよ。

みんながそれぞれなにかに挑んでいるといい劇団になり、それがいいアンサンブルになるんだろう、と思うんだけれど、それがむずかしいんだ。

護柔　演出に〝護柔、お前にまかせる〟といわれちゃうと、正直のところ、さてどうする、とわからないことがある。新しい刺激、自分で問題を持ちこんでこないと、演技も芝居もよくならないことはわかるんだが。

ときには演出の視点から全体や自分の演技をみてみることが必要かもね。

司会　みんなの尻馬に乗っていえば、演出はベテランの役者とこそ勝負しなくちゃいけないんだね、創造的にね。そして役者の方も、ほっとかれて、手前で創るってんじゃなくて、演出に挑むということがないといけないんでしょうね。その勝負の姿が、若い連中にも、背中見て育つというわけじゃないけど、刺激を与えることになるんじゃないかな。

さて、演技の発見、アンサンブルなど、いろいろ話していただきましたが、作品とどのようにかかわるか、さらに、作品と役者の間に演出者がいる、その演出者とのかかわり方、など、もう一歩、深めたいところで予定の時間をこえてしまいました。今日の座談会を契機に、次の機会を設けたい。できれば、参加者がお互いに舞台を見合って、より具体的に演技創造を論じあえるといいと考えます。

各劇団の創造方法の違いもあり、現実的には劇団間での互いに創造問題を論じ深めあうことは少ないが、ここでは役者が劇団の垣根を越えて論じ合うことができると信じ、今日はその第一歩ということで終ります。

みなさん、ご苦労さまでした。

馬山あげての演劇祭

議長　こばやしひろし（劇団はぐるま）

1

名古屋空港を18時、釜山まで1時間20分。釜山空港には、翌日本番で仕込みの最中にもかかわらず名芸の栗木さんが迎えてくれた。知人がまったくいない空港に降りるのは不安なものである。栗木さんの顔を見てほっとした。馬山まで60キロ約1時間という。日はすっかり落ちていたが、高層ビルの灯が目に入る。見違えるような近代国家である。

私は植民地時代、父が当時の京城で女学校を経営していたので釜山を何度か通っている。汚くて臭くて貧しい釜山である。韓国人にとっては祖国を奪われ、その祖国を後に日本に向かわなければならない、恨みの釜山でもある。それが今や韓国の堂々たる玄関口なのだ。歩いている人の目も輝いている。女性も美しい。私にとっては感無量のものがあった。

高速道路に入るやトラックや乗用車がぐんぐん飛ばすが、道路標識はハングル文字ばかりで馬山にあと何キロかまったくわからない。漢字がまったくないのにはまいった。この旅で漢字があったらと何度思ったかわからない。

ホテルでは副会長の李光硯先生の出迎えを受けた。先生は慶南新聞の編集長だった人で詩人ということである。神奈川県の藤沢市で生まれ、小学校で敗戦、韓国に帰ったといわれるが、日本語は遠いかなたである。なかなか通じない。改めてまったく韓国語に無知の日本人の体質を考えざるをえなかった。英語は学ぶが、隣国の韓国語は学ぼうとしないのはなぜだろう。読者も一緒に考えてもらいたい問題である。大切な対等の国と思ってこなかったからに他ならない。

そうこうしているうちにいよいよ明日本番の名芸や仙台小劇場の人々が仕込みから帰ってきた。会長の李相龍（サンヨン）先生も現れた。私の顔を見るなり、「小林先生ようこそようこそ」と手を出してこられた。私は手を握り返しながら「お言葉に甘えてまいりました。お世話になります」と日本語で答えるしかなかった。李会長は英語も自由に使えるのに、私は国際人でないとしみじみ恥ずかしく思った。

馬山国際演劇祭振興会の李会長（左）と全り演からのおみやげのダルマを贈る筆者

歓迎パーティーは10時から始まった。モンゴル、中国、ベトナム、シンガポール、それに日本である。日本勢は明日出演する名芸21人、仙台小劇場14人、それに私たち顧問団というか、見学団が7人、馬山国際演劇祭と最初に道を開いたすがおの加藤さん、京浜の城谷夫妻、福井たけぶえの柴野さん、劇団大阪の清原さん、石るつや埼芸に出ているフリー川島さん（池袋小劇場）と私である。パーティーでも日本人が半分占めていた。

大変なご馳走である。私は機中で軽食が出たのでビールを飲むだけであった。李会長から最初に私にスピーチが指名された。いきなりで私は慌てたが、子どもの頃の、あの貧しい釜山とともに独立がどんなにすばらしく、尊いものか、私の頭は一杯になった。「独立がどんなにすばらしいものか、目で見、肌で感じました」といったら、もうそれで胸が熱くなった。植民地朝鮮にかんしてはいえば子どもの頃の友人を含め、今どこでどうしているか、言いたいことできりがない思いでした。思いのまま話すので通訳のことに気づかなかった始末である。

通訳は梁秀美さん、慶南大学の4年生である。細身のなかなかの美人である。私は帰国の前夜までお世話になった。

アオザイの似合う
ベトナムの劇団のみなさん

モンゴルの劇団の人たちに愛嬌を
ふりまく城谷護とゴローちゃん

2

馬山国際演劇祭は14日から23日まで10日間、10ヵ国22劇団の競演である。岐阜と同じ40万の都市とは信じられない。百万都市ではないかと思われる活気である。片道4車線の道路が交差し、車でいっぱいで夜の12時ごろまで人と車が通っていた。

私は実質15、16の2日だけであるから、韓国の2劇団と日本、ベトナム、モンゴルの5劇団しか見れなかった。

最初の日の日程でいくと、名芸の「楽屋」が2時、4時であり、仙台小劇場の石垣政裕作／演出の「いつか夢の後で」が4時であるが、前日から上演されている開幕劇韓国のヨンヒダン劇団の「オグ」が大変な評判なのである。それが3時半と7時半に上演され、7時にはオープンセレモニーが開かれることになっていた。オープンセレモニーにでないわけにいかないので、4時の仙台小劇場を諦め、名芸とヨヒンダン劇団の「オグ」を選んだ。

劇団名芸「楽屋」

外国で芝居を上演した経験はないので言葉の壁をどう乗り越えるのか、それが心配である。名芸は日本語でやるという。仙台小劇場は4割ほどのセリフを韓国語で表現するという。舞台を見ていないので何ともいえないが、日本語でも生きたセリフとしてなかなか観客に伝わらないのに、韓国語で素直に観客に溶け込めるのか、数年日本にすんでいる中国人や韓国人でも相当なまりが出ることを考えると言葉の壁は簡単ではないと思う。毎年のようにこの演劇祭に参加しておられる柴野さんと名古屋空港から一緒だったので、観客との関係について聞いたところ、案の定、観客は少ないというのである。ほぼ5分の1ぐらいしか入っていないという。5分の1では舞台が沸くはずがない。

名芸は栗木慶子さんが舞台のシチュエーションを英語と韓国語で導入していた。通訳の梁さんがとてもお上手でしたとほめていた。ほめられていいというものでない。無理がない、意外にいいということかもしれない。それが舞台の難しいところである。

仙台小劇場も観客と違和感は感じなかったというが、仙台の観客と同じというわけにはいかないと思う。名芸のお芝居で何より救われたのは会場である。地下のL字型の客席に囲まれた小劇場で50人も入れば満席の感じになることだ。それだけでも役者は救われたと思う。それでも異国の観客に、言葉が通じない観客に囲まれているという緊張感からは解放されてはいなかったようである。

「いつか夢のあとで」

力いっぱいの演技だった。

そしていよいよ評判の韓国劇団である。劇団名はヨンヒダンコリペというのだがソウルの劇団で町の仲間という意味らしい。題名は「オグ」通訳の梁さんは葬式の5つの行為と訳してくれたが、作・演出はリーデックという。漢字に直せばと聞くと、李潤澤というのだろうか、といわれる。何しろハングル文字は表音文字で、ひろしといえば博もあれば宏、弘、浩、寛とあるように、いろいろな漢字が想定され、確定できないというのである。主役は姜富姉、この人は有名な女優らしい。初日のパーティーにも出席しておられた。

ノモ婆さん（姜富姉）は夫を太平洋戦争にとられ、女手一つで子どもを育て、今は孫もいる。2人目は嫁のおなかにいて臨月である。幕開けから非常に民族的な味が舞台に充満していて実に楽しい芝居であった。のんびり新聞を読みながらの息子の歌に合わせてお嫁さんが忙しく棒でたたいて洗濯をしている。そのリズムに合わせて孫が踊るのだが、たたく棒のテンポがすごく早くなったり遅くなったり、それが実に楽しい。それでもう拍手であり、客席は完全に舞台に引き込まれた。

ノモ婆さんとのやり取りは韓国語だからまったくわからないがくり返しの爆笑である。そうこうしているうちにうとうとと眠ると舞台奥から敗戦日本のみすぼらしい軍装の夫が現れる。肩のたすきに大東亜戦争と書いてあったように思う。2人は耐えられなく抱きしめる。若い二枚目だから最初は息子かと思ったが、死んだままだから戦争で死んだ夫とわかった。夫は出てきても常に無言である。

そこへ客席から楽隊が入ってくる。みんな民族楽器である。ノモ婆

さんの長寿を祝うお祭りである。楽しい踊りが舞台いっぱいに展開されるが、たびたび爆笑に包まれる。それがわからないのが淋しい。踊りのテンポも速い。極限に迫るテンポだ。臨月の嫁も夢中になって踊りお腹を抱えて産気づくのだが、それがまた爆笑を誘う。ノモ婆さんも楽しく踊りに入る。その途中で倒れる。兵隊姿の夫が迎えにくる。二人は手を取り合ってあの世に向かう。それで一幕を終わり、二幕は葬式で始まる。

これがまた民族色豊かで爆笑爆笑なのである。死体を棺に入れるまでの爆笑は文字で表現できない。硬直した死体がペキペキと音をたて、死体を扱う人と死体の演技表情には客席は悲鳴を上げての笑いの渦だった。ノモ婆さん役の姜富姉の死体になってからの演技力表現力はたいしたものだ。死体だからセリフはないが腹を抱えての爆笑をつぎつぎ誘発させるのである。

葬式も終わってノモ婆さんのお徳がどうか知らないが、たくさん香典が集まったが、その金を中心にドラマは展開する。その多くを次男の息子が抱え込み、博打をしたり、遊びにつかったり、そのあたりの経緯は言葉の壁でわからないが、それをあの世で耐えられなくなった婆さんが再び現れるのである。そして一族全部を叱り飛ばす。むろん、次男から巻き上げる。下着の中から靴下からいっぱい金が出てくる。ノモ婆さんはその金を取り上げ、舞台いっぱいに撒き散らすと、兄弟親戚が、またそれを夢中になって争い拾う。そうすると大きな大きな男根をぶら下げた鬼なのか、七福神なのかわからないがあの世からでてくる。これがまた客席を沸かしていた。一幕四場二幕四場であるが、役者が場割をめくって次々と展開するのである。楽しい芝居だった。これを見ただけで馬山にいった価値があったと思った。

本番を待つ劇団名芸の21人

3

その後のオープニングセレモニーはMBCホールの広場で行うことになっていたが、雨で昨晩と同じロイヤルホテルで行われた。馬山の政財界、文化人の出席のパーティーである。春川の国際演劇祭の朴完緒会長、ソウルから韓国を代表する演劇人も出席していた。昨夜の倍の賑わいと華やかさである。アルコールがまわるうちに各国のテーブルは大変な盛り上がりようだ。モンゴル語が、中国語が、英語が、韓国語が飛び交う。まさに国際演劇祭である。

翌日16日も雨である。昼アリランホテルに案内された。馬山演劇フォーラムとかかれた部屋に案内された。各国の代表を集めてお別れパーティーだという。確かに私は明日帰るのだが、なにか私のために開かれたような思いすら持った。どうして財政的にまわっているのか不思議でならなかった。1劇団15人として20劇団で300人である。3泊しても1000人近い。1泊5000円にしても500万である。それに連日の華やかなパーティーである。李会長に「どれほど助成があるのですか」と失礼を承知で聞いたが、会長は「ほんの少し」というだけで答えてくれなかった。

通訳の話では「国から2億とか3億ウオン助成されていると聞いています」という。これでは正確な報告にならない。ただ地元の財政界人を集めるオープニング・セレモニーを見ても李相龍会長のすごい政治力であることはわかる。悲しいかなわれわれには縁の遠い政治力といっていい。どちらにしてもそのおかげで、大名旅行なのである。呑んで食って車でホテルから会場へ、会場からホテルへ送ってもらって、釜山に降りてからすべて馬山国際演劇祭もちで金はまったく要らないのだから驚く。せめて入場料と思ってもうけとってくれない。

私が観た韓国の劇団の入場料は30000ウオン。平均の給料が100万から200万ウオンという。安い入場料ではないと思った。私は少なくとも参加劇団以外のわれわれは滞在費を出すべきだといったが、いいといわれる。それで甘えていいのか疑問に思った。政治力のないわれわれにこのお返しはとてもできないからである。

その日、同じ4時から中国の京劇と韓国の芝居がダブルのだが、せっかくだから韓国の芝居を見ることにした。ソウルの専門劇団のようである。馬山の東隣の昌原市の文化会館が会場である。奥がお盆、上手がスライディングの3面舞台である。どこへ出しても恥ずかしくない。芝居はその立派な設備を使いこなしていなかった。題名は「泣いて登るパッタリ」。パッタリというのは坂の名前である。その坂で出会い、その坂で別れるドラマの展開である。

地主パク家の奉公人シークッポン

観客の高校生たちと

にパク家の大学生の長男が子どもをつくってしまう。親は絶対に認めない。認められないまま長男は大学に戻るが、それでお別れである。しかし、シークッボンのおなかは大きくなり、男の子が生まれる。長男の子と認知できない鬼のような親は無理やり子どもを取り上げ里子に出してしまう。それが出会いから別れ、歌になるなと思うと演歌調の歌が歌い上げられるのである。しかも生演奏。悲しいときは悲しく、必ず音楽が入る。客席からはそのたびに拍手が沸き起こる。子どもも奪われ、追い出されたシークッボンはクラブの歌手として華やかに成功する。パク家の長男は他の女と結婚するが麻薬で没落する。そしてシークッボンを頼ってくる。その三角関係でシークッボンは殺されかけるがもみ合うなかで逆に殺してしまう。そして裁判になる。ところが検事は里子に出した子どもなのである。その検事が死刑を求刑し、最後、検事服をぬいで被告のシークッボンに「オモニ、オモニ」とひざまずき泣き崩れるのである。そうだと思っていたがじわっと涙が出るから不思議だ。

日本の「滝の白糸」の移し変えである。言葉の壁はまったくない。ここで歌になる、ここで拍手がでると思うとそのままその通りになるからセリフなんかあまり苦にする必要がないのである。古いというよりこんな大衆劇がまだ韓国にあることに驚いた。

その後、繁華街での特設オープン舞台でのモンゴルとベトナムの出演である。モンゴルはロックである。最初から手拍子の出るなかなか活気あふれるロックだった。それに比べベトナムのマイムは地味で派手なロックのあとだけに気の毒だった。この前座に城谷夫妻の「ゴローちゃん」が出演した。戦争責任を韓国語でいったのだが日本語でないのでとちりでアドリブが効かない。奥さんのプロンプで切り抜けていた。

その晩も代表だけでなく全参加者のパーティーがあった。どれだけの財政規模なのかまったく想像もつかない。韓国のエネルギーと素直に受けていいのか、翌日釜山を離れても私はこの熱い熱い心のこもった接待の負い目から逃れることはできなかった。

北京演劇事情

―訪中記

津田　伸
（前進座座友）

昨年10月8日から13日まで6日間、日本演劇協会友好訪中団の一員として中国演劇界の方々と交流する機会があった。メンバーは団長・津上忠（日本演劇協会専務理事、劇作・演出家）、副団長・松原剛（日本演劇協会会員・元日本大学芸術学部名誉教授）、秋元実（日本演劇協会監事）、渾大防一枝（演出家・劇団民芸）、披岸喜美子（女優・劇団民芸）、松井昌彦（舞台芸術学院総務主任）、それに私ども夫婦である。

●8日（水）

成田から中国東方航空で北京空港に15時着、約3時間のフライト（時差は1時間）中国国際旅行社の通訳金誠氏の出迎えを受け天壇の近くにある宿舎新北維飯店（レインボーホテル）に向かう。国慶節が終わったばかりで天安門付近はまだ慶祝の装飾があちこちに残っている。

ホテルでの夕食に舞芸1期の同級生（津上・披岸・伸）である陳明氏夫妻、彼らの長男夫人馬馳女史、劉平（中国社会科学院文学研究所副研究員）氏、康勝利（松原先生の教え子）女士などと会食しながら打ち合わせ。

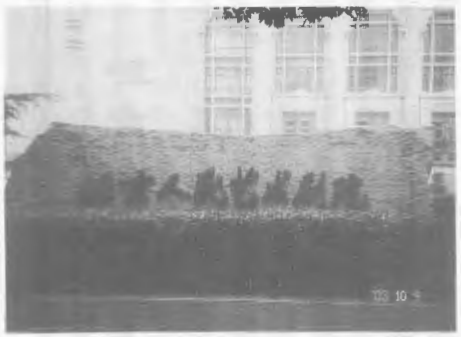
さっそく17時30分から京劇「拾玉鐲」「孫悟空」を梨園劇場（前面飯店内）で観劇。ここは観光的劇場で土産物もたくさんあり、女優などと記念撮影（有料）もサービス、また廊下で役者がメークをしていて写真撮影OK（無料）、珍しい隠取を見ることができた。演技力は今ひとつだが観光としては充分である。入場券の裏に中国語、英語、日本語、フランス語で［中国国粋―芸術性としての京劇は無限な魅力の展開］とあった。客席には欧米人もかなりいた（入場料150円）。

●9日（木）

10時、北京人民芸術劇院訪問、ここは首都劇場の中にある。1960年、前進座がこの劇場で、歌舞伎（「鳴神」「俊寛」「勧進帳」「佐倉義民伝」）の公演をしているから、筆者は実に

43年ぶりに訪れたわけで、そのままのただずまいに懐かしさがこみ上げてきた。

裏手にある本部会議室で任鳴副院長と会見、院長は現在空席とのことで、氏はまだ30代に見える若手だが、いただいた名刺には国家一級導演（演出家）で北京劇場導演委員会主任、北京青年連合会副主席とあり多忙であるらしい。劇場を垣間見ると次の芝居の仕込中で舞台一面に木



北京人民芸術劇院（うしろが首都劇場）

煉瓦を敷き詰めており日本では考えられないテンポだ。併設されている小劇場は初日とのこと。

実は筆者など卒業した舞芸は、54年頃行政命令で校舎を移転せねばならなくなり、その建設資金を募集していて、院長の秋田雨雀先生が親しかった中国戯劇協会会長郭沫若氏に建設資金援助を依頼、55年12月、訪日中国戯劇協会の方々が1万元（邦貨約152万円）を寄せられ建設が実現することができたということがあったのだが、その御礼もまだ正式にしていないので今度の訪問の目的の一つにもなっていた。

劇場内に併設されている曹禺記念館に案内される。書斎、客間などが再現されており、「雷雨」の舞台装置模型も展示されていた。

次いで中央戯劇学院訪問。徐翔院長、劉国富書記などと会見、2人とも画家とのこと、徐院長は日本

人民芸術劇院の中にある曹禺記念館の「雷雨」の舞台模型

に半年ほど留学したあと就任したそうだ。創立は1950年で新中国になって最も早く創立された高等芸術学校の一つで、延安魯迅芸術学院、華北大学文藝学院、南京国立戯劇専門学校を合併したものである。著名な戯劇家欧陽予情など多数の一流演劇人の指導を受け校庭には氏の胸像が花壇の中にある。

敷地は全部で約4000坪ほどあり行政棟、教学棟、稽古場、体育

館、食堂、寄宿舎などがあり、必要に応じて増改築され、図書館だけでも約600坪37万冊の蔵書を擁している。また国内先進的水準を持つ実験劇場があって学生の上演実習に供している。学院は北京市の中心にあり、天安門、故宮、景山・北海公園などの名勝、旧跡に囲まれ、また首都劇場、中国国家話劇院小劇場、中国児童芸術劇院劇場、北京音楽ホールも近くにある。

学科は演技、演出、戯劇文学、舞台美術、映像芸術、芸術管理（文化行政管理）コースがあって、定員（本科4年制）330人。他に修士、博士課程の研究科があり、学費は本科年1万元。また2001年、成人教育学院を併設、別の敷地に約千坪の校舎があり1200余人が学んでいる。さらに03年には影視（映像）芸術職業専門学院を開設した。学業成績優秀者には奨学金制度があり、国と学院から技能に応じて500元から1万元支払われ、生活困窮者には学費が貸与される。在籍者は全部で2550余人に達し、教職員は311人で内訳は教授23人、副教授53人、講師39人、国家級専門家1人、博士課程教師13人、修士課程教師33人である（以上同学院03年度入学案内による）。

会見後、教室で劉立濱副学院長指導の話劇稽古見学、舞台美術コース実習デッサン教室見学（石膏像）。昼食はなんと学院の接待で四川料理を〝巴国布家風味酒楼〟でご馳走になる。

午後は中国国家話劇院訪問、趙亮院長はジーパン姿で気さくに談笑、50代後半だろうが若々しく二枚目だ。

ここは国立劇団（NTCC）で01年12月、中国青年芸術劇院と中央実験話劇院が合体して創立された。最優秀の才能ある舞台、映像俳優により豊富な伝統を探索継承発展し、高水準の優れた話劇芸術を表現、生産する基地である。NTCCは品質ともに高い内外の優秀話劇芸術作品を創作演出し、同時に戯劇舞台の教化性、実験性を不断に追求し、終始世界と民族の先進文化の成果を体現することを目的としている。

ここで院長に今日初日の当話劇院の入場券を無心すると初日のため、ばらまいてあって3枚だけなら何とかなるとのことであった。しかし我々が帰るときマイクロバスに乗り込んで「再見！」と手をふって別れを告げているところへ自転車であと5枚の入場券をかざして、走りこんで来た人がいたのだ。一同さすが政協委員（日本でいえば国会議員に当たる）と感嘆したものだ。券は1枚10元。

開演は7時15分。北京人民芸術劇

中国国家話劇院
趙有亮院長

院（首都劇場）小劇場に《恋愛的犀牛》を観に行く。直訳すれば〝犀の愛〟だが飼育係の恋愛だと言う。

開演の調べが鳴り、下手から1人の男がギターを弾きながら出てきて木製の椅子に腰掛けて唄いだす。そこへまた1人でてきて弾語りの男を椅子ごと倒して体を上手へひきずっていく。男は演奏と唄をやめない。というシーンから始まった。客席はほとんど若い男女だ。再演もので初演（99年）は好評だったが評判が出た頃には終わってしまい、今度は大分演出も改められ03年版として期待され、見損なった連中がつめかけているらしい。ちょっとミュージカル喜劇仕立てで客席は笑い声が絶えない。ただし違和感があったのは、初日なのにTVカメラやカメラが狭い舞台前をあちこち動きまわって舞台や客席を撮りまくって目障りになったことである。日本なら舞台稽古の時に済ませて客が入ったら許されない。

カーテンコールでは演出の孟氏も舞台に出てきて花束を受け、いろいろ話して客席には共感の笑いが盛上がった。聞くところでは明明を演じた主演女優の郝蕾さん（00年上海戯劇学院演技部卒）は孟氏の夫人という。どこかポーランドのクラクフ大学教授で俳優、演出家（シアターコクーンで「真夏の夜の夢」のパックを演じた）ペシェク氏が（シアターX）でワークショップをやったときの演出手法に似ていた。また女優の演技も随所に京劇風の仕草が取り入れられているように思われた。

●10日（金）

晴れた北京の秋を期待して行ったのに一向に天気が勝れず曇っている。午前中は中国戯曲学院訪問、団長、副団長は社長勝院長と会見、その間我々は稽古場で男子、女子生徒などの基本訓練を見学、また大、小劇場も見学。劇場入口のロビーには【徳芸双馨継往開来】という江澤民の揮毫が大きく掲げられている。中国戯曲学院は京劇教育の最高学府で唯一の高級京劇俳優を養成するところで、全国のさまざまな劇種を英才教育する大学である。劇団、中等芸術学校及び放送局、テレビ局、大、小劇場、体育館、教室、図書館、寄宿舎を擁し、高、中級の人材を教育する任務を持っている。

学院は1950年中国戯曲学校を基礎とし、始めは文化部（文部省）

戯曲改進局戯曲実験学校と称し、55年正式に中国戯曲学校と制定。78年新しい京劇教育の発展需要に応じて高等学府に改制、中国戯曲学院と改名、80年中専部を設け引き続き中等京劇芸術家の培養を強化した。85年中専部を中国戯曲学院附属中等戯曲学校と改めた。学院は建学以来4回校舎を変えた、始めは東城草垛胡同にあったが、中華人民共和国建国50周年記念にあたり、現代化した新校舎を豊台区万泉寺に落成、00年教学区全部が入った。

学院は演技、演出、音楽、戯曲文学、舞台美術、芸術教育など6コースと成人教育弁公室がある。本専科教育のほか、95年より修士学位研究生制度を開始、96年〝中国京劇優秀青年演員研究班〟を発足させ、成人教育と留学生教育をも開始、全日制本科教育体系を確立。

建学当初は内外に有名な梅蘭芳、尚小雲、程硯秋、荀慧生の4大名優が来校して授業、京劇教育の改革と発展の需要を確保した。

50年代以来養成した5000人近い高、中級の人才は全国各地の舞台上下、劇場内外でそれぞれ中堅となって活躍している。

学院敷地は約1万6000坪、総建築面積は約1万8000坪。建築費は60億になるという。一演劇ジャンルでまったくうらやましい限りである。しかも放送設備などは北京市内のどこよりも最高最新であるという。また緑化美化問題から約5800坪、総面積の約36％を花園に造園する予定である。

演技コースは高級京劇演技専門人養成の基地として、78年創立以来400余人が卒業。演目、肉体訓練、声楽、京劇上演史など。現在国家1級俳優教授7人、国家2級俳優副教授8人、他に20人を越える客員教授などと共同して演目など主要な課程を教育、毎年卒業公演で教学の成果を対外的に発表、海外公演も数次出演し、学院と国家は大変高い評価を得ている。

中国戯曲学院全景

演出コースは京劇演出家を養成する基地である。20余年にわたって研究生、本専科生と修士生300余人を養成。さらに映像演出も加えている。

音楽コースは京劇の作曲と京劇の器楽演奏人を養成する基地である。作曲と作曲技術理論と音楽演奏の2学科と4専門科（多劇種作曲、MIDI音楽制作、京劇器楽演奏、民族器楽演奏）を漸時形成涵養してきた。京胡課、古箏課、弦和課、コンピューター作曲課などもある。

戯曲文学コースは京劇の編成、並びに映画、TV脚本の創作を実践中で80年に創立、20年来本専科生、修士生を培養し、既に院団の専業演出創作の中核である。

戯文コースは現在、18コースで中国及び西欧の劇場史や文学史を学んでいる。既に才能ある学生たちは協力して北京でおよそ70の小公演を発表している。

中国戯曲学院　女子学生の扇の使い方訓練

舞台美術コースは国内芸術学院校中最も影響を持つ三大舞台美術系の一つである。

芸術教育コースは98年創建され、京劇舞台美術、演技、音楽教師の3専科を開設。

学制は本科4年、専科2年、夜間大（職業人）3年、通信大（職業人）3年、専科修了後本科昇級は2年。

留学生コースは92年招収して以来、米、英、独、スイス、仏、日、韓国の留学生と中国辺地の蒙古、香港、台湾などの学生合わせて前後250余人来校学習した。留学生に対しては京劇演技、音楽、演出、劇文学と舞台美術などを主要課程として開設した。学制は1、2年の短期高級進修班、4年制本科、修士研究生であり、京劇のほか中国語の学習班も開設している。外国留学生と香港、蒙古、台湾の中で8人が北京国際アマチュアコンクールで1等賞、1人が2等賞を獲得した。その中でドイツ人留学生カルツェン・グンデルマンは童話《夜鷹》を京劇に脚色、作曲し、国内外から好評を博した。留学生の寄宿舎設備をさらに優雅な環境と清潔安静にしていっそう多くの留学生が来校学習されることを歓迎する。

ついで北京京劇院へ、時間の関係でここは団長、副団長が表敬訪問、弁公室主任常保全氏に会見、03年度「日本演劇年鑑」贈呈。「北京京劇院簡介」をいただく。京劇院は79年創立された。その前身は梅蘭芳、尚小雲、程硯秋、荀慧生など〝四大名女形〟といわれる流派と馬連良、張君秋、譚富英、裘盛戎、趙燕侠などの主演する北京京劇団である。

京劇院といえば、56年梅蘭芳存命で東京でも公演され、60年筆者訪中の際も周信芳、馬少波などが活躍していて《貴妃酔酒》の妖艶な演技に感嘆したものだが、66年の文化大革命で弾圧され、自殺者もでたのだがこの簡介にはまったく触れてなく79年に再建されたものと思われる。60年当時は戯曲学院の卒業生たちが先輩の第一団についで第二、三団、を結成して公演していた。いわゆる〝百花斎放、推陳出新〟の時代だったのだが、今はその断絶を一生懸命埋めているところだろう。

最近日本でも京劇公演があり、上海雑技団の公演もあったのでご覧になった方もあると思う。

昼食後、もう一つの訪問目的である保利劇院に向かう。日中友好条約締結25周年、鑑真和上日本東渡1250周年記念。井上靖原作、《天平の甍》（北京国際演劇祭参加）前進座公演の舞台稽古見学と激励のためである。

ここで思わぬ誤算があった。保利劇院は天安門から東へ約4キロのところにあって、浜松のアクティホールに似た造りでホテルの中にある新しい劇場だ。座の連中に会うため勇んで楽屋口に向かったが中に入れない。藤川矢之輔が顔を出してくれたのだがパスがないと駄目だという。結局入れなくて皆には会えず劇場正面から入ってくれとのこと、客席に入ると、演出の十島英明君や顔馴染の美術の中島八郎氏、東京舞台照明の寺田義雄氏、音響効果の田村惠氏などが客席の通路に折りたたみの椅子に掛けて迎えてくれた。我々一行の席もそこに用意されていた。キャパシティは1300といったところか。少し勝手が違うと思いつつも開始を待っていると「どうぞ客席の柔かい椅子に掛けてください」と連絡がきた。同時にスタッフも客席に掛けてよいことになった。つまり我々を日本の演劇界を代表する者と認めてくれたのだ。後で十島君が「君らのおかげで客席に掛けられたよ」と苦笑いしていた。それまでずーと客席に掛けられなかったようだ。

一事が万事で舞台稽古にかかるまで大変な困難があったようだ。通訳を通してのスタッフ間の言葉の不自由、生活習慣や民族性の違いからの想像を絶する行き違い、劇場管理の

厳しい規制、バトンひとつ下ろすにも日本の舞監が合図してそれを中国側の責任者がボタンを押す人に合図してやっと降りるといった具合で、しかも電動だと舞台から10センチ上で止まってしまう。交渉しても頑として下ろしてくれない。結局手動にして解決するといった具合だ。聞くところによれば事故があったようで規制が厳しくなったようだ。仕込み最中でも休憩は仕事の区切りでなく、12時になればピタッと止め、夕方も5時になればストップだ。が、揚州の揚州大劇院、上海の話劇芸術センターでは全部座側に任せてくれたのでトラブルはなかったようである。

予定より5分遅れて開演の銅鑼が鳴り渡り、団伊玖磨作曲の壮大なテーマ曲が流れるなか『天平の甍―鑑真東渡』のタイトル。ついで唐の女性に扮したナレーターが華麗な衣裳で落ち着いた中国語で時代背景を語りかける。これは予期しなかっただけに正直圧倒された。聞けば扈斌(ウーピン)さんといって国家話劇院の一級俳優で、もうすぐ定年で教授になるということで解放軍の劇団出身だそうだ。各場面をつなぎ中国人の観客の理解にとても効果を上げるように思えた。劇団の連中には会えなかったが（舞監でさえも客席におりてこれないのだ）明日の初日の成功はまずまずと思われた。終わって6時から劇場近くの亜州大酒家でオープニングの招待会に出席した。中国側を代表して中国対外文化交流協会常務副会長（中国共産党文化部前副大臣）劉徳有氏が通訳なしで中国語と流暢な日本語で歓迎の挨拶をされた。

「今年は中日平和友好条約締結25周年、鑑真和上東渡1250年で、この二つを記念するために前進座は《天平の甍》を携えて来訪されました。

保利劇院の正面　前進座が公演した

そして鑑真和上の里帰りが実現できました。私は中国側を代表して心から歓迎します。前進座は中国の観客にとってなじみの深い劇団です。前進座の皆さんの素晴らしい舞台を大いに期待しております」。

パーティにはおよそ200人の方々が出席。河原崎国太郎の江戸情緒あふれる日舞《お祭り》も披露され、演劇、仏教、他各界の方々が出席されあすの初日の成功を祝った。この夜、パーティに出席しなかった4人は京劇鑑賞、団長と秋元監事は夜行で南京へ。

●11日（土）

ついに天候は崩れ雨もよいで風も強く寒くなってきた。初日は劇場ロビーに中国政府文化部（文部省）、人民対外友好協会、日本国際交流基金中国事務所などから贈られた花輪がずらりと並び、阿南駐華日本特命全権大使夫妻、〈《天平の甍》里帰り公演を支援する会〉の鵜川会長（桐蔭学園理事長）、中江利忠副会長（元朝日新聞社社長・現顧問）、宮腰栄一桐蔭学園理事長代理一行など、満席の会場に若い人たちは戯劇学院や日本語学科の学生たちである。

中国訪問公演の前進座
パンフレット

◎初日の新聞評

「10月11日〝北京国際演劇祭〟の最終に、外国の演劇《天平の甍―鑑真東渡》が保利劇院で上演された。この芝居は39年前に日本で初演。団長であり主演の嵐圭史氏は「この公演は39年来の夢だった」と語っている。歌舞伎俳優として氏は《天平の甍》の中で歌舞伎的形式をとり払い、現実的な表現で演じている。舞台は大変精緻で優れており、気品に満ち溢れている。感動的な物語は観客に深い印象を残した。この芝居の壮大な歴史背景は、今日の国内、海外の演劇祭参加演目の中で、最も充実した内容の濃い作品となった。中国の古典的な寺院の情景は真に迫っており、道具から衣裳に至るまで、中国の特長をとてもよく活かしている。出演俳優は皆日本語でセリフを言っているため、観客は字幕を見て初めて言葉が理解できるのだが、拍手は知らずと響き渡っていた。この芝居全体の中で、隣国日本が中国の古い文明を非常に礼賛していることを観客は深く感じとった。（北京日報）

昨夜、日本の前進座劇団が《天平の甍―鑑真東渡》を保利劇院で上演した。全体を通して最も光るのは、鑑真和上に扮する嵐圭史氏である。彼は歌舞伎の発声技法を鍾真和上を演ずる中に取り入れ、セリフは落着いておだやかであり、表現は内面に力強さと強靭さを含み、唐の高僧鑑真が自らを犠牲にして仏法を広く伝えようと東渡した、数々の困難を鋭く再現している。

この公演には歌舞伎的な誇張した表現は少なく、芝居の情況と一致した写実的な表現がより多く使われている。そのため、観客には分かり易い。このように時代の発展に順応し

て伝統芸術の演技術を合理的に活かす技法は、国内の演劇界が参考とするに値する。写実的な表現、上品でおおらかな衣裳、雄大な気宇、重厚な音楽、舞台も客席も、当時の日中文化交流の重要なできごとを再度検証したといえる。（京華日報）

公演は大成功だった。

私たちはこの日公式の訪問を終わり、北京市郊外の日中戦争の戦跡「盧溝橋」見学、雨ますます激しくなるなか石の橋をわたる。この橋はマルコ・ポーロも見ていてその美しさを愛でマルコ・ポーロ橋とも言われているとのこと、橋の欄干の石柱は全部違った動物の彫刻であった。洋の東西を問わず、時代を問わず戦争は常に嘘と欺瞞から始まったことを痛感する。周りは今も農村地帯だ。橋のたもとにある中国人民抗日戦争記念館見学。中国国民党空軍の写真など、初めて見るものもあった。私の記憶では中国に空軍があったという事実は全然知らされてはいなかった。市内に戻り雨と強風のなか天安門、故宮参観、その夜は朝陽劇場で雑技公演観劇。

盧溝橋上に立つ筆者

●12日（日）

松原副団長は中央戯劇学院、中国戯曲学院、舞台美術学会、国家話劇院の方々と検討会。

○日中両国演劇交流の在り方

○12月、中国舞台美術南京展への招聘

○2005年秋、日中演劇交流50年展北京挙行

○在日中国人演劇家たちと交流支援組織など

他のメンバーは八達嶺（万里の長城）、明の十三陵の内の定陵、頤和園参観、長城付近は昨夜雪が降り例年より1ヵ月半早く寒波が来たそうだ。しかしやっと空は晴れてきた。

その夜は友人一家の招宴で北京ダックをご馳走になる。

●13日（月）

午後3時20分北京空港発、7時20分成田空港着。

以上が今回の訪中行のあらましである。中国は市場経営を取り入れつつあるというが、人民を主人公として強力な国家の力を背景に文化事業のインフラを整備して後継者を養成している。わが日本は自民党政権の行政下で文化団体は喘いでいる。駆け足の不充分な視察であったが、このことを強く感じた次第である。

（2004年1月23日）

劇団を訪ねて

〈劇団「ひの」〉

「日野にルネッサンスを！」

よしだはじめ

2月29日、劇団「ひの」の稽古場で、関東ブロックの「新春交流会」がもたれた。8劇団と個人加盟者3人、参加者50人近くの盛会。「東京芸術座」若手のエネルギッシュなダンスにはじまり、劇団・個人それぞれの活動報告（を手みじかにすませ）、飲み、食い、（歌い）、語る、たのしいときを過ごした。

その後、劇団「ひの」では、この日出席した劇団員10余人の感想を載せたパンフレットをつくって、集まった人たち・劇団に送った。多くの参加者があったことへの驚き、刺激をうけた経験が口々に語られているが、そのなかに、

「想像していたよりご年輩の方が多かったのには、ああ、僕も少なくともあんな年までは芝居ができるぞ、と勇気づけられました」田中勉・29歳、「正直に言って、文化人とか芸術家とかいう雰囲気とは、ずいぶん違う――働く人たち、生活している人たちの集まりという感じでした」佐藤伸枝・41歳、「本当にいろんな世代の人たちが、演劇というものを通して盛り上がってるってコトに、感動しました。それぞれの劇団に個性があることから、ふだん自分が思い付かないような考えを相手の人から聞いた」吉田浩巳・18歳という意見もある。

「劇団「ひの」」の誕生は――

「全リ演」にとって、「ひの」はもっとも新しい加盟劇団だ。しかし、1973年に創立され、30年もの活動歴をもっている劇団である。

日野市は東京の南多摩、立川と八王子とのあいだにはさまれ、北に多摩川、南には多摩丘陵がつづく、甲州街道の要衝である。いくつかの大

学が都心から移ってきており、「高幡不動」や「多摩動物公園」などに参詣や行楽の人びとの足が向かう地、今年は「新選組」の土方歳三の生地として、訪れる観光客も多い。

1973年、ここに池上洋通さん、榊原和子さんの2人が転居、「劇団ひの」が誕生する。古い活動歴をもつ人は知っているかもしれないが、池上さんたちは都内でかつて「民衆劇場」として活動していた劇団のメンバーである。

劇団は、創立当初から、地域・自治体と深いかかわりをもっている。昨年発行された「30周年記念」誌によれば、池上さんは、この地を居に定めるや、さっそく市の社会教育課を訪ね、日野に演劇や文学の市民組織があれば参加したいと相談している。〝そうしたサークルがないので、ぜひあなたにつくってほしい、役所もできるかぎり協力したい〟との市の対応、広報紙に何度も「よびかけ」が掲載され、その年5月20日には結団の集いがもたれる。しかも、この年4月、日野に革新森田市政も誕生したのだ。創立にあたって掲げられた「日野にルネッサンスを!」は、劇団のスローガンとして今にまで保持されている。

翌年、日野市児童福祉事業としての、「北風のくれたテーブルかけ」の市内小学校巡演をはじめとして、以降、「市民文化祭」、「憲法記念行事」その他市民・地域の文化活動への参加が継続され、その活動の核ともなっている。そして特記したいのは、「難病集団検診」へのボランティア、「障害者青年学級」への協力を、創立時から一貫して持続してきていることだ。

9つの項目にまとめあげられている「劇団「ひの」目的・創造理念」の冒頭、その第一は、

「劇団「日野」は、よりよき演劇創造をつうじて、市民の文化的向上に貢献することを目的とする」

である。

上演を観て感じたこと

わたしが「劇団ひの」にはじめて接したのは、去年12月21日、清水邦夫作「火のようにさみしい姉がいて」稽古場公演を観たときだった。

舞台は、予想(?)に反して、おもしろく、また表現の質は高かった。ほんとうに狭い舞台空間がたくみにくふうされ、場面の展開はスムーズに流れた。

わたしは、この作品の今の時点での上演は不適当だと「予想」していたのだ。詳しく述べることはしないが、「火のようにさみしい姉がいて」は、作者清水邦夫の、70年代前半の活動を経た1978年の時点においてのみ成り立つ芝居ではないか、とその年の初演をみてからわたしはずっと思っていた。新宿アートシアターでの上演活動、「鴉よ、おれたちは弾丸をこめる」「ぼくらが非情の大河をくだる時」などのドラマ世界、蜷川幸雄の演出、石橋蓮司や蟹江敬三の出演する舞台の時代が終わり、清水自身の木冬社結成、〝流れ去るものはやがてなつかしき〟の副題をもつ「楽屋」につづくドラマの世界、過去と現在へのわかちがたい情念とが混淆する、それまでの総括でもあり新しい作品群の出発、と思っていた。

ところが、この〈現実と虚、歴史と現在の入りまじる、混沌としたたかいのゲーム世界〉は、まさに現代に通用するものであったのだ。そしてそれ以上に、「劇団ひの」の舞台が現代に生きるわれわれに、前向きにさし出しているのを見たのだ。わたしが思い続けていた、過去への「怨念」のしたたりおちるドラマではなく、上演者の、いまの状況をふまえた、健康な視点が舞台創造に充ちているように感じられた。

その印象は、わたしの先入観がくずされただけでなく、周りの観客の反応、後に劇団機関紙「きまぐれ」に載せられた共感の意見からも充分に示されている。そしてつけたしていえば、「劇団ひの」は、清水邦夫作品をすでに2本上演してきた経験をもっているのだ。

1988年に現在の稽古場ができあがってから、「ひの」の上演は、春(または夏)市民会館や公会堂で、市民や児童を対象としたかなり大がかりな舞台4~5ステージ、冬、稽古場での8~10ステージの公演という形が定着しているように思われる。「全リ演」でも稽古場での公演に力を入れる劇団は多いが、「ひの」はだいぶ前からその上演を一方の柱にしっかりと据えている。

稽古場公演のレパをたどってみると、A・カミュ「誤解」、G・ロルカ「血の婚礼」、山田太一「ジャンプ」、岡安伸治「ドリームエクスプレス」、横内謙介「ジプシー」、坂手洋二「危険な話」、原田宗典「分らない国」、清水邦夫「ラブレター」、鴻上尚史「スナフキンの手紙」、井上ひさし「マンザナ、わが町」、A・ドーフマン「谷間の女たち」、堤泰之「見果てぬ夢」、同「煙が目にしみる」とあって、幅ひろくまた意欲的なとりくみが想像される上演である。「火のようにさみしい姉がいて」で体験させてもらったような舞台づくりが、それぞれにあったにちがいない。

「目的・創造理念」の第2項に、

劇団の創造方法は、人間と社会、その歴史と生活を、真実において

えがこうとするリアリズムを基本とする。現実の生活をあるがままに澄んだ目でとらえ、みずみずしい感性と鋭くたしかな理性とで創造された舞台こそ、われわれのめざすものである。

とあるのだが、これを観念的にとらえるのではなく、また固定した創造姿勢でなく、広範な観客を対象とする活動と並行した実験的なとりくみをも通して、課題に挑戦し具体化する、劇団のたくましさがある気がする。

はじめて観た劇団「ひの」の舞台だったのだが、わたしは、そうした印象を受けた。

丹念な「劇団づくり」

「劇団ひの」の代表は佐藤利勝さんである。創立者で初代の代表池上洋通さんは、約10年のあいだ演出も担当したが、地方自治を研究する立場をとって劇団現場をはなれた（もちろん今でも劇団とは強いかかわりをもっている）。1985年くらいからは佐藤さんがすべての舞台を演出している。彼の舞台づくりには心くばりが豊かにされている（と思われる、一つの芝居と何回かの稽古にふれただけだから断定はできないが）。劇団員への演技指導は丹念で優しい（おとなしいというのでは決してない、つまりあたたかい。これも言い切れないのだが、稽古場での劇団員の明るい言動や反応にそのことを感じた）。

代表の佐藤さん

そうした劇団づくりは、佐藤さんだけの力でなく、メンバーの努力、地域の人たちの支えによって成り立っているのであろうが、もう一つ、創立者の榊原和子さんが30年のあいだ一貫して制作の任にあたってきたことも大きいといわなくてはならない。また、作曲・うた・ダンス・照明などに専門人の指導と協力とを受けていることもいえるだろう。制作とスタッフに力量をもち、体制がしっかりしている劇団は、創造も組織も発展していく事実をこれまで「全リ演」のなかに多く見てきたところだ。

冊子「30年史」は、機関紙活動の歴史にかなりのページをさいている。73年の劇団創立から、さまざまなタイトルを付けて機関紙が発行されてきた（10種96号）が、84年1月から現在の「きまぐれ」となって、それから146号にわたって発行、

パソコン入力、写真入り、カラー版と、内容・表現が次第に充実してきているのが見てとれる。

また、劇団内ニュースとしての「けいこばだより」は、79年7月から「劇団『ひの』ニュース」（制作ニュース）として通刊173号、さらに組織された後援会、「劇団『ひの』応援団さくら組」も96年から「SAKURA NEWS」を39号発行してきている。劇団と支持者、劇団員同士、劇団と地域とを結ぶものとしてそれぞれに力が入れられ、現実的な成果を生んでいるようだ。

ほめすぎたとは思わないが、いいところだけをとりあげたように見えるかもしれない。なかに入ってよくみればさまざまな矛盾と困難とがあるはずである。

劇団「ひの」は決して大きな劇団ではない。現在構成するメンバーは実働数20人ほどか、経験豊かな劇団員が他集団とくらべてさほど多くない印象がある。一度観せてもらった舞台での役者の演技は、アンサンブルがしっかりとれていることが大きく評価されるとしても、個々の俳優の形象力・表現力にはまだ未熟な部分があることも否めない。

制作の榊原さん

だが、そういう現状があるにしても、「ひの」はその歩みを着実に伸ばしていく劇団だといえよう。メンバーの顔つき、言動、そして、活動の歴史、記録の集積などからそれを感じたのは、わたしの主観的な想いだけではないだろう。

「稽古」をかいまみて――

「ひの」は今、6月下旬上演の水上勉原作・佐藤利勝脚色の『ブンナよ、木からおりてこい』の稽古にはげんでいる。2月の下旬と4月のはじめ、その場に立ち会わせてもらった。

2月22日　第1回の稽古、上演参加者がそろって（もちろん出席できない人がどうしてもいるのはアマチュア劇団にとって不可避の条件ではある）、完成した脚本の読み合わせが行われた。

1　構成するメンバーの幅が広いこと。60代から50、40、そして中学生まで、若い人の層が厚いのは当然として、極端なかたよりがみられない。

（佐藤さんが語るところによれば、毎年とりくむ市民・児童の参加を求める芝居からその後劇団活動に参加してくる人がいる。なかには子ども時代から成人してまで継続しているメンバーもある、とのこと。他の福祉活動のとりくみから劇団に接してくる事例も多いようだ。）

2　一人ひとりが自分と役紹介、それぞれに全員が拍手。新しい参加者だけでなく経験者に対しても、それは例外ではない。

（その光景はたいへんにあたたかい、劇団がメンバーをたいせつにしていることが感じとれる。これも佐藤さんの話だが、入団してきた人には、その条件に応じて劇団の仕事を必ず分担してもらう。毎日の稽古当番は、その日の記録をパソコン入力して、だれでも、いつでも、どこでも読めるようにしているとのことだ。毎木曜は劇団運営にかかわる会議や作業にあてられている。「目的・創造理念」の第3項に「劇団の組織原則は、劇団構成員の自主性にもとづく劇団民主主義である。それは、組織活動での一般的民主主義と創造活動の過程での民主主義の特殊な形態という二つの側面の結合である」とあるのだが、その実態づくりに具体的な努力が払われているようにみえる。）

4月4日　ダンスの練習と一つの場面の立稽古。

1　スケジュール表によれば、金曜と日曜にかなり時間をとってダンスか歌（あるいは両方）が専

ダンスのけいこ

門家によって指導される。

（はじめは、芝居の稽古にかかわりなく歌・ダンスの練習を考えていた。市民のなかに、そうした文化要求があることで、それに応えるとりくみを志向していた、が、最近は、劇団員の訓練、舞台のための練習が中心になってしまう、と佐藤さんは苦笑する。）

2　場面の稽古は何度も何度もくりかえされる。この日の稽古は、演出の強い指示のもと、内容や表現にギリギリと切りこんでいくものではないようにみえた。

（ドラマの質、稽古の段階にもよろうが、それには、動き、せりふ、アンサンブルを、みんなが、自分も集団としても、からだに馴らしこんでいくというねらいがあるようだ。そういう仕事を充分果たした上に役表現の形象化や相互の関連が深められていくのではないかと思われたのだ。）

さらなる拠点づくり

新しい稽古場建設のとりくみについてふれないわけにはいかない。

現在の稽古場は、88年にできあがった。前に述べたように、春の大がかりな市民・児童劇とならんで、秋（冬）の意欲的な公演がここで定着していった。しかし、この稽古場はかなり小さい。わたしがこれまで訪ねてきたいくつかの「全リ演」劇団のなかでいちばん小さいといっていいかもしれない。半分を舞台にとると、観客は40名、ぎっしりつめても50といったところだろうか。8～10ステージとしてもその数にはかぎりがある。

芝居のためにも、観客のためにも、そして地域の文化のよりどころとするために、新しい稽古場建設のプランを具体化する必要があった。

計画では、今の稽古場敷地に07年夏から工事開始、08年春に完成させる。現在より一倍半以上は広く、下に事務所と稽古場（小劇場）を充実させ、上に倉庫や劇団員住居をつくる予定。建物建設費４５００万円で、劇団積立２００万、市民カンパ３００万、劇団の個人負担４０００万の予算を立て、とりくみはすでに2年前からはじめられ、内外の実行委員会が動きだしている。

劇団「ひの」は確実にその計画を実現するだろう。それを拠点として豊かな芝居づくりの歩みを重ねていくだろう。そしてなによりも地域と結びついた〝日野のルネッサンス〟を前進させるであろうし、それは「全リ演」にとっても大きな力を加えるはずだ。そうあってほしい、その実態を全国の仲間にも示していってもらいたい、と心から願う。

ベルリンでの在外研修を終えて

劇団大阪　堀江ひろゆき

私は文化庁の在外研修制度を受けて、昨年9月から80日間、ベルリンに滞在した。

80日間の研修期間で70本の舞台を観劇し、いろんな人たちとの出会いを持つことができた。特に受け入れ先のグリプス劇場の代表者フォルカー・ルードヴィヒ氏には大変世話になり、感謝している。短期間ではあったが、一日一日が充実し、自分自身にとって予想以上の成果を得ることができたと思っている。

ドイツの演劇事情を語る場合、現在のベルリンというドイツの首都をぬきには考えられないと思う。首都機能の移転に伴う建設ラッシュと大改造、そこへ急激な人口増、移民・難民・不法滞在を含め、多種多様な人々の集まり、東西ドイツ統一後13年目の発展と矛盾、それらがすべてベルリンに集中し、象徴といえるのではないか。統一13年目の光と影はベルリンの演劇に少なからず反映され、旅人である私には大変刺激的であり、ヨーロッパの中央に位置するドイツの首都ベルリンの激動の時代を垣間見たように思える。

シェークスピア、チェーホフ、イプセン、レッシング、ブレヒトなどの古典を何本も観たが、すべて現代に置き替え、内容は挑発的で観客をひきつけていた。特に印象的なのは、主な劇場に於ける舞台機構の違いである。古い伝統的劇場にもかかわらず、ベルリーナ・アンサンブル、ドイツ劇場、シャウビューネ、フォルクスビューネの4劇場は圧倒される。州政府の文化政策の成果であり、観客人口の多さ、成熟度であると思うのだが、うらやましい限りであった。

グリプス劇場では観客と一体となった舞台に正直なところ、カルチャーショックを受けた。青少年演劇の中心的存在だが、満席の中での子どもの反応、それを観察する教師や劇団関係者、創る側と観る側が共に舞台を造り出しているさまは、改めて新鮮な思いで感じることができた。

ベルリンの演劇事情

ドイツには、行政が助成している劇場（劇団）が160あり、その他にプライベートの劇団、フリーの演劇グループ、商業舞台が多数あり、

青少年劇団も120ある。その劇団の年間観客動員数は4000万人といわれ、ドイツ人口8200万人に対して、約半数の人々が劇場に足を運んだ計算になる。

今回の80日間の滞在期間で、70本の舞台を観たが、どの舞台もほぼ満員で、ベルリンの演劇を通して、それを支える民衆のエネルギーを感じることができた。

中心劇団の一つである、ブレヒトが創立したベルリーナ・アンサンブル（B・E）はクラウス・パイマンが総監督に就いて旧B・E色を一掃しようとしているように思える。劇場内は大改装し、旧B・Eのレパートリーのうちハイナー・ミュラー演出の「アルトロ・ウイの興隆」以外すべてを放棄したという。数多い役者の内一人を除いてすべてを替え、ブレヒトの執務室まで壊したと聞く。今回観たブレヒト作品は「アルトロ・ウイ」「母」「屠場の聖ヨハンナ」「小市民の結婚式」だが、旧B・Eの伝統的造り方から、何とか脱皮しようとするこころみを感じ、刺激的に観ることができた。

B・Eの舞台で特徴的であったのはユダヤ人問題と戦争がテーマになった上演である。レッシングの「賢者ナータン」「Die Juden」、ホーホフートの「神の代理人」、ユダヤ人の夫を持つ妻たちの抵抗を描いたドキュメント「ローゼン・シュトラッセ」の朗読劇、ブレヒトの「戦争案内」の朗読劇と意識的な取り組みが続いた。特に「Die Juden」（ユダヤ人）はチケットが発売日に即売し、手に入らず、夜中の12時開演の追加公演でやっと観ることができた。それだけドイツ人にとって敏感な上演であるのだろう。グリプス劇場のフォルカー・ルードヴィヒに問うたところ、「ドイツ人にとって、ユダヤ人問題は永遠の十字架だ」といっていた。

「意識的に特集を組んでるわけではない。ごく当り前の上演に過ぎない」。国家の分断という修羅場を潜りぬけてきたこともあるだろう。ベルリンの演劇の多様性と前衛性は多種多様な人種を受け入れ、過去を認識することで未来を見い出そうとする民主主義の成熟度にあるように思えた。

B・Eの舞台に限らず、ドイツ劇場に於けるペーター・ツアデック演出のブレヒトの「肝玉お母とその子どもたち」では戦争が進むにつれ、廃物の山が高く築かれていき、戦争がいか何に無意味なエネルギーの浪費かということを語って、観客席はブラボーの声が飛びかっていた。

同じドイツ劇場のアーサー・ミラーの「セールスマンの死」は、現在のIT時代に置き替え、大きく

刈り込まれ、1時45分の上演時間に凝縮されていた。常に斬新的舞台をつくるシャウビューネのブレヒトの「都会のジャングル」は、あくなき人間の欲望を、日本の浮世絵やアニメを背景にモダンな舞台につくり上げていた。主役のハンス・ミヒアエル・レーベルグがリハーサル中に奈落に落ち腰骨を折る事故があり、初演まで5ヵ月のブランクが生じるほど、その斬新な装置は観る者にとってもハラハラする危険を感じさせた。

同じシャウビューネのイプセンの「人形の家」（NORA）は、現代の人間関係の希薄さと満たされぬ欲望を描く中で、夫に10発もの銃弾を浴びせ、入口にへたりこむノラで終る大胆な改作がなされ、観客席はブラボーの声が飛びかい、いっせいに足を踏み鳴らして上演を称えていた。

現在最も注目されているフォルクスビューネでは、ドストエスキーの「悪霊」が休憩を入れて4時間半、テネシーウイリアムスの「フォーエバー・ヤング」が休憩なしで3時間半と、上演時間にしばられず、中味で勝負していた。ベルリンの舞台は3時間以上がざらにあり、都市機構の違い、それを受け入れる観客の演劇に対する成熟度の高さを感じる。それに加え、大胆な改作・描写を支える舞台機構、財政的な支えとしての国や州の文化政策が挙げられる。助成金（私立の民間劇団）、交付金（州立の劇団）は一概に日本と比較することはできないが、その額の大きさに驚く。

青少年劇場と教育
（グリプス劇場から見えたこと）

「小さな空間から大きな社会が見えてくる不思議な劇場」といわれるグリプス劇場には、毎日のように小学生から高校生までの生徒が先生に連れられてやってくる。6歳から大人まで、作品内容によって年齢制限をしている。文芸部員によって判断されるのだが、それだけに生徒たちの反応を観察し、判断の正否を検討している。ドイツの学校には演劇担当の教師が各校に3～4人いて、劇団、劇場と学校を結ぶ仲介者的な役割を担っている。この教師たちの存在がドイツの青少年演劇にとって、大変重要な役割をもっていて、劇団との話し合い、子どもたちへの指導、他の教師に対する啓蒙、その教師たちを劇場に連れてくる役割まで担っている。

ドイツの青少年劇場の発展は、1968年のフランスの五月革命といわれた学生運動に端を発し、それまでのあらゆる権威が揺らぎ始め、家族というモデルが疑問視され、平和主義や性の自由化・連帯といった言

葉が新たなキーワードになる中、文化に対して新しい理解が生まれ、新文化政策が発展し、社会のすべての生活領域が文化に組み込まれ、産業文化、日常文化、社会文化、児童文化などの概念が生まれることになった。その中で国も児童文化（青少年文化教育）に取り組み、財政的支援を行うようになった。グリプス劇場はその中心的役割を担ってきた劇団で、指導者であるフォルカー・ルードヴィヒが「元気の出る舞台」「勇気の出る舞台」と名づけているその舞台は、35年間、老若を問わず多くの観客を魅了し、常に高い評価を受け、今やドイツ国内のみならず、海外でも上演されている。

グリプス劇場はハンザプラッツという地下鉄の駅を出たところにあり、380席を有する中劇場で、他に、シラー劇場ワークショップという小劇場（100席）を持って活動している。今回の滞在で、9本の舞台を観たが、毎回満席状態で、子どもたちの素直な反応にカルチャーショックを受けた。6歳の子どもたちが気にくわないと「ブーイング」、気に入ると「拍手と指笛」、舞台に参加している。終演後のカーテンコールでは共感の足踏みで劇場が割れんばかりである。「ハローナチ」という高校生を対象にした舞台をシラー劇場ワークショップで観た。終演後、生徒たちの討論会が始まり、演劇担当教師が司会して、1時間余、今見た舞台の内容を深め、共通のものにしていった。すべて劇場に足を運んで、同じ条件で芝居を見る教育システムがある。

このように地域の人びとと先生の支えを背景に、未来に対する夢と厳しい現実を子どもたちに提供する一流の舞台が創られていることに感銘を受けた。

グリプス劇場「地下鉄1号線」（グリプス劇場　パンフレットより）

追悼　梶　武史

「勝手に逝きやがって」

劇団四紀会　岸本　敏朗

何がいやだといっても追悼文を書くくらいいやなものはない。私は本来非常にわがままな性格だから、思い通りにならないと大変腹立たしくなる。劇団創立13年目に盟友新木祥之が急死、その弔辞で「安らかになんか眠るな！」と叫んでしまった。そして劇団創立47年目に梶武史を失った。今度は急死ではない、もう不治であることを知らされて3年余り、劇団員はことあるごとに彼を励ましたが、私は正直できなかった。「我々を残してお前は勝手に死ねるのか」と口をついて出そうで、結局2人きりで話さずじまいとなった。

劇団四紀会は9人でスタートした。その結成にむけて彼は乗り気ではなかった。高校在学中にわらじの会というサークルを立ち上げたが解散に追い込まれ、そのような苦渋は二度と味わいたくないというのが主な理由だった。私は元町のプラットホームで数時間ねばってついに説得した。結成してすぐに加わった新木祥之は彼の親友で、久保孝志、古沢瑛子、そして私の5人が結局、確固たる劇団建設への夢を託すようになっていく。

もちろん10年や20年で夢が実現できるとは思わなかった。しかし、半世紀近くもかけてきていまだその実感はない。梶武史にしてもそうだろう。無念やるかたない思いはお互い語らずとも肌で感じ合えていた。だから彼にすれば、「だれが勝手に死にたいもんか」と私に対して口をついて出そうになっていたかもしれない。とりわけ、「お前を監視してチェックできないのが心残りだ」といいたかったろう。

ここ10年くらい、彼は団内では私のやることにことごとく異をとなえてきた。私の演出した舞台でもそこまでいうかと思うくらい評されたこともある。どのようにいおうと私がひるむことはないと知っているので、切り捨てたのだろうが、周りは随分心配してふたつに割れるのではないかと気をつかったほどだった。私の方は不思議と彼にはいくらやれても平気だった。土台は共有しているのだと実感していたから、なるほどそういう見方もあるかと感心さえした。その違いはどこかで検証しておかなければという気持ちもする。

前にも言ったことがあると思うが、劇団四紀会は大きく二つの存立基盤がある。ひとつは国鉄演劇という大看板をバックにした職場演劇の素地で、それを彼が代表していた。今ひとつは民族伝承という流れを演劇にこめつつも、やや純文学的傾向の流れで、これは昨年亡くなった北島三郎の感化をうけた私なんかが中心であった。劇団の存立理念としては初期の頃は有無をいわさず、前者がその主流をしめたが、時代がかわっていき、前者も変貌を重ねつつ、後者と融合して、新しい理念に向かおうとするのがここ10年ぐらいだっただろう。この違いは非常に多岐にわたり、論ずると長くなる。ひとつだけ、例えば制作論ではこうなる。

「雪やこんこん」（91年）の舞台より

極端にいえば、後者では本当に人々が喜び、楽しい舞台を創り続ければ、必ず人々の支持はうける、そのために例えば招待券なんかはどんどん配ってより多くの人たちにみてもらうことが必要で、観客が増えないとすると舞台そのものが面白くないからだ、とするが、前者では劇団員ひとりひとりが切符を売ることが絶対基本で、そのことで自分も変わるし、創造にもはずみがつき、そのことなくしてわれわれが芝居をしていく意味はないという。このような差は演技、演出、劇団組織、等々のすべてにおよんでくる。

梶武史、50歳を超えて相談があった。55歳が停年だが国鉄がどうなるかわからないし、今割り増しがあるうちに退職して、芝居一本に打ち込みたいのだが、という。年金も充分あるというので、私は諸手をあげて賛成した。それからの彼の活動の場は劇団の枠を大きく超えてはばたいた。それから約20年、彼の才能は全リ演はもちろんのこと、行った先々で十二分発揮されたと思う。そのことでは彼に思い残すことはないかもしれない。ただ、残された我々には、やっぱり人間はいつかは死なねばならないのか、そうなると夢の実現なんて果たしてありえるのかという、深い疑問がのこされたままである。

2004年5月8日

北から南から ―― 劇団通信

〔劇団海鳴り〕

第33回定期公演「恋歌がきこえる」（小池倫代／作・我孫子正好／演出）は、昨年11月9日、市文化会館2ステージをほぼ満席（250席）で終了することができました。観客、仲間の感想もおおむね好評でしたが、ベテランと若い役者の力の差やコミュニケーション不足というご意見もあり、どうしたら若い人たちをのばしてゆけるか、責任を感じるところです。

年が開け、市内音楽・舞踊団体とのジョイント合同公演が決まりました。演目はシェイクスピアの「真夏の夜の夢」を海鳴りのいがらし陽子がオホーツク版に翻案。北海道文化財団の補助金も決まり、総勢100人を超える市民参加野外劇公演になります。会場も港をサイドに山が眺める絶好のロケーション。花の媚薬がオホーツクではどのように変化するでしょうか。

ぜひ観光を兼ねて、夏の紋別へお越しください。

「真夏の夜の夢」～オホーツク・人・自然・愛、一幕六場いがらし陽子／作・神山昭／演出／7月3日（土）午後7時、紋別市海洋公園　流水プロムナード特設舞台

※お知らせ、北海道演劇集団機関紙「ほっかいどう演劇」26号が発刊になりました。1冊1000円。お問い合わせは、我孫子まで。

〔劇団さっぽろ〕

毎日が崖っぷちという状況は続いていますが、何とか稽古と本番を続けてもいます。いま、できることを何でもやろうと思っています。

稽古場を中心に、創立45周年と銘うって、アトリエ公演やファミリー劇場などの取り組みを始めました。定例の「むかし話の世界」午後4時開演に夜の部も増やし、4月は、アトリエ公演・楠本幸男さんの「結婚申し込み」を併せて上演しました。劇団と同じ町内に、イラクで人質になった今井くんの実家があり、上演当日が「無事解放」のニュースの直後だったこともあり、否応なしに、戦争と平和について考えさせられました。イラクからの撤兵が一刻も早く実現してほしいものです。

楠本さんには本当にお世話になりました。和歌山大空襲を記録した市民参加劇「ささの葉さらさら」も読ませていただきました。ぜひ再演の機会を持ちたいと思います。

劇団の財政支援を訴えて、民主団体や組合への働きかけを行ったり、アルバイトをしながらの稽古と、劇団員は、文字通り、体力と気力で頑張っています。

目下の最小限の目標は、夏まで、この苦境をどう乗り切って行くかですが、社会状況を考えると、劇団の「あり方」そのものを考え直す時期に来ていることも確かで、この1年をかけて、どんな答えを見つけ出せるのかが課題です。

（長谷川京子）

〔劇団新芸〕

5月16日（日）第21回北海道演劇祭in小樽の第1回実行委員会が小樽で開かれました。上演作品は全部観劇しようという主旨で5作品が決まりました。また、最終日10月11日（月）には柄本明氏の講演が決まっています。この記念講演の主催は財団法人北海道文化財団です。小樽市は全国でただ一つの赤字の予算計上した自治体です。事務局長吉川勝彦氏の奔走もむなしく補助金はいっさいありません。北海道演劇祭なのですが寂しいかぎりです。

新芸が参加している合同作品の「煙が目にしみる」の稽古は9回あったのですが、参加劇団の一つが5月29・30日の公演だったり、キャストそれぞれの仕事の関係などでなかなか足並みがそろいません。演出も自劇団とは勝手が違って少しとまどってるようにも見受けます。でも、6月からは、軌道に乗ると思います。

（宮津）

〔劇団未来半島〕

年金、年金という言葉が、五月の蠅（注：五月の北国にはいないが）のように空間を飛び回って、マッコと五月蠅（うるさ）く、いささかウンザリ気味の今日ですが、やっと、ここ下北も桜咲き、そして暖かくなってまいりました。とはいえ、まだストーブに朝晩火が入ってしまうことも多く、やっぱ北国、油使うなあ、と、改めて思うなか、劇団でもいよいよ、今年の行事の数々が動き始め（遅すぎ！）ました。

8月の地元商店街の方々とのイベントでの、ちょっとした演劇祭…いや、1日だけの3つ程度のお芝居の集まり的なイベント。7月にやる予定だった新作書き下ろし公演（本がいまだ書けず）も、9月にずれ込む様子。そして、12月の20周年記念公演の出演者スタッフ募集と、その新作台本の準備。地元FMコミュニティーラジオのラジオドラマ（これは1年通して）準備。その他いろいろ…諸々がひとかたまりにやって来て、フォール寸前！…ワンーツーー！　ス、で、肩浮かして、ロープに逃げて、る、場合じゃなくって、ひとつひとつ小さなことからこつこつと…いや、どんどん大きく進めないとマジ、間に合いません。後半の修羅場が見えるようで怖いです。

（仁木宏）

〔劇団弘演〕

桜の開花時期になんと雪が降り（17年振りとのことです）、おかげで例年より長く花を楽しむことができたこの春でした。

今年の本公演の演目は北原なお／作・作間しのぶ／演出「ノアの住む国」に決定しました。この作品は戯曲ではなく、県内の団体が主催する「ゆきのまち幻想文学賞」の長編賞を受賞した絵本です。

一つの星を崩壊させてしまった人間。別の星で生き延びた者の再生・復活の鍵は、ひとつぶのドングリの実だった…といった大筋ですが、今日的問題提起を織り込んだ希望と幻想に満ちた物語です。挿絵も大変魅力的で、この絵をどうにかして効果的に舞台にあげたいと頭をひねっている最中です。基本的には朗読の形をとるものの、フリーハンドにして、役者の動きや照明、そして挿絵の力を借りて未知の空間を創り上げたいと考えています。その意味ではかなり実験的な舞台になりそうですが、昨年創立40周年の節目を迎えた弘演にとって、41年目の新たなスタートにふさわしい作品といえるかも知れません。すでに稽古もはじ

まりました。（作間しのぶ）

〔劇団支木〕

本年は、劇団創立41年目のスタートの年。年2回公演のうち、春公演は「煙が目にしみる」（堤泰之／作、堅倉憲／演出）を、6月30日と7月1日の2ステージ、予定しています。

輝かしき前年の勢いを借り、「煙が」の死装束と位牌、さらには骨おい（骨箱を包む金色の布）などを求めて通いつめるうち、近所の葬儀屋さんとはしっかり顔なじみになりました。当初、「セットでなければお売りできません」などと言われたもの（セットで買ってどうするんじゃ）。団員数は半減しましたが、OBや当地の若手劇団、フリーの役者さんたちの協力を得て、稽古は順調に進んでいます。

さて、奥羽ブロック会議を開きました。県内加盟5劇団のなつかしい顔ぶれが青森市に集合。情報交換をするうち「共同の倉庫を持って衣装や道具を保管、再利用できないか」など、イイ感じの意見がたくさん出ました。仲間って本当にいいね。（伊藤）

〔黒石演劇研究会〕

こんにちは！　夏も近づく今日この頃、皆さんはいかがお過ごしでしょうか？

3月号では「体調万全で頑張る」と言ったものの、目が見えなくなり両目手術する惨事になってしまい「もう演劇もできなくなるのかなぁ」と心配もありましたが、無事に手術も終わり見えるようになったので、今度こそ体調万全で稽古に取り組みたいと思います。心配かけてスミマセンでした。（泣）

さて、私の悲惨話は置いといて（笑）、私たち劇研は上演作品の台本選びをしています。キャパ200人での多目的ホールで、しかも、舞台が狭く大変ですが、会員も1人増えたから、今まで以上に頑張りたいです。

まっ、何はともあれ、健康第一で稽古に取り組みたいものです。病気すると何もできませんからね…。さぁ～て、今年の舞台の台本はどれにしましょう？　早く探さなくちゃ!!（三浦）

〔劇団だいこん座〕

春の公演は小田健也／作・石川富志夫／演出「空とぶ大どろぼう」を5月22日に鶴岡市中央公民館ホールで上演しました。

大どろぼうのマヌケンはアン、ポン、タンの3人の子分をつれて、風船を盗んだり、市長さんの帽子を盗んだり、音のでるもの、自転車のベルや教会の鐘を盗んだりします。そのマヌケンをつかまえようと、クロンとマリン、そしてツヨイン警部とタダシン署長が追いかけるのですが、マヌケンたちはいつのまにか風船に乗ってお空を飛んでいってしまいます。という大活劇で、風船を100個ほど用意したり、踊りがあったりとにぎやかでした。

今回も小学生、中学生が5人出演、大人7人で計12人のキャスト。相変らず稽古への出席率が悪く苦労しましたが、なんとか公演することができました。「とてもファンタジックで、大どろぼうの話なのに夢があって楽しかったです」と好評でした。子どもたちもまたぜひ出演したいとはりきっています。

〔劇団仙台小劇場〕

韓国の馬山国際演劇フェスティバルで石垣／作「いつか夢の後で」を上演してきました。私たちに対するホットなもてなしの気持ちに打たれました。上演当日は激しい雨で観客数も少なかったのですが、日本語コースの高校生がたくさん見にきてくれて安心しました。舞台作りは、さすがに仙台での公演とは違い、難しいところはありましたが、現地スタッフの行動力によって乗り切ることができました。

文化の違いを肌で感じることの大切さとそれを乗り越えて一緒に仕事をすることの醍醐味を味わうことができました。今後とも交流を続けていきたいと思っています。

帰国後すぐ、太白区手作り演劇（来年2月）の準備にかかっています。

追伸：劇団仙台小劇場は4月30日付でNPO法人として再出発しました。（石垣政裕）

〔演劇集団土くれ〕

第53回公演の日程が決まりました。例によって「麻布演劇市」参加公演です。この「麻布演劇市」は港区の財団との共同事業で、今年17年目になります。11集団が年間8本の公演を維持しています。会場費無料、公演日程の優先確保、実行委員会のための経費などの支援が重点で、このほか区施設への宣伝、制作費若干が援助されています。

既に稽古が始まりました。歌あり踊りありで、今後の稽古の過密化は避けられません。今年は京浜協同劇団の「いのちの砦」6月公演に助っ人としてかかわりながらの稽古です。序盤の遅れを夏場にどれだけ回復できるかがかぎです。（石塚）

〔東京芸術座〕

日本丸よ、どこへ行く！

日本の舵取り責任者は国民をどこへ引き連れて行こうとしているのか。米軍支援の自衛隊イラク派兵の継続、それをより強化するための有事七法案を民主が与党と一体となった翼賛国会で成立させようとしている。一方、国民の生活と生存を左右する法案を作る国会議員が「年金」の『未納』だ『未加入』だとかまびすしいが、何をか言わんやである。我々演劇人は、『平和』と『自由』をもっとも希求している。これ無しには演劇活動ができないからである。これに『生活の安定』が加われば申し分がない。能力と演劇的センスを除いては。

さて、今年の春のアトリエ公演は、神品正子／作・印南貞人／演出の『遠い水の記憶』を好評裡に終演し、来年から『Challeng・ed―遠い水の記憶―』とバージョンアップして全国ツアーをします。

このアトリエ公演には遠路こばやし議長夫妻にもお越しいただきました。

全国ツアーは「十二人の怒れる男たち」と「夏の庭」で夏休みをのぞいて12月まで。

劇団存続と後継者育成は一体の関係です。ただ今、女優の卵3人を育成中です。来たれ、演劇人志望者！（郡司）

〔劇団ひの〕

2月29日（日）、関東ブロック新春交流会が劇団「ひの」のけいこ場で催されました。東京芸術座、青年劇場、京浜協同劇団、蒼生樹、石るつ、劇団埼芸、土くれ、個人参加の方々…総勢45人が集まりました。夢と希望を語り合う、熱気にあふれた素敵な集いでした。劇団員の皆が全リ演の方々と触れ合うことができ、大いに刺激とになった貴重な催しでした。

現在、6月に上演する『プンナよ木から下りてこい』に

向けてけいこに励んでいます。市内のホール2ヵ所で4ステージ上演します。

少年少女の犯罪や・少年少女を巻き込んだ事件。体罰による子どもの犠牲も後を絶ちません。イラクでは、子ども・老人を含めて多くの民間人が殺害され、最近では拘束者への残虐な行為が明らかにされました。いのちを脅かす事件や出来事が途絶えません。

ブンナは、いのちのつながり、いのちの尊さをうたいあげた物語です。いのちの問題を正面からみすえて、「生きる喜び」「いのちの輝き」をかもしだすエネルギッシュな舞台を目指しています。

4年後のけいこ場建設に向けて、「新けいこ場建設協議会準備会」が発足しました。9月から運動が展開される予定です。全リ演の皆様からも運動の経験を学びたいと思っています。よろしくお願いします。

（佐藤利勝）

〔劇団銅鑼〕

☆10年来の夢実現!!「SAKURA・イン・ザ・ウィンド」リトアニア、ヴァイトクス・スタジオPSと銅鑼との合同公演が大成功のうちに幕。3月26日、俳優座劇場は音と光、日・リの俳優たちが発するエネルギーに満ちあふれた。

日リ共通の歴史、ソ連によるシベリア強制抑留を題材にしたこの作品。極限状況の中での両民族の悲劇と抵抗、人間の生命や愛と尊厳、両国の文化・伝統、精神世界そして武士道、表現する事モリ沢山の作品でした。

俳優の1人として驚いたのはリトアニアの俳優たちの自由で大胆、力強く骨太な演技表現。無言のうちに表現されている抵抗や鋭い批判は、表現の自由が無い時代に培われた手法と感じた。

今までにないあまりに斬新な演出に、お客様の感想はまさに賛否両論。でも実際に抑留を体験された元日本兵の方々から、あの頃の不安感や怒りを実によく表現していたと感想をいただいたことはうれしいことでした。

4月2日、彼らは帰国。丸2ヵ月間の作品づくりを通して、言葉、文化、民族の違いを乗り越えて心が触れ合い、認め合えたことは個人、劇団としても、大きな財産になりました。この公演のためにお力添えをいただいた日・リ両国の方々に感謝です。

☆昨年、池袋演劇祭で優秀賞を受賞した「Big Brother」の旅公演が京都から始まりました。少年犯罪とそれを見守る大人たちを描いたこの作品、一般公演での大人の方から、学校公演での中高生までとても喜ばれました。9月には東京でも再演します。少年犯罪の増加する今の日本で、観に来たお客様とともにこの問題を語り合える作品として大事にしていきたいと思います。

「らぶそんぐ」と「センポ・スギハァラ」が旅に出ます。両作品とも例年より少ない公演数ですが、観てくださったお客様に喜んでいただけるようガンバリます。（黒田志保）

〔劇団蒼生樹〕

4月30日・5月1日、かながわドームシアターで『がんばれッ！ 日本国憲法』が上演されました。本年で18回目となる横浜の憲法ミュージカルに、脚本・演出で演田重行、スタッフ・役者で劇団有志が参加しました。

5月19日には、座内で総会を行い、2003年度の現状（総括）また、2004年度の活動方針を決めました。当劇団でも座員の減少が問題と

なっています。とはいえ、本年は、創立20周年の年にあたります。蒼生樹では、夏と冬の記念公演に加え、20年の蓄積、思い出をいっぱいつめた記念誌の発行、楽しいパーティーetc.を企画しています。公演はもちろん、そちらもぜひご参加えいただきお楽しみください。

7月には夏らしく、長崎原爆を取り上げた『明日』―一九四五年八月八日、長崎―井上光晴／作・小松幹生／脚色・演田重行／演出。12月には、落語の「死神」をモチーフにオリジナル作品で暮物の上演を予定しています。

（岡本あずさ）

〔青年劇場〕

こんにちは、皆さんお元気ですか？ 私たちは劇団創立40周年記念公演第1弾！ 5月公演（5月28日～6月6日、紀伊國屋サザンシアターその他）「悪魔のハレルヤ」ジェームス三木／作・演出の初日を開けました。

春名幹彦さんの原作「秘密のファイル―CIAの対日工作」を下敷きに、CIAの活躍に焦点を当てて戦後の日米関係を問うジェームス三木さん渾身の書き下ろしです。楽しませてくれながら、ええっ!? こんなことが！ あり～～!? とぞっとさせられ、今まさに起こっているイラクでの戦争のこと、北朝鮮による日本人拉致問題のことなどが頭をよぎっていきます。こんな芝居見たことない！ でも…皆さん…動員が…どうですか…？ 本当に厳しいですよね～（話は違いますが学校公演の実施校は今年の白書によると6割減ったそうです）。

今年も2月公演ガルフから、3月のウイークエンドシアター公演「雨の庭」、「キュリー夫人」の旅公演、6・7月の「17才のオルゴール」、「ケプラーあこがれの星海航路」、「真珠の首飾り」の地方公演とバタバタです。でも大変だけど、どの作品も今こそ多くの人に届けたい作品だなって改めて思います。

「どうしてあんな残酷なことができるの？どうして家族があんなつらい思いをしなくてはならないの？どうして年をとってこんなめにあわなきゃいけないの？」ニュースを見ながらそんな思いを持っている日本中の人に。9月は劇団創立40周年・飯沢匡没後10周年公演「夜の笑い」第2部「接触」―島尾敏雄「接触」より―の公演も控えています。赤信号点滅中でも、とにかくみんなで力を合わせて！ 晴れるや!? ハレルーヤ！

（正治恵美）

〔劇団埼芸〕

みなさん、こんにちわ。前回の通信はチョットしたトチリがあってパスしてしまいました。ほんとうにすみませんでした。

私たちは昨年5月、念願の初めての稽古場公演を終えた後、中心メンバーの仕事や病気による休団などもあって、一時期、活動が弱まりました。台本選びに多くの時間を費やしたり、上演可能な本の読み合わせまでしましたが、結局、決定まで至らず、劇団の佐藤逸平に創作台本を委嘱することになりました。当初、世相を反映した現代劇という線で作家に一任しましたが、劇団員の川村から、山本周五郎の「かあちゃん」はどうかとの提案があり、全員で原作を読んだところ圧倒的な支持があり、改めて作家にお願いし、「かあちゃん」の脚色作品を次回公演とすることに決定しました。

そして、4月末に台本が脱

稽し、いま稽古に入っているところです。毎回10人前後が出席し、やっと稽古らしくなってきました。

この「かあちゃん」は天保の改革があった頃の、江戸は深川あたりの長屋の話で、働き者で気風のいいかあちゃんが「ひょっとして、魔がさして……」入ったのかも知れない若い泥棒を改心させ、こともあろうに同居させるという、今ではとても考えられないお話です。閉塞した時代にあっても、家族、隣近所、支え合いながらエネルギッシュに生きる江戸の庶民たち―をどう表現できるか、が課題です。

（中山浩充）

〔劇団静芸〕

◇昨秋11月、座付作家小島真木の創作劇「風に吹かれて義虫」公演で、劇団創立55周年を記念することができた。

新しい年を迎え、ファミリー小劇団公演で「一人語り」と「雪女房」（さねとうあきら／作）を新しく中川正臣／演出で打ち上げた。

◇今春の公演は、6月13日（日）市民文化祭に井上ひさし／作「貧乏物語」（演出／伊藤幸夫）に挑戦している。劇団の歴史上、初の女優だけの舞台である。全員が、仕事、家庭をもち、これらを乗りこえ稽古にかけつけて来る。女性だけの声が稽古場に飛びかい、〝言葉の魔術師井上ひさし〟の台詞を一字一句おろそかにしないで、深めあって稽古している姿は見事である。河上臺の姿は舞台に登場しないが、一貫して民衆の立場にたって生き抜き、多くの人々に信頼され、愛されてきたマルクス経済学者の姿が浮かびあがってくる井上作品の魅力を舞台化する、むつかしさと楽しみを味わいながらの稽古である。

◇8月28日「第4回しずおか平和のための文化の集い」が市内文化団体が中心になって開かれる。総合演出を劇団の伊藤幸夫が担当、劇団は小島真木／作「淡墨色の桜たち」の上演を予定している。平和を願う8月のつどいが4年間続いたことは静岡では画期的なことであり、ぜひ今年も大成功できるよう、その準備に入った。

（山崎三郎）

〔劇団からっかぜ〕

今年で創立50周年を迎えます。記念公演として9月18日、19日、「闇に咲く花」が決定しました。そして新しい試みとして、9月12日にからっかぜOBへのアトリエ公演後、レセプションを行います。創立50周年という年月と共にからっかぜと芝居を愛する人々、これからも一緒に活動し続けるメンバーがより深め合い、意義のある節目の1年にしていこうと思います。

「闇に咲く花」の稽古は、ただいまテーブル稽古の段階に進んでいます。終戦から2年たった激動する昭和22年の愛敬稲荷神社を舞台にして、世の中に混乱、翻弄されながらもたくましく生きる人々を描いた作品です。

日本は終戦直後、数多くの問題を残したまま新しい時代を迎えました。そしていまだに課題を抱えながら私たちは生きています。作品を掘り下げるにつれ、見えてくるもの、まだまだ見えてこないものを団員たちでああだ、こうだと言いながら深めています。さて、これから忙しくなっていきます。作品にかける熱い思いを胸にがんばります。どうぞご期待を！

（森幡洋子）

〔劇団名古屋〕

●春の公演『あした天気になあれ』（ふたくちつよし／作

久保田明／演出）は6ステージ、観客745人。椅子を100脚ほど用意したが、毎回不足し、一部お帰りいただくほどの盛況だった。

舞台は、地元新聞に「小さな会場はパンク状態。客席も、尻が痛くなるような折り畳みいすでは、観劇の楽しみもそがれてしまう。そんな悪条件下でも、芝居は文句なしに面白かった。……入院患者への同情が激励に変わり、やがて彼らに励まされている自分がいる。いつの間にか、尻の痛みも忘れていた」と評された。

脚本のよさに、ごとうてるよ、岩田史郎、谷川伸彦、渡辺和江らが今回もいい仕事をし、新人河村陽子、今泉志穂も懸命に舞台を務め、客演メンバーがお客さんを集めることと舞台を創ることの両面にわたって協力してくれた結果と思う。

昨春公演された劇団未来の森本景文さんから、早々に示唆に富んだメモをいただいたことにも誌面を借りてお礼を申し上げる。

●劇団の代表が久保田明から岩田史郎に交替した。新代表を中心に一層劇団を活性化したい。

●公立ホールの指定管理者制度など、国や自治体の動きをどうとらえたらいいか。本当に地域の人たちに支えられる劇団であるためには何が大切か。全リ演こそ、その実践を通して、方途を示すべきではないか。夏の総会、演劇フェスに期待する。

〔劇団名芸〕

4月9～18日の第9回研究公演「楽屋―男と女の―」は、実験劇場としては初の9ステージでしたが、目標を越える547人のお客さんに楽しんでいただきました。そしてナント初の海外公演へ。全リ演共催の〝馬山国際演劇祭〟へ仙台小劇場と共に上演参加してきました（馬山小劇場5月15日　2ステージ）。

飛行機に初めて乗る人も含めて大挙21人の参加で、田舎劇団の一世一代晴れ舞台という雰囲気でしたが、劇団馬山や多くの現地スタッフ、日本の加藤武夫氏（すがお）たちのおかげで無事終えることができました。モンゴル、ベトナム、中国、シンガポール等々、たくさんの国の人と出会えたのも嬉しいことでした。これで半年近い「楽屋」との付き合いに区切りをつけ、今は夏恒例の子ども劇場に向かっているところです。

そして、いよいよ全日本演劇フェスティバルが近づいてきました。韓国から劇団馬山も来日上演してくれます。中部ブロックとしては成功のためこれから打ち合せをしつつ、準備活動を始めます。全国の多くの仲間と交流できることを今から楽しみにしています。桑名で熱い出会いをしましょう。よろしく！

（栗木）

〔岡崎演劇集団〕

みなさん楽しみにしている全リ演演劇フェスティバルの準備が始まりました。

三重県での開催ですので、私たち中部ブロックの役割もあるようです。フェスティバル会場でお会いしましょう。

さて、私どもの劇団の方は、現在、マキノゾミ／作・浅井克彦／演出「高き彼物」の稽古に入っています。上演は7月10日（土）6時半、11日（日）1時半、岡崎市せきれいホールです。その後は、秋に稽古場で子供劇場の上演を予定しています。観客は、稽古場の近くの子供会です。毎年の恒例行事になってきていますので、子どもたちも楽しみにしているようです。

（平岩）

〔劇団はぐるま〕

研究所の34期生卒業公演が無事終了しました。4月10、11日の2日間で4ステージ、観客動員は目標の300には達しませんでしたが、脚本選びから上演まで、自分たちの力でやり遂げたことは、これからの大きな力になることでしょう。彼らが選んだ台本は、成井豊／作「TWO」で、研究所担当の三島幸司が演出しました。この研究生のうち、4人が入団し、夏のミュージカル劇場にも出演します。

この夏の公演は、年が明けてもなかなかタイトルさえ決まらず、ちょっとハラハラしましたが、劇団内で題材を探し、何回かの討議を重ねて、いずみ凛が書き下ろした「アラビアものがたり　消えたオアシス」と決定しました。今もなお戦火の続く中東を舞台に、現在と民話の世界を行き来しながら、戦いの無意味さと、未来への希望をこめた作品に仕上がっています。すでに立ち稽古の段階に入っていますが、たくさんのお客さんの期待に応えられる舞台になるものと確信しています。

（内田　薫）

〔劇団たけぶえ〕

来年10月に「国民文化祭・現代劇大会」が私たちの街で開催されます。小さい街での大きな事業で、すでに昨年秋から劇団代表の柴野を中心に準備が進められております。

古い街の特色を生かし、「街なか演劇祭」と銘打って古い薬問屋などの町屋、神社仏閣、戦前の芝居小屋といった建物を会場にした演劇祭を計画しております。当日、街角のあちこちで、一人芝居や小演劇を一斉に上演しようというものです。

全リ連加盟の劇団には改めてご案内しますので、ぜひ参加をご検討ください。

今年はプレということで県内の劇団によって同じような演劇祭を計画しており、わが劇団も例年は春に行っている「近代一幕劇」をこれに合わせて参加します。

そのため空白となった5月は一般公演として「夜の来訪者」を19年ぶりに再演することになりました。

また夏・桑名での「全日本演劇フェスティバル」が終了した8月23日から10日間、ポルトガル・トマール市の友好劇団との合同公演のため、6年ぶりに渡欧、「種子島」を再演します。州境の大河を海に見立て、河川敷と船を使った大がかりな野外劇になりそうです。

この他の計画として12月の〝たけのっ子劇場〟は、今回も劇団はぐるまのご支援で6月から「オズの魔法つかい」の準備に入ります。

〔劇団やまなみ〕

●来年は劇団創立50周年となります。記念公演の第1弾として「モモと時間どろぼう」第2弾創作劇上演を予定しています。また、県内の劇団によびかけて「父と暮せば」の経験をもとに合同公演を計画しています。

●7月24日（土）に「ふたりのイーダ」を県立文学館で公演します。現在（5月下旬）週3回の立ち稽古で追い込みにはいっています。が、各々の事情で稽古への集中がいまいちというところもあり、演出や舞監などは胃の痛い思いで頑張っています。

●やまなし文化祭総合舞台が県内の文化団体が参加して来年1月に県民文化ホールで開かれます。劇団では県の担当者と本来の県民文化ホールにたちかえることを数回の話し合いで確認し全面的に協力することにしました。（河野）

〔劇団上野市民劇場〕

占領下のイラクにおける、アブグレイブ刑務所での米軍の虐待問題は、まさしく大国の奢りが、人の行動までをも粗暴にする結果となったのではと、本当に悲しい出来事に胸が痛むばかりです。

さて、稽古場でのふれあい小劇場、『芭蕉翁桃青～その内なる枯野から～』は好評のうちに終えることができました。初演より改稿されてより人間松尾芭蕉に焦点が絞られて、内なる業が昇華され芭蕉独自の俳句世界が作られたであろうことが分かりやすくなったと思われましたが、地元のお客様には賛否両論でした。

次回公演は、地元に縁の深い作家である横光利一の戯曲作『男と女と男』を7月11日（日）午後2時～前田教育会館蕉門ホールと決定しています。公演をひかえて劇団員が猛稽古中です。今回が初舞台となる若手もおりますので、皆で力を合わせて頑張りたいと思います。

（大東）

〔劇団すがお〕

新緑の美しい季節で、絶好の春公演の稽古日（?）が続いています。

さて、劇団すがおと公募の市民で演ずる「桑名演劇塾」第4回公演　栗木英章／作・吉良史郎／演出「桑名萬古焼―沼波弄山物語」は2月28日（土）、無事に終了しました。観客1600人、桑名市長も出演するという、ま、お祭りですが、地元に伝わる陶芸家の話として、多くの観客、市民に感動を与えました。

第68回公演―第16回ななわ小劇場　成井豊／作・坂下和代／演出、5月22日（土）23日（日）30日（日）4ステージ、稽古場公演「銀河旋律」この作品は再演です。演劇塾から若い入団者が数名あり、後々のスケジュールとの関係で、急遽作品を決定する必要に迫られ選定しました。

第69回公演―第2回ホテルシアター、6月5日（土）2日ステージ、桑名シティホテル紫雲の間、朗読劇「60歳のラブレター」NHK出版から「60歳のラブレター」から―住友信託が全国から公募したはがき1枚のラブレターを一冊の本に―この中から出演者が好きなものを選んで構成します。劇団員は若いのでほとんどの出演者は公募の市民です。これら一連の公演が終わっていよいよ「全日本演劇フェスティバルINくわな」の受け入れに突入です。

〔劇団京芸〕

今期も、「そうべえまっくろけのけ」、「アスモデウス」、「ラスト・ラン」、「さよなら竜馬」が、各地での巡演を開始いたしました。「アスモデウス」は、文化庁の本物の舞台芸術体験事業として、10月4日の新潟を皮切りに、富山・石川・福井・京都と南下いたします。付属俳優教室は昨年お休みさせていただいて、この4月、27期生をむかえて授業が始まりました。

DDシアター（京芸稽古場）での公演をなににするか、ただ今検討中。久々に一般のお客様にお会いすることができるのは、とても楽しみなこと。その節にはどうぞ皆様、お運びくださいますように。

〔関西芸術座〕

本誌が発行される7月には、全リ演の仲間の皆さんは、8月の全日本演劇フェスティバル参加への準備中でしょう。その頃関芸は、2年

に一度のファミリー劇場№4が、7月30日の初日を前に、あつい稽古をつみあげていることでしょう。4回とも演出を担当する松本昇三と、女優であり座付若手作家の勇来佳加とのコンビは、ますます好調です。学校・演劇鑑賞会レパートリー「少年H」も、中学校巡回公演「ひとりぼっちのロビンフッド」も、1学期を元気に走り始めました。しかし、文化行事・体育祭までとりやめて授業数をふやそうとする現状は、劇団を財政危機に追いこんでいます。

前号の追伸です。

平成15年度大阪芸術賞を、岩田直二が、大阪市文化功労賞を河東けいが、また関西俳優協議会新人賞を「少年H」の兄妹役の梶山文哉と枡崎由佳が、合わせて4人が受賞しました。

昨年の秋から、自主企画プロデュース公演が続きます。

今年に入ってからでも、5作品が開花しました。

演出家も作家も、演技者も自分たちの手で、力で、企画、制作に挑戦してゆく姿勢は、創造意欲の発露です。

（小笠原）

〔劇団未来〕

大阪春の演劇まつり参加第61回公演　ふたくちつよし／作『山茶花さいた』（6月11日～13日　森の宮プラネットホール）の本番が間近に迫っています。稽古に入って間もない3月初め、演出の森本景文が病気入院という事態になりましたが、幸い4月末より復帰、波田久夫との共同演出で進めています。大道具の仕上げ、役作りと、いよいよ終盤に向け各々悪戦苦闘していますが、よい舞台をめざし熱のこもった稽古場となっています。この公演に2人の新人が出演しています。また

その後続いて2人の入団者があり、スタッフの一員として参加しています。

4月10日和太鼓教室生8人（男4・女4）の卒業発表会をしました。次の教室は9月8日（水）から始めます。未来演劇塾・ワークショップを開きます。7月3日（土）より週1回3ヵ月。現在、参加者募集中です。

4月24・25日、大阪自立演劇連絡会議（劇団息吹、大阪府職演劇研究会、劇団大阪、劇団きづがわ、座・わだち、劇団未来）の交流会が劇団息吹でありました。わが劇団から10人が参加しました。全国の皆さん、この8月、桑名でお会いしましょう。楽しみにしています。

（則清）

〔大阪府職員演劇研究会〕

この原稿を書いている今、台風が通過しています。パンとかクッキーを販売する仕事をしている私にとって雨は悩みの種ですね。必要ではあるのですが降りすぎても困りものです。

さて、6月の公演に向けてけいこに励んでおります。今回は劇団メイクアップジェルと府職との合同公演が実現しました。多数の候補作が挙がりましたが、最終的に「ジュエリーBOX」という作品に決まりました。

この作品はメイクアップジェルの田中敏子さんのオリジナル作品で、何年か前に実際に上演されたものです。

それを改稿して役者も変わって新たな作品として上演します。日常的に何らかの悩みを抱えていきづまった7人の人物が登場する物語です。彼らが一堂に集い、それぞれのことで悩み苦しみ、それぞれの発見をし何かが見えて来ます。そんな彼らを観て「自分も同じだ」「そうだよね」

と思っていただければ幸いです。彼らはみんなの代表だからです。最終的には人にはそれぞれ自分にしかない輝きを持っているんだよという形で幕を降ろします。みなさん、それぞれの自分自身をみつけましょう。

（朝丸）

〔劇団大阪〕

春の本公演が中止となり、劇団稽古場ではプレヒト・ケラープロデュースによる「小市民の結婚式」ベルトルト・ブレヒト／作・市川明／翻訳・堀江ひろゆき／演出の稽古の真っ最中です。劇団大阪のメンバーを中心に毎日の稽古に熱が入ります。

また、今年は新人募集ワークショップも6月より開講し、新人発掘に力を入れていきます。次回の劇団通信では、ぜひとも新人入団！　の明るいニュースをお届けできればと思います。

そして、この夏の全日本演劇フェスティバルでは昨年春に公演致しました「スナーを探して」広島友好／作・熊本一／演出で、キャストも新たに非常に限られた稽古日数での上演の運びとなりました。10月の秋の本公演と稽古が重なることもあり、今年の劇団は夏以降が忙しくなりそうですが、皆様とまたお会いするのを楽しみにしております。

（伊藤）

〔劇団コーロ〕

今年の新作は次のように決まりました。

剛（たけし）&剛（たけし）。

原作／内海隆一郎「大づち小づち」（河出書房新社刊）

脚色／土勝弘之　演出／村上嘉利　美術／円斉　照明／福井邦夫　衣裳／三沢和子　音楽／仙波宏文　効果／須川由樹　制作／栗原和子

中井剛　15歳　タケシと呼ばれたりゴウと呼ばれたりバラバラだ。家族は母親だけ。その母親が宮大工の工務店に食べて寝て仕事も世話してくれるとこ頼んどいた、と勝手に決めて来た。棟梁といわれるオッサンは「まあ、興味湧くまでブラブラしとき」わけわからん…。

会場　ワッハ上方

日時　9月3日～5日

（四橋）

〔劇団息吹〕

全リ演演劇フェスティバルin桑名に、去年、劇団創立45周年記念公演で好評をいただいた『日本の牛』をもって参加します。皆さん大いに笑ってください。

でも、その前に、春の公演を成功させなければなりません。5月28日から30日までの3日間、4ステージ。この通信が皆様にお目にかかるころにはもう終わっています。

劇団始まって以来、初めて別役実さんの作品に挑戦します。しばらくの間、中国へ、勉強のため留学していた、坂手日登美の復帰第1回演出・別役作品2本・「寝られます」「トイレはこちら」。それと劇団にとっては再演になります、川村光夫さんの「めくらぶんど」を「ざとうえび」と題名を改め上演します。

「ざとうえび」のほうは木田昌秀演出です。1日に3本も上演するのは、劇団にとって初めてです。とにかく初めてづくしの春の公演です。もちろん大阪春の演劇まつり参加作品です。演劇まつりも28回をかぞえます。よく続いたものです、まず30回をめざして頑張ります。

8月の桑名でお会いできることを願って、すみからすみまで、とざいとうざいー、まずはこれまで　チョン。（柳辺）

〔劇団きつがわ〕

若手の自主公演『タイムリミット』（オカハシカヲリ／作・河塚俊哉／演出）は、ケイコ場で4月10、11日の計4ステージで約80人のお客様に観ていただき、無事終了しました。スタッフ・キャストのほとんどを若手だけの力でやりとげ、大きな自信になったのではないかと思います。

さて、劇団創立40周年記念公演『稲の旋律』（旭爪あかね／原作・佐伯洋・西村康悦・松本喜久夫／脚色・林田時夫／演出）は、クレオ大阪東で、10月15・16・17日に公演することが決定しました。今、脚本の改稿討議などをしながら、ケイコを始めております。久々の〝創作劇〟です。乞、ご期待ください!!

（山田）

〔神戸職演連〕

私たちは、2月21・22日、県民小劇場でサークル員でJR勤務の本多弘志／作「雄さん」を上演しました。

国鉄からJRへ、分割民営化当時の職場を描いたもので、人材活用センターと称して駅や工場の片隅の小屋に労働者を収容し、草むしりや文鎮作りなどをさせた。そんな中で「雄さん」は、ある無人駅に配置され、自分の職場がどうなるのか、どう生きればよいのかを悩み、考え、成長してゆきます。

職場の問題を職場の労働者が脚本にし、職場の仲間に観てもらう。私たちの芝居創りの一つの柱でもあり、全力で取り組みました。初日は神戸職演連の第54回公演、2日目は第45回「国鉄演劇祭」として、岡山職場演劇集団の創作劇「インターナビテレ」との二本立てでした。観客席には会社資本や行政当局による不当な差別と闘い続けている方たちが多くおられ、共感の涙と拍手をいただきました。

今回の公演も、神戸ドラマ館ボレロの皆さんの全面協力を得て実現できたことを申し添えます。また、ボレロの皆さんとは5月3日の「憲法会議」主催の集会に、毎年優れた評価を得ている、創作寸劇として「トレビアの歪み」を成功させました。今後ともよろしくお願いいたします。

〔神戸ドラマ館ボレロ〕

4月9日、故梶武史氏のお葬式に参列させていただきました。梶さんのお人柄を象徴するような快晴で、まっ青な空と白い雲、そして、笑顔のご遺影が心にしみました。数々の暖かいご指導を私たちは忘れません。ありがとうございました。心よりご冥福をお祈り致します。

さて、久しぶりの劇団通信となりますが…。

恒例の憲法集会が5月3日、兵庫県民会館で行われました。今年も、浜嶋氏の書きおろし作品「トリビアの歪（ひずみ）」で職演連さんと共に参加。20分ほどの寸劇で、ストーリーは、自衛隊が復興支援の名の下にアメリカによって破壊しつくされたトリビア国へのりこむというタイムリーなもの（この作品に興味ある方はボレロまで一報ください）。

今年は憲法への関心が高まってきているのか、パイプ椅子を追加するほどの盛況ぶりでした。

集会の成功につづき、我々ボレロの公演8月7、8日「見果てぬ夢」も大成功といきたいものです。しかし、あと3ヵ月！　充実した稽古で、集中していきたいと思います。

（山本圭子）

〔劇団四紀会〕

既報の通り、私ども劇団四紀会創立メンバーの1人であり、西リ演の議長も務めさせていただきました梶武史が、4年間に及ぶ闘病生活の末、4月7日、ついに帰らぬ人となりました。享年72歳。全リ演の皆様には、大変なお気遣いをいただき、本当にありがとうございました。梶亡き後も、劇団員一同、全力で頑張ってまいりますので、変わらぬご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

梶武史の死という、私たちにとっては、阪神淡路大震災以来ともいえる事態に遭遇し、上演予定だった「カンナの咲き乱れるはて」を急遽変更、追悼公演と銘打ち、彼が演技者として光彩を放った「雪やこんこん―湯の花劇場物語―」に取り組む運びとなりました。残念ながら6月上演のため、今号発行時には終わっていることになりますが、今現在は、だれよりも天国の梶に喜んでもらえればと、表も裏も大車輪で追い上げているところです。それでは皆さん、フェスティバルでお会いしましょう!!　（里中）

〔劇団かすがい〕

劇団かすがい35周年記念公演第1弾『貧乏物語』（井上ひさし／作・楢崎英三／演出）を5月28日・29日に尼崎ピッコロシアターで無事終えることができました。今回は「35周年記念公演を成功させる実行委員会」もたち上げ、団員のみならず、サポートメンバーとともに、日々、制作活動にも力を入れてきました。

3回の公演はいずれも大盛況でした。これだけたくさんの人たちが、この公演のために動いてくれているのだから、成功しないはずがない!!

と役者陣もいつも以上に熱のこもった稽古をこの半年間続けてきました。支えてくれたスタッフと、観にきてくれたお客さんには本当に感謝しています。

この充実感と自信を次の公演につなげていこうと、7月からは、35周年記念公演の第2弾の準備に取りかかります。12月4日・5日、またまた井上ひさし作品で『イヌの仇討』をピッコロシアターで上演します。こちらもすでに気合い充分、実行委員会メンバーとともに、12月に向けて、また走り始めます。この作品に早くも興味を示してくれたお客さんや、役者として出てみたい！　という方も何人かいて、第2弾公演もにぎやかに稽古が始まりそうです。

（松下芳美）

〔演劇集団和歌山〕

ようやく公演内容が決まりました。9月25日「月の砂漠」、和歌浦アートキューブ。会場は劇団稽古場すぐ近く、昨年オープンした、客席数200のホール。風光明媚な景勝地にあります。遠方の方もぜひ一度おいでください。なお、『月の砂漠』は『ドラマの森③』に収録された、楠本幸男の新境地。作者には珍しく、家庭の問題に真っ正面から取り組んだ作品です。また、これまで楠本による作・演出が続いていましたが、今回は山入演出による楠本作品という初めての組み合わせです。ご期待ください。

劇団の方は新入団員がなく、人手が足りない状態です。劇団員募集のポスターをつくったり、マスコミに要請したりですが、今年はどういうわけかとんと音沙汰がありません。みなさんの劇団ではいかがでしょうか。

〔シアター生駒〕

とってもうれしいお知らせをさせていただきます。劇団

の長い間の念願希望でありました新人オーディションに、マスコミ各紙のご協力もあって、なんと12人の応募があり、目下演劇ワークショップに参加し頑張っております。

私たち熟女組は（演出家は若手、古手と言っております）初めての試みとして朗読劇「広島第二県女二年西組」（関千枝子著）（熊本一演出）を6月27日（日）午前11時、午後15時の2回公演で生駒の新しいホールISTA「はばたき」で上演、12月4日（土）には生駒演劇鑑賞会で「50年目の戦場神戸」を生駒中央公民館サンホールにて公演予定です。

「原爆」「震災」と社会性テーマ性の高い2作品が続きますが、あまり気負うことなく生命の尊さ、平和の尊さをそれぞれの想いで伝えることができたらと願っております。（岡）

〔演劇集団あり〕

昨年、鳥取県文化財団へ「ふるさとの文学作品をドラマリーディング」としての上演を提案し、財団主催で、大正期に翻訳、評論、劇作、女性解放運動と活躍した、生田長江の戯曲を、指導者を迎え、参加者公募を行い、10日に公演しました。新しい創造活動と評価され、今後も継続が見込まれています。

この公演には「あり」からも数人が関わるなか、並行して11月9日、兼平陽子／作「懐かしき人々」を病後の前田昭／演出で行いました。

作品内容から、高齢者優待を行い家族の観客も多く、家庭内対話もあったり、狭い街ゆえに高齢者の同窓会的集いが、何組も見られて、昼夜2回公演で600人ほどの観客がありました。

県事業の「ドラマリーディング」では、キャスト・スタッフの完全分離などの恵まれた面もあり、集団離れが見られ、反省もあります。

9月公演「ら抜きの殺意」にむけて新しい仲間も多く迎え、体制を固め稽古に入っています。国語の先生の善意により、日本のことばの勉強会も行います。（宮倉義文）

〔劇団あしぶえ〕

今年開催される「第2回八雲国際演劇祭」の参加劇団が正式に決定しました。今回は27ヵ国32劇団の問い合わせのうち、13ヵ国14劇団からの申し込みがあり、コンテスト公演には、ベネズエラ、リトアニア、アメリカ、エストニア、スペインからの5劇団、特別公演として、日本からイエローマングループ、キューバの子ども劇団、ベルギーの人気ピエロ、そしてあしぶえが参加します。その他、カナダ、アメリカ、日本から審査員がそれぞれ1人ずつ、カナダ、インド、バングラディッシュ、コンゴ、ケニアからはオブザーバーも参加し、合計13ヵ国の人たちが集うとても賑やかな演劇祭になりそうです。

さて劇団の方では、今夏公演の新作「彦市ばなし」木下順二／作・園山土筆／演出の稽古に励んでいます。舞台装置もできあがり、回り舞台を使った本格的な稽古が始まりました。生活の中で生まれる〔おかしさ〕〔笑い〕を鋭く描いて、深い作品にしたい！とみんなでがんばっています。ぜひ、しいの実シアターへ足をお運びください。（原　敬彦）

〔劇団演劇街〕

トラムさんとの合同公演「夏の夜の夢 ムーンアンドサン」も終わり、翌月の「注文の多い料理店」も終わり、一息つきすぎて、劇団員の人数

低下に驚いている昨今です。

「夏の夜の夢～」では近年にない盛り上がりで、演じていて、客席が笑いで津波のように波打つのを体験しました。「喜劇作家とか喜劇役者とか、そんな幸福な身分になれるものなら、わたしは周囲の者に憎まれても、貧乏しても、りっぱに堪えてみせます。屋根うら住まいをしても、黒パンばかりかじって、自分への不満だの、未熟さだのに悩んだってかまわない。その代わり、わたしは要求する、笑いを……本当の、割れ返るような笑いを。……（両手で顔をおおう）頭がくらくらする……ああ！」

次は秋か冬に、家族向け音楽劇の予定。広島友好書き下ろし。

（引用はチェーホフ「かもめ」神西清訳　少し変えてあります）（広島友好）

〔テアトルハカタ〕

毎年のように年間スケジュールの検討時期のため、検討中の作品もあり、ハッキリ書けないこともあり、ついついのびのびになってご迷惑をかけることになってしまう。お客様あっての私たちの仕事、現在、自前公演は少なくしているもので、本公演抜きの、現在のスケジュールです。

九州エネルギー館ホールで、6月13日（日）「大きな柿の木の下で」（サルカニ合戦より）徳満亮一／作・中村ジョー／演出。他に10会場で「プレーメンの音楽隊」、養護学校も含め町おこし文化事業として決まっています。

劇団という形に関して、このままでいいのか？　いろいろな形の集団体制が活動している現在、これからの若い人たちの問題も含めて、改めて温故知新。（中村）

〔劇団生活舞台〕

今年創立50年を迎えます。50年の歴史は、ジグザグな道でしたが、途絶えることなく進んできたことを誇りに、いま50年記念の夢に沸いています。第1弾は9月17・18日、「ゆかいなどろぼうたち」。

劇団の年間スケジュールの一つに憲法劇がありますが、この母体である憲法劇団「ひまわり一座」も今年創立15周年をむかえました。

5月3日、憲法劇団「ひまわり一座」は少年科学文化会館で「セピア色の戦争」を超満員の観客を前に上演しました。イラクへの自衛隊派遣―有事法制の国会審議入りを前にして、平和憲法への危機の反映でしょうか、翌日の大新聞は千人の観客と驚きをもって報道していました。

〔福岡現代劇場〕

昨年、45周年記念公演として、第1弾「夜の来訪者」J・B・プリストリィー／作・猿渡公一／演出。第2弾「マンザナわが町」井上ひさし／作・猿渡公一／演出を上演し、好評のうちに終了しました。

現在は、小品の戯曲を2本練習用テキストとして稽古をしています。1本は「彦市ばなし」です。両作品とも骨格のしっかりした戯曲で、現代に通じる人間の愚かさ、したたかさなどを内包している優れた脚本です。若手たちは、昨年公演した経験を生かし、役者として新しい自分を開拓しようと別メニューで、自分たちだけの練習日を作り、いろいろなエチュードを稽古しています。これから暑い、熱い季節が来ます。社会も少しづつですが変革の様子が見えてきています。皆さんも大いに自分に変化を求めて、羽ばたいてください。（新平）

歴史的な劇団財産から学ぶものとして

演劇ライター　鈴木　太郎

今年は多くの劇団が節目の年を迎えている。60周年が俳優座、50周年が青年座、東演、東京演劇アンサンブル、劇団仲間などである。そして東京芸術座は45周年、青年劇場は40周年である。長い歴史の積み重ねの上に今日の演劇運動が成立していることを思わずにはいられない。そのような歴史的な財産から何を学び、新たな出発点とするのか、課題は多くあるように思う。

劇団石るつ『相寄る魂』

ギィ・フォワシィ／作　利光哲夫／演出

「現代フランス演劇ギィ・フォアシィ演劇コンクール」の参加作品。このコンクールは谷正雄が主宰するギィ・フォアシィ・シアター（5月に結成28年祭を開く）が企画したもので、第1次、第2次審査の結果9チームによる競演となった。上演作品は『相寄る魂』『ストレス解消センター行き』『爆弾ごっこ』の3本（すべて一幕劇）から1本を選び、上演時間は30分以内という条件であった。ギィ・フォアシィはブラック・ユーモア作家の第一人者。この3本の作品に共通したテーマについて「人間ひとりひとりの存在を否定し、単なる消費者へと還元する社会がひしひしと押し寄せることがもたらす疎外」であると、公演プログラムに記している。『相寄る魂』は1971年コメディ・フランセーズで上演され、日本では77年に初演、その後も上演されてきた人気の高い作品のひとつとなっている。

この作品の登場人物は「彼」と「彼女」の二人。セットは公園のベンチがひとつと落ち葉が少しというシンプルなもの。冒頭、彼女の座っているベンチのところへ彼が近づき「あのォここに坐ってもいいですか？あなたの横に」と話しかける。ここから、幸福とはなにか、戦争とはなにか、愛の勝利とはなにか、2人が結婚したあとの生活の夢にまで、会話は展開していく。そして、「さよなら、また明日」「ええ、また明日ね。」というせりふで終わる。彼と彼女の心の葛藤が、せりふの行間にみえかくれしながら、都会に住む人びとの不安感や猜疑心などがあきらかになってくる。作者のいう人間疎外がもたらす現象への警告とも受け取れる内容である。

井乃上芳暁、いとうエリコのふたりはベテランらしい味のある演技をみせていた。覚えにくいせりふと格闘してきた努力があってのことだろうが、せりふに大仰さはなく、落ち着いたリズム感をもたせ、あきさせることはなかった。男と女の微妙な心理の違いや、落ち葉を拾うシーンひとつにも情感があり安定感があった。ただ、2人の会話がはずみ夢を語るシーンに、もう少し若さと明るさが出ていれば、最後の現実に戻ったときとの落差が、より鮮明になったのではないか、と思われた。

（2月14日　東京・両国・シアターX）

東京芸術座『遠い水の記憶』

神品正子／作　印南貞人／演出

劇団創立45周年記念公演。劇団のアトリエをつかった小規模な舞台構成が功を奏したと感じさせる爽やかな公演となった。水泳選手と視覚障害者との体当たり的な交流が題材であり、いきいきとした感性が素直なドラマをつくりあげたといえる。そのところが評価したい点である。

スポーツをあつかった舞台としては、大阪を拠点にするランニングシアター・ダッシュである。彼らの舞台を注目していくつかみてきてが、ザ・スズナリのような狭い劇場でも、シアターサンモールのような中劇場でも、なにしろ、走る、走る、走る、走るのである。野球でも水泳でも主題が違っても、走ることには変りなく、その走る姿がもう演劇的表現になっているほどである。ここは別格である。

この舞台の作家もランニングシアター・ダッシュや劇団S・W・A・Iの公演に触れて新しい舞台表現の可能性をみいだしたようである。激しい動きを抽象化してしまうということであった。したがって、水泳選手や生徒が泳ぐシーンはあるが、実際には水を使わないし、裸になることもない。プールはイメージで十分であるし、水泳シーンも動きだけの処理で十分であった。このあたりは演出の工夫だろうか、ターンする動

きなどにもかなりリアルさがあった。

バルセロナ・オリンピックの平泳ぎでメダルが期待されていたタカハシは、代表選考会で無念の三位に終わる。優勝したのは若いハヤシであった。タカハシは、競技から遠ざかり教師を目指す。そんなとき、都立の盲学校から保健体育の教師の要請があり、それに応える。視覚障害者の生徒と水泳を通しての交流が始まるが、一筋縄ではいかない。タカハシに敵意をもつ生徒の鈴木一郎をはじめ、学校をとりまく環境も厳しい。タカハシ自身が泳ぐことによって生徒たちに自信をもたせていく過程なども、うまく処理されていく。

A・Bのダブルキャストだが、タカハシの鈴木健一朗、校長の浅田和子など数人は共通している。健一朗の体が細いので水泳選手には見えないぞと思っていたが、舞台ではそれらしくみせていたのは立派。視覚障害者の中学生役をやった白木沙織、谷合芳詩美、それに深井八郎（B）が好演。豆腐店夫婦の笹岡洋介・西堀鈴江（A）、ハヤシの中村亮（B）も持ち味を発揮していた。幡野寛の美術はシンプルな中に舞台に奥行きをもたせ効果的であった。

（3月26日・4月2日　東京・上野草・東京芸術劇場シアタートリエ）

劇団銅鑼×ヴァイトクス・スタジオ
〝P・S〟（リトアニア）合同公演
『sakura―イン・ザ・ウインド』
アイワラス・ムックス／作　ヨーナス・ヴァイトクス演出

「センポ・スギハァラ」のリトアニア公演から10年、銅鑼は劇団としてリトラニアとの交流を深めてきた。合同公演するための作品を探し、〝シベリア抑留〟という題材に出合ってから7年を経て実現した公演である。リトラニア共和国はロシアの西側、バトル三国のなかでもっとも南に位置する。人口は370万人、国立劇場は13ある。歌や踊りの好きな国民性をもっている国である。演出のヴァイトクスは2003年度リトアニア舞台芸術の最高賞「リトアニア・ナショナル賞」を受賞するなど、斬新な演出で知られている。「sakura」は、シベリア収容所で確かに出会っていた日本人とリトアニア人の共通体験をもとに、両国の文化を織り交ぜながら、フィクションを多用して描かれた作品である。

稽古中、劇団のひとりは「彼らの自由で柔軟な演技発想には毎日驚かされることの連続です。彼らは国家試験を通って俳優になるのでその実力も確かなもの。作家、演出家、美術家もリトアニア人なので、普段日

本ではなかなか観ることのできないスタイルの演劇表現になります」（黒田志保の「徒然に」から）と記している。かなり、大胆な刺激を受けていることが文面からもうかがえた。舞台はロシアの辺境に建てられたシベリア強制収容所。日本人兵士タケシ・トクナガとリトアニアの女性・看護婦のオヌテが出会い、お互いに惹かれていく。しかし、この2人をめぐって収容所内では事件は次つぎと起こる。日本語とリトアニア語が飛びかい、アクションも多く動きはなかなか激しい。音楽も金属的で音量もあり喧騒だったが、舞台が熱く燃えていたのか、あまり不快感はなかった。翻訳と字幕スーパーは川本燁子が担当している。

シベリアの犬になった8人の男たちがしっぽをもって暴れ回る冒頭のシーンはインパクトが強い。この犬たちが日本人捕虜と二役をこなしている。佐藤文雄や黒田志保などの動きが、暗い舞台のなかでも確認することができたのは不思議でもあった。主役のタケシ役の植木圭も好演。医師としての立場からリトアニア人の患者を治すなど、日本側の代表的な人物設定になっているが、そのあたりの強気な性格をうまく出していた。リトアニアの俳優たちの演技力はさすがに力量を感じさせるものがあった。不明瞭だったのは日本側の女性陣によるコーラス隊の存在である。舞台上の効果などからみても意味不明で、理解することができなかった。

（3月28日　東京・六本木・俳優座劇場）

青年劇場『GULF（ガルフ）―弟の戦争』
ロバート・ウェストール／原作　篠原久美子／脚本
高瀬久男／演出

『弟の戦争』（徳間書店刊）を読んだとき、一気に読ませる迫力とストーリーの展開に魅了された記憶が残っていた。原作者のロバート・ウェストール（1929～93）は、「イギリスの児童文学作家で、数々の受賞歴を誇るだけでなく、読者である子どもたちにも絶大な支持を得ていました」と原田勝は記している（『弟の戦争』の翻訳者・「季刊　青年劇場」）。そして、『弟の戦争』は「湾岸戦争を主題にした物語ですが、当時ウェストールは、あの一方的な戦争や、戦争をめぐる報道のあり方に強い怒りを覚え、後半部分を一気に書き上げたそうです」とつづけている。

舞台化にあたっては演出の高瀬久男から劇作家の篠原久美子に話があった。この二人のコンビはすでに「ケブラー―あこがれの星海航路」で

共同作業をしていた。今回も、かなりハードな作業を経たことは、プログラムでの両人の対談でもあきらかにされている。この対談は、脚本の書き直しから始まって作品創造の過程など、忌憚のない内容で興味深い読み物になっている。「最終的に舞台に上がった役者がお客さんに対峙した時が完成ですから。だから稽古場ではよくても80%。後の20%は未知のものなのです。だとすると、僕たちができるのは構造やらアイデアやら、ある確信やらを土壌にしておかなくてはいけない」(高瀬)など、ここで問題提起されたことが、実際の舞台にどのように反映させるのかが課題として残されていた。

1990年のロンドン。トムの家族は理想的な家族だった。父は強くてたくましいラグビーの名選手、母は面倒見のいい州議会議員。しかし、弟のアンディは時おり不思議な行動を起こす。木から落ちた子リスや新聞に載った難民の子にとりつかれたように悲しみや苦しみを訴える。湾岸戦争が始まったとき、「俺の名はラティーフ。イラクにいる」と叫ぶ。「夢」が始まったとおもっていたトムだが、アンディの行動はエスカレートしていく。

具体的な戦争をイメージしているだけに、即時的なテーマ性は際立っていて、緊張感のある舞台が構築されていた。その半面、若い俳優を中心にしたアンサンブルだけに、荒削りな印象が散見されて、せりふが一方的に走ってしまい、会話として成立していなかったことなどもあり、全体的にいうと、高瀬のいう「20%の未知」という部分がうまく昇華されていない思いをもった。構成的に疑問に思ったのは精神科医ラシードの登場が早すぎたことである。彼の登場によって、アンディのもつ心の多感さが病的背景をもっていることを証拠立ててしまったからである。少なくとも後半からの登場でよく、前半では幻想的な暗示を有効に扱ってもよかったのでないかと感じた。

トムの反田孝幸はまだ文学座研究所研修科一年の新人だが、ややもすれば単調になりがちだったが役にとりくむ懸命さ、アンディの船津基の精神的に難解さをともなう役を消化して演じたなみなみならぬ力量は評価されていい。残念に思ったのは父親の杉本光弘だった。高い声を出しているにもかかわらず、せりふとして聞き取れなかったことと、動きも大ぶりで空回りしている感じがしたからだ。スポーツ選手という意識が働いていたのだろうが、もう少し冷静さが欲しいところだ。石井みつるの美術、河崎宏の音楽はともに効果的だった。

(2月18日　東京・新宿・朝日生命ホール)

古い劇団に新しい波

関西芸術座の中堅・若手を中心とした個性的な公演が続いた。2つについて書く。

関西芸術座『リズム』

森絵都／原作　勇来佳加／脚色　松本昇三／演出

演劇評論家　神澤　和明

高校受験をやめ、バイトしながらバンドで歌っている従兄弟の真ちゃん。大人は眉をひそめるけれど、中学生のさゆきには憧れの人だ。でも、真ちゃんの両親は離婚しそうになり、バンドも解散。真ちゃんが歌をやめて就職する？　何がなんだかわからなくって、さゆきの心はめちゃくちゃになりそうだ。

ファミリー向けの、ちょっと深刻で、でも明るくて胸が温かくなる芝居である。この種の芝居づくりに慣れた脚色者、演出者はテキパキと話を進め、笑いを散りばめ、観客を飽きさせない。上演時間以上の内容を詰め込むための省略と誇張した演技表現が、時に過剰なほどだけれど、辻褄のあわない展開にはならない。

軽快なテンポと躍動感は、若い演技者たちによって支えられる。彼らに積極的に演じさせたのも、演出者の手柄だ。演技は一時的で単純な感情を説明するにとどまるが、全体の流れの中で各場面の役割を強調するために、個々の演技を薄くしたと理解しよう。

真ちゃんの生き方を肯定するために、彼に社会人として一人前になってほしいと苦心する大人たちの行為

が「押しつけ」として表されていることは気になる。そして真ちゃんはさゆきにとってのシンボルとして存在させられ、個人の人格としての悩みは描かれていない。さゆきと親友たちはテンション高く面白みのある役柄だが、家族や先生といった、それ以外の人たちは平板に描写されて終わっている。そして「心の中でリズムをとれば、周りがどんなに変わっても、自分のままでいられる」というモチーフがたってこない。だがその代わりに、『リズム』の続編にあたる『ゴールド・フィッシュ』と併せて台本を作ったことによって、真ちゃんを「夢を追いかける自分」の代理にしていたさゆきが、小さなものでも自分自身の夢をもたなくてはと気づくという、精神的成長の部分が描けた。むしろその方が、テーマとしては素直だろう。

岡村直美（さゆき）、恒川愛子（美砂）、境谷純（陽子）の中学生トリオが頑張った。岡村は声に癖があり力みも見えるが、勉強が苦手で特技もなく、落ち込まないのが取り柄の女の子を具現化している。恒川は役には大柄すぎるが、明瞭な声とダイナミックな動きで観客の目をひく。想像力豊かでお話を作るのが得意、という設定より、常識をもったリアリストの方がふさわしいだろう。境谷は見かけは繊細だが、気が強くドジも踏むというアンバランスを強調する。これにさゆきの幼馴染み、泣き虫のテツが加わる。始めは目立たないが、次第に男らしくなってゆき、家業の魚屋を継いで日本一になるという彼こそ自分の夢をもつ人物であり、本当の主人公なのではないかと思わせる。演じた紫翠聖はその変化をわざとらしくなく示して、これも好演だ。真ちゃんの丸山銀也は素直で明るい演技で好感がもてるが、少しは陰がほしい。

（2月25日　関芸スタジオ所見）

Reptiles『心の面影～マイケルと私～』

福寿　淳／作・演出

「れぷているず」は劇団の中堅俳優・福寿淳が中心となり、若い劇団員を集めたユニットだ。台詞まわしが巧みで演技にユーモア感を漂わせる面白い俳優だが、その演出も工夫に富み、〝芝居好き〟を感じさせる。舞台全体から受け取られるほのぼのとした暖かさは、松本演出とはまた異なり、人情喜劇に近いものがある。

ある寺の新米住職・井沢のところに、褐色の肌をした青年が訪ねてくる。彼は20年前、学生時代の井沢が、

借金がもとでやくざに追われ逃げ込んできた男に頼まれ、数日間、下宿で一緒に暮らした孤児、マイケルだった。井沢の記憶は20年前にさかのぼる。

人々が他人に対して無関心になり、親が子を虐待することが珍しくない風潮に対して、自分を犠牲にしてまで他人のために骨を折ろうとする一人の善意に、周りの者が当たり前のように協力してゆく、そんな心のつながりの素晴らしさを描きたいというのが、作者の意図である。演技の深まりは不足するが、みんなで暖かく楽しい気分を作り出そうということで、まとまっている。

施設で育ったため周りに媚びる癖がついたマイケルが、若者たちとの交流で彼が大きく変わってゆくという展開も描けただろう。彼を匿っていることを誰にも隠さなければならないとなれば、ドタバタの展開もできたろう。だが若者たちが保護者顔でマイケルと「交流」しているだけでは、舞台が止まってしまう。そこで、逃げた男がマイケルを連れに戻ってくるのを待ち受けるため、やくざが伊沢の後輩の受験生に変装して部屋に居候するという不自然な設定が持ち込まれた。それなら、そのことがもっと芝居を動かしてゆかねばなるまい。彼もやはり施設育ちで、結局マイケルたちに同情し、親分を裏切って足を洗うという展開を必然にするだけの、彼を中心にした展開がほしい。踏み込みが足りないというもどかしさが感じられる。『リズム』に共通するのだが、〝なにげない人〟の描き方が弱く、笑いをとるエクセントリックな人物に凝ってしまっている。

演出の工夫として、舞台転換の間、舞台で演じられない場面をスライドで映してゆく。注意を分散してしまう手法だが、今回は結構、効果的に使われていた。

城土井大智の伊沢が、要領は悪いが誠実で、他人のために努力を惜しまない好人物を表現して、成功している。演技がこぢんまりしているが、役の気持ちと自分の気持ちをうまくシンクロさせて、感情の動きが自然に見えてくる。お調子者の友人を演じる増田宏之は、憎めない困った奴を演じて面白い。やくざを演じる梶山文哉は、持ち味が凄みから遠いが、好人物を装う「後輩君」の時や、伊沢の話に心を打たれてマイケルたちを見逃す決意をするあたりは、はまっている。『リズム』と共通して出ている恒川愛子が、若者の中の大人、太っ腹の大家のおばさんを、苦労して演じている。ベテランが振られるべき役だけに気の毒だが、よく頑張った。

（4月23日　関芸スタジオ所見）

人間座『翁家』

田口竹男／作　松本　徹／演出

言葉に惹き付けられた京都の舞台を記す。

京都木屋町に50年続いた老舗旅館、翁家。女主人・つねが頑なに守ってきたが、不景気と戦争に向かう時勢には抗せない。こどもたちも後を継ぐ意志はなく、時代の流れの中で、翁家はついに人手に渡ることになる。

巧みな京都弁が芝居の世界を作り、登場人物を生き生きと描写している。複雑なニュアンスをはらんで、複数の層にわたる感情をほのめかすと同時に、表れる言葉と本心の間に距離を置き、人間関係における武器として働く。それはまさに〝ソフィスティケイト〟という表現にふさわしい。そんな言葉に囲まれて暮らしてきて、ふとすべての遠慮、気遣いがなくなって、ありのままの状況にさらされた時、大きな寂しさの中に落ち込んでしまうかもしれない。チェホフの『桜の園』を、農地改革を背景に、没落華族の話として京都弁でやってみたくなった。

つねを演じる菱井喜美子には、自分が翁家を支えているという自負、維持しなければならないという責任感、雇い人への気配り、思い通りにならないこどもたちへの恨みと、それを許してしまう母親の甘さ、そして無力を感じた時の孤独、こうしたさまざまな感情を併せて、しゃんとした演技の中に見せていた。適役だ。つねの弟の由造は「冬芽舎」の氏田敦。世間慣れした商店主でつねの相談役になるかと思えば、借金取りから逃げるためにたびたび翁家に潜り込んでくる、頼りなさもある京男を落ち着いた演技で表現する。「アノニム」から客演の松田潤はつねの息子・要吉で、一家を構える表具師でありながら、何かというと都合の悪いことを他人のせいにして愚痴る、わがままで甘えの強い坊ちゃん気質が抜けない男を見せてくれる。養女・秀子を演じた江本佳代子は、控えめというよりウジウジした娘を造形することによって、つねの強さ、圧迫をほのめかす。仲居のおくにの武田整子がまた良い演技で、主人一家を客観的に見ながら、そつなくつとめる遣り手ぶり。京都弁の扱いも菱井とは異ならせ、主人と奉公人の立場の違いを示していた。それぞれの役柄がたってくる演技で、良い舞台に仕上がっていた。

（3月21日　人間座スタジオ所見）

中部ブロック春の公演より——アトリエ公演を観てまわる

劇団名古屋　久保田　明

稽古場を劇場とすれば、手狭であっても本番さながらの稽古がたっぷりできる。仕込みから本番までわずか一日、ゲネプロすら不十分なまま幕を開けるホール公演のミスの多い展開はしなくてすむだろう。キャパは少なくてもステージ数を多くとれる。土、日3ステージ、初日・中日・楽日がいいとこの公演に比べれば、2週間にわたっての週末公演もできよう。加えてご近所にも働きかけ、文字通り地域に根差す劇団の力量のほどを確認もできよう。中部ブロック3劇団のアトリエ公演はそれぞれ積極的な意欲の感じられる公演であった。

上野市民劇場〈ふくきたわかつ一人語り〉『芭蕉翁桃青　—その内なる枯野から』（10ステージ）

島田九輔／作　杉森正美／演出

劇団名古屋の稽古場は熱田妙安寺の境内にある。ここには芭蕉の「此のうみに草鞋すてん笠しぐれ」の句碑がある。芭蕉が「野ざらし紀行」の道中に巡り、七部集の最初に位置する「冬の日」を成したのは名古屋であった。その名古屋から伊賀上野まで高速バスで1時間半。車中で私は井上ひさしの「芭蕉通夜舟」を読んだ。歌仙にちなんで36景。これは芭蕉俳諧のわび、さび、かるみの成り立ちを描く井上芭蕉論でもあった。バスを降り立った伊賀上野市産業会館前の観光案内所の女性は、福北さんの芝居のあることを知っていた。芝居小屋の在りかをていねいに教えてくれた。上野市民劇場は市民権を持っている。半日、上野公園にある芭蕉翁記念館から俳聖殿、芭蕉翁生家から縁の地を巡った私は、その締めくくりとして、丸の内芝居小屋の幟の立つ上野市民劇場の小屋に座った。どんな芭蕉が現れるか。

ビルの3階の決して広くはない

空間に一度消えた明かりが再び射す。そこはわずかなススキを背景にした、「旅に病んで夢は枯れ野をかけめぐり」の「夢」に現れ消える枯れ野であろうか。はたまた芭蕉の冥土への途次であろうか。ゆっくりと、ゆっくりと現れた福北芭蕉が静かに語りだした世界は……。作者島田九輔はここで大胆な仮説を立て、フィクションを交える。芭蕉には初恋の女性で、晩年の一時期、共に住まおうとした女性寿貞がいたといわれる。島田作品では江戸に出る前に子どもをなしながら、早逝したお考という女性の存在を浮かびあがらせるのである。そして江戸の芭蕉の許に妾奉公にきたお考似のお貞、さらに芭蕉が江戸に連れて行き、後に桃印と名乗らせた友之助が妹の子ではなく、実はお考との間に出来た芭蕉の実の息子であったと。その桃印がお貞と通じ、芭蕉の許を離れる。さらには桃印、お貞が芭蕉に先だって死ぬに至る悲劇の因が芭蕉その人にあったと、語り続けられる。

子守する少年時代の芭蕉が不注意ゆえに妹のおひさを水死させてしまうエピソードを加え、福北芭蕉の語りの本筋は、芭蕉の生涯が3人の女性の死の影と共にあったことを示す。それは芭蕉のみならず、常に死の影と共に在らざるを得ない人間の生きることの、業が語られているとも思われた。俳諧を生涯のなりわいとし、命ともし、俳聖とまで呼ばれた男の「夢は枯れ野をかけめぐり」の「夢はなんであったのかのう」とつぶやく福北芭蕉の最後のことばに解答はみえない。問い続け生き続けた人間芭蕉の姿がくっきりしていた。

一人芝居は時に観る者に過分の緊張を強いることがある。ほんの少しの言いよどみにも余分な心配を感じさせてしまうことがある。福北さんは見事だった。少しの不安も抱かせず、芭蕉の人生を静かに語っていった。我と我が人生を語っているかのようであった。

ふとこんなことを考えた。過ぎた人生はもはや変えようもないが、振り返って思う、その思いはその時々

で全く別物になるのではないか。懐かしさが募るとき、恥ずかしさに身もだえしたくなるとき、悔しさに狂い出したくなるときなどなど。演出の杉森正美さん、60分の語りがどんな響きになって現れるか、福北さん自身にも予測のつかないようなそんな語りを語らせてみないか。そんな自在な展開が、福北芭蕉には可能ではないだろうかと、私の夢はさらにかけめぐったのである。

（4月9～11日）

劇団名芸〈第9回研究公演〉
『楽屋―男と女の』（9ステージ）

清水邦夫／作　栗木英章／演出

劇団名芸の小劇場は、名古屋の西と東に別れているが、私の家から地下鉄一本でつながっていて所要時間30分。昨年の後半は名古屋劇団協議会合同公演の稽古場として毎日演出に通ったなじみの場所だ。名芸のホームシアターでもあって、この小劇場で本公演、子ども劇場が繰りひろげられることもある。天井は高く、舞台間口も広く、客席、舞台ともに安定感がある。

劇団名芸での本格的な初演出に、劇団座付き作家である栗木英章さんは、清水邦夫に伍して、男版「楽屋」を加えた。さらにその外枠に、かつて舞台に立ったことのある、営業マン（山本龍介）を登場させ、この男の仕事に倦んだ一時の夢として、まずは男版『楽屋』を始める。いささか幼い営業マンの演技は、さほどの効果はあげなかったが、この後展開する世界を親しみあるものにしたとは思う。

さて、男版『楽屋』は名芸なじみのシェイクスピア「ハムレット」を公演している名古屋の劇場の「楽屋」。東京を捨て名古屋へ戻り、この「ハムレット」を演出するジャガイモみたいな顔の男（高村真一）、若く長身の、まだ役者としては未熟なハムレット役者（佐藤智洋）、そしてベテラン墓掘り（佐野秀明）とくれば、劇団名芸のファンなら作者の当て書きと読めなくもない。加えて、栗木版ハムレットの随所に織り込まれた赤い布が「民衆の旗」になぞらえられると、栗木さんの演劇論にもなっていた。

さて、清水邦夫の本番『楽屋』は、夢から覚めた営業マンが、夢にあおられ、劇場に飛び込んで観る舞台となる。もっとも、夢の続きと思えなくもない。男とすれ違うナレーター（栗木慶子）は「日々のいのちの営

みがときにあなたを欺いたとて、悲しみをまた憤りを抱かないでほしい。悲しい日々には心をおだやかに保てば、きっとふたたびよろこびの日がおとずれようから」とつぶやく。

私が観た日の女優たちは、目の横に火傷の痕のあるAを長田芳江、喉に包帯を巻いたBを野田江美、ニーナの扮装をしたCを近藤亜由美、大きな枕を抱えた女優Dを武藤陽子が演じた。舞台は清水作品の引き締まった構成と、A、Bの掛け合い漫才的な言葉選びを、栗木演出はリズムよく、テンポよく運ぶ。せりふは明快に飛び交い、動きもめりはりがあり、観ていて飽きることのない、いい舞台であった。

死んでも楽屋から消え去ることのできないA、Bの、永久に訪れることのない出番を待ってメイクする姿。やっと手に入れたニーナ役に苦しむC。Cのブロンプ役で体調を崩し入院していたDは、ニーナ役を返してほしいとこの楽屋に戻ってくる。それぞれの舞台にかける執念が、時に切なく、哀しさまでも感じさせた（チェーホフもまた名芸のレパであり、この劇団の豊富な女優陣には、かくなる葛藤もありなんと内輪を知る者には思わせられもしたのは余談）。

さて喉元の傷がBの自ら命を断ったことを示し、目の横の火傷がAの空襲で死んだことを示すのは分かるとして、さらに欲を言うならば、三好十郎の「斬られの仙太」でその他大勢の博徒役をしながらブロンプをしたAの体験が、男優が戦争に取られた戦時の舞台を象徴していることは、客席に伝わったであろうか。またCの年が40で、初めて「かもめ」のニーナを演じること、「そりゃねえ、女優20年、だてに年齢はくっちゃいないんだよ……あんたなんて、体験したことはないだろ、この髪の毛の毛穴という毛穴からじわっと血が噴き出す思い……あたしゃ何十回となく味わってんだよ……分かるはずはないさ、毛穴ぜんぶから血が噴き出す感じ……相手を刺すか、自分が死ぬか……あんた、自分が吼えるっての聞いたことある？　吼えるんだよ……アパートのトイレにこもって……ひとり……一晩中5時間も6時間も……あれは人間じゃないよ、猛獣の吼え声だよ」と口にするときの、女優のすさまじい孤独や荒廃までを、客席に届けていただろうか。

1977年に「楽屋」は書かれた。清水邦夫の目線には、戦争の死屍、安保闘争の死屍、そして、主役を目指しながら果たせぬ女優の死屍があったに違いない。この芝居のラストシーンは、チェーホフの「三人姉妹」のラストシーン「生きていかなければ」というせりふ、「やがて

時がくれば、どうしてこんなことがあるのか、何のためにこんな苦しみがあるのか、みんなわかるのよ」「わたしたちの生活は、まだお仕舞いじゃないわ。生きていきましょうよ」というせりふを死んだ女優たちが語って終わる。だがそれは、この先本番を迎えることのない、永遠に続く稽古なのだから、感情込めて3人がいえばいうだけ、それは何と残酷、いや何と滑稽か。「三人姉妹」の世界に似た哀切を確かに客席に届けた名芸版『楽屋』ではあったが……。

名芸の舞台はダブルキャストであった。小川由子、中村透子、加藤尚子、渡辺あゆみという、いくらか若いもう一組があって、その舞台もなかなかに面白かったという。

（4月9～18日）

劇団演集〈創立55周年記念公演　第2弾〉

『坂の上の家』（8ステージ）

松田正隆／作　村瀬きく子／演出

劇団演集のアトリエは私の家から自転車で10分とかからないところにある。稽古場の階段を2階へ上ると左手に客席、右手に舞台が設えられて、舞台は茶の間になっている。舞台奥の廊下は上手に玄関へ、下手に風呂場と洗面所へ続く。舞台下手は2階へ。上手前方は仏間へ、後方は台所へと続く。過不足なく組み立てられている。劇団演集のアトリエ公演はかつて一度N・サイモンの「映画に出たい」を上演して以来ではないか。55周年記念公演の一つを、あえてアトリエで持つこと、すべてを手作りの仕事にしたいという劇団員の総意があってのことという。

舞台は1987年とプログラムにある。

両親をその5年前の豪雨で失った3人、兄と弟と妹が坂の上の家に住んでいる。坂は長崎の町を象徴する。兄幸一（磯谷誠）は役所に勤め、弟慎二（谷口彰宏）は浪人中、妹直子（近藤有香）は高校生である。一家3人の暮らしを支える兄は父親の役も担い、家事一般から、その兄の出かけの靴下の世話までをやく妹が母親役を担っているかのよう。親のない3人が、家族を成している。朝の慌ただしさにも、家族の心が感じられる。これが初演出という村瀬きく子は、ことさら誇張せず、アトリエにふさわしい心遣いで舞台を運び、若い3人の役者もよくそれに応えた。その夕、兄の婚約者陽子（井上雪）が招待され、ぎこちなくもあたたかい歓

迎の一刻が演出される。それから数日後、精霊流しの時期にきまって土産を持って現れる叔父（沢田晴一）が今年もたずねてくる。兄弟は叔父に父の声の響きを感じ、叔父は直子に義姉の面影をみる。ここにも家族の温かさが流れる。そんな中に、石がほうり込まれる。

陽子が、自分には別に好きな男がいたからと、婚約解消を申し出る。慎二が大学進学をやめて料理人になりたいといい出す。だが、陽子の申し出は、陽子に両親の被爆が原因の貧血症が出て、そのことを秘しての断りであったことが明らかになる。妹は陽子の入院する病院に電話をつなぎ、受話器を引き継いだ幸一は声を上ずらせる。慎二の調理学校への転身は、叔父が置いて帰った3万円を入学金に当てることにして兄も妹も了解する。この舞台には、そうとはあからさまに口にされないまま通じる家族というものの温もりが全体に流れていた。それが観ているものの心にも温もりを生んだ、と思う。演出の作品に向けた心、5人の出演者のそれぞれの役に向けた心、この公演に向けた劇団の心でもあろう。

その上でいえば、兄弟たちが住む家のたたずまいが、小ぎれいに過ぎたのではないかということ。妹は小学生であったか。父母を失った兄弟だけのこの5年の生活の、陰りとでもいうものがみえない。ラスト近く、叔父と直子が語る夜の場面で、ふっと直子が口にすることばがある。「……ばってん、なんでやろかって、思う時のあると。おらんごとなったとは、なんでやろかって……。思うてもしょんなかとに」明るく健気な妹の心のうちの小さくはない陰りは、兄弟の父母の命を奪った天災、陽子の命に流れる核兵器のもたらす陰りではないか。

病院の陽子への幸一の電話は、「いえ、もう謝らんでよかですけん……体の方は、大丈夫とですか？……そうですか、……そんならよかった」の後はレコード店の話が延々と続く、たがいを思いやる心のやさしさが、たがいの陰りに触れるのを避けることで保たれるような危うさを松田正隆作品は孕んでいるのではないか。それまでを明るさで流してしまってはいなかったかと、家の陰りのなさと重ねて問いかけておきたい。

ベテラン劇団ならではの見どころ

神戸職演連『雄さん』

本多弘志／作　州崎雅晴／演出

演劇評論家　今泉おさむ

第45回・国鉄演劇祭への参加公演。過ぎし日、職場演劇、隆盛のとき、その中核を担っていた国鉄グループの演劇サークル。それを主体とする〈演劇祭〉が続いていたことに驚く。この日、岡山職場演劇集団「インターナビテレ」の上演もあった。

時はすでに20年近く前になってしまった。政府の意図した、国鉄分割民営化前夜に当たる、86年8月。郊外の駅ホームが舞台。斉藤雄介は駅の信号係勤務であった。それが突然、人材活用センター行きを発令された。ここは名称とは裏腹に、態（てい）のいい窓際族、リストラ要員でもある。そして与えられた仕事は、無人駅〈下川〉の特別改札係。その仕事は、日がな一日、ホームに立ち、さして乗降客のない、切符の集改札である。斉藤は取り立てて熱心な組合活動家ではなく、ただ、〈国労〉に所属している国鉄マンである。周囲の情勢は刻々と変化していく。その〈雄さん〉が職場の仲間、地域の人たちと身近に接する中で、自分はどう生きていかなければならないかを感じていく過程が描かれている。

現在の、分割民営化されたJRに移行する過程での、露骨な組合つぶしの実態が、声高ではないが、生のままに描かれている。閑散とした郊外の駅ホームでの人間模様。駅のクリーンアップ作戦、集改札での声出し励行などなどで締め付けてくる当局。それを見回る駅長。組合員の中にも追従する者、闘う者。ギスギスしだす職場仲間の人間関係。そこでは人間同士の情は失せ、生き残れるかどうかだけに追い込まれてくる。

通常なら無人駅のホーム。人物の配置、出し入れがうまい。取材する記者。まだまだ元気のいい、退職した元分会長の吉川夫妻。近くの高校

から抜け出して遊びに来るチイ子、それを追いかけてくる担任の大杉などなど。この仕事に不満を持つでもなく、ほんわりと日々を過ごしている雄さんも、これからの自分の生き方を考えるようになってくる。

坂井優の雄さんが好演である。その喋り方、持ち味がこの舞台そのものを生かしている。吉川の菊地照一、チイ子の山本圭子もいい。思えば、この移行過程で組合活動は潰されていった。公共企業として、経済効率への努力、サービスの向上などは国民にとって大事なことである。だが同時に、組合活動の弱体化は国民にとってプラスのことだったろうか。

（2月22日・昼　県民小劇場）

劇団四紀会『大工と鬼』

荒木昭夫／作　岸本敏朗／演出

ていく。平安の京都。都に流れる川は暴れ川。時の大臣に命じられた橋掛かり工事は幾たび架けても押し流される。日本一と自負していた大工もこのままでは首が飛ぶ。はたと困り果てた大工の前に、鬼が現れ、謎を持ち掛ける。解けたら、橋掛かりを手伝おうと。さてさて、大工は橋を架けられるだろうか。川も岩も擬人化され、それにもちろん鬼たちも加わるとなると、古くからの〈童話劇〉そのままだが、それはそれで観客の子どもたちを楽しませている。

新作は、ガラッと異なり、現代、街のココソコで見られる少年少女たちの激しくリズミカルなヒップホップダンスで始まる。原作を大胆に脚色している。登場するのは、何度でもリセットできる「ロボット猫」。本当に「可愛がる」とはどうすることなのか。

～ネコ死んじゃった～のメロディに乗せて、どれだけ長生きさせるかを少年少女たちが競い合う。100万回生きた、ということはそれだけ死んだということ。「ロボット猫」は叫ぶ。ただ、「可愛がられる」だけでは猫は生きられない。美しい白いメス猫が登場する。「互いに」愛し合うことこその大切さ。この想いが、どう子どもたちに伝えられたか、である。

舞台美術、さまざまに登場する者たち。その造形は、子どもたちに馴染める色彩を使っている。大人も子どもも楽しめる「家族劇場」。ナビゲーターの「お姉さん」も手馴れている。地域劇団が、子ども対象の舞台を創り上げる。言い古した言葉だが、劇団と何のしがらみもなく、観た舞台そのまま、正直に反応する観客と対峙することは、劇団にとって必要なことであろう。

（3月13日・昼　オルビスホール）

『一〇〇万回生きたねこ』

佐野洋子／原作　家族劇場／脚色　岸本敏朗／演出

地域と連携した公演活動。子どもたちを含めた、家族が共に楽しめる舞台。それを目指しての活動、30周年の舞台。開始したのは76年、と言っても、なかで10年間のブランクがあるが、97年からは毎年取り組んでいる。記念公演として、第1回の作品と新作を並べた。神戸市内と明石市で6ヵ所の地域公演。「おやこ劇場」との連携もあり、会場はほとんどが家族連れで埋まっていた。

「絵本が舞台で動き出す」のキャッチコピーどおりに襖絵絵本が次々と開かれていく中で、物語は始まっ

劇団かすがい『貧乏物語』

井上ひさし／作　楢崎英三／演出

大阪と神戸に挟まれた阪神間で、地域劇団として結成35年の記念公演を成し遂げたのは注目に値する。パンフには、地元・尼崎市長を始め、多くの祝いの言葉と共に、劇団のあゆみとレパートリーのすべてが記録されている。それを見ると、最近は別にして、82年「袴垂れはどこだ」を観ている。この作品、いくつかの劇団の舞台で観ているが、井上戯曲の中では、さしていいとは思えない。作者の女性出演者のみの「頭痛肩こり樋口一葉」・「マンザナ、わが町」と比較して、作者の才気が感じられない。こまつ座の初演パンフには河上肇家庭史付き昭和初期・女性史年表が付いていて歴史的背景は分かりやすいが、戯曲は初日の1週間前に脱稿という状態そのままに、「貧乏物語」という題名が何を意図したのかがわかりにくいし、エピローグの手法も〈頭痛肩こり〉と同様である。

舞台は昭和9年、治安維持法違反で、獄中の河上肇の留守宅。ひで夫人と大森ギャング事件に加担して逮捕され、処分保留の娘ヨシ。そこに4人の歴代女中が加わって、出演者は女性ばかりの6人。エセ占い師と結婚した美代、肇の教え子でもある内務省警保局エリートと結婚した早苗、未だ舞台に立てない新劇女優クニ、婦人記者志望だが芸者を母から強要されて逃げ出してきた初枝、といった女中たちの有為転変が、当時の社会での女性たちの生きざまを反映させる。

長屋住宅。その正面の壁紙が浮いているのが気になったが、エピローグでそれが剥がされ、当時の新聞記事などが出てきたので納得はしたが、いま少し注意が必要である。舞台は休憩なしの110分。場の転換を暗転ではなく、照明の変化で行ったのはいい。よくまとめてある。冒頭の勢いのいい台詞まわしは、まだ練りが足りないが、総じてテンポはいい。ただ思うに、ここは、東京弁の歯切れよさを念頭に書かれているので、それが苦しい。

工藤律子＝ひでが、一家をまとめていく頭として、事態の変化に対しても落ち着きを見せ、好演である。関みさと＝ヨシは、明るく振舞う中に、ラスト近くの特高から受けた拷問の恥辱を告白するまでの、伏線としての憂いを表情の陰に蓄えていたのは納得できた。4人の女中たちは各々のキャラクターの異なりを出し、この不十分な戯曲を面白く見せている。これは、演出としての構成力の腕でもあろう。桟に掲げられた、河上肇の写真が見下ろす下で、この苦しい時代の中でも、明るく生き抜こうとする女たちの健気さ、というものは感じられる。

ラストに再度、初枝を老婆として登場させ、他を紗幕の中に並べたのは、若い初枝のみが、現在生き残っているということか。ではあっても、その意図は何なのか。

（5月29日・夜　ピッコロシアター大ホール）

観劇記

西の湯田でホットな気分

「夏の夜の夢 ―ムーンアンドサン―」

W・シェイクスピア／原作
広島友好／脚色　柳沢悟／演出

劇団大阪
杉本　進

山口で劇団演劇街とサークルトラムの合同公演があると聞き、劇団の熊本と2人で観劇に出かけました。「夏の夜の夢、ムーンアンドサン」、妖精と人間、男と女、日常と夢、最高に楽しめる祝婚劇。

やれば失敗の少ない、成功の確率が高いと言われている作品（できれば私も一度上演してみたいと思っているので）いったいどのように料理しているのか、ワクワクしながら見させていただきました。

山口情報芸術センターは図書館なども入った総合芸術館、真新しく建ったばかりです。ホールは400席くらいの中ホールで、客席高く舞台は平場で、上から見おろします。

タッパ高く、袖が広い、ナラクもありで、いたれりつくせりです。この公演、実は会館企画とのこと、チョッピリうらやましいですね。

古典といわれる作品を上演するには、どう現代と切り結ぶかが、ポイントだと思うのですが、その点で広島さんの脚色は成功しておりました。作者の弁に「ヒポリタ逃げる、ヒポリタ逃げる」と書かれていましたが、アマゾンの女王ヒポリタを大いに活躍させています。原作では、始めと終りにしか出てこないのに、王のシーシアスとまじめな愛を追求する女性として登場させ、ライサンダーデイミートリアスの若者2人にほれられ、森の中を走りまわるのである（原作では2人の若者はヘレナにほれます）。そして大いなる和解、ハッピーエンド、4組の男女の愛の形をおもしろおかしく、うまく描き分けていました。

広島さんと、演出の柳沢さんは共に40代前半、脂が乗っています。いいコンビです。演出のさえを見せます。客席の後ろから、横から、2Fから、いろんなところから登場させ、舞台を会場いっぱいに使い、お客さんをあきさせません。テンポも良く、正面の森の中のシーンでは、装置の軽やかさもあって（白い幅広、一枚ものの大きな布の数ヶ所をひもでつり上げ、樹木に見せたり、草原に見せたり）たいへん美しいシーンを創り出していました。

役者たちも皆のびのび動いています。特に若い人たちは、思い切り良く好印象、魅力的です。ベテランの方たちも達者な方が多く、特にパック役の方の柔軟さ、ボトム役、なんと広島さん、あの無口な方から考えられないくらい動き軽やか冗舌です。オーベロン、タイテーニアの個性的なつくり、イージアスの実直さ、シーシアスの存在感、そしてなによりヒポリタの走りきった姿が美しいです。舞台がのっているので、客席の反応も実に良く、ビンビンに伝わっていました。笑いあり、涙あり、そして核心の部分ではウンウンとうなずいていらっしゃいました。終っての拍手は、当然厚く、長く、続いています。

トラムは、4年前、中心の中島さんが転勤されたため、劇団活動を中止されていたのが、このたび彼が帰って来たので、また再開したとのこと。代表の藤原さんご夫妻のいきいきした顔に出会い、また、我々の喜びも倍加しました。演劇街は着実に歩を進めている感じで、何かいい作品が生まれそうな予感がします。今年はどうも山口あたりから、いい風が吹くかもと、ホットな気分になりました。

（2月28・29日　山口情報芸術センター）

【第2回八雲国際演劇祭】

11月3日から7日まで
島根県八雲村で開催

「演劇を人々の暮らしの中へ」という強い思いのもとに、八雲村に「しいの実シアター」が生まれて10年目になります。劇団あしぶえが、地域とともに一歩一歩創り上げてきた「八雲国際演劇祭」も、今回で通算3回目となり、手づくりの演劇祭は確実に成長を重ねてきました。

過去に開催した「プレ大会」では3カ国5劇団が、「第1回」では5カ国7劇団が参加しました。そして今回、インターネットで世界へ情報発信する一方、海外の演劇祭への視察や、劇団あしぶえが海外の演劇祭に出演した際にPRした結果、世界27ヵ国37劇団から問い合わせが殺到、13ヵ国14劇団から参加申し込みがありました。

今回は特に「次世代を担う子どもや若い人たちの参加」に重点をおいて開催します。

＊キューバの子ども劇団来日

この劇団は、海外の国際演劇祭でも高い評価を受けています。同世代の子どもたちは、彼らの上演にきっと目を輝かせることでしょう。

＊ベルギーのクラウンが上演

劇場が小さく客席に限りがあるため、チケットを購入できなかった人や、年齢制限で入場できない小さな子どもたちから中・高校生まで、多くの人に演劇に触れてもらうため、劇場の近くに「子どもの広場」を設けます。その目玉がクラウンの上演です。こちらは無料でたくさんの方に観ていただけます。またこの広場では、若いボランティアスタッフたちがすすんでリーダーとなり、フェイスペインティングなどの企画も意欲的にすすめています。

「演劇が暮らしに根づくために、子どもや若い人たちにもっと演劇に触れてほしい」と考え、この好機を活かして、将来、演劇や演劇祭に関わっていく芽や力をじっくりと育てたいと思います。子どもや若い人たちと共に、小さな村から演劇による感動を広げます。

今秋はぜひ、八雲村へ。

（八雲国際演劇祭事務本部　福田陽子）

●問合せ先
0852―54―2400

参加劇団決定　8ヵ国9劇団

〈コンテスト上演〉5劇団
- リトアニア「アグリジャ」
- エストニア「KAシアター」
- ベネズエラ「テアトロ・サン・マーチン・デ・カラカス」
- スペイン「アウラ・デ・アート」
- アメリカ「アルトゥーナ・コミュニティ・シアター」

〈特別公演〉4劇団
- キューバ「ラ・コルメニタ」
- ベルギー「ジョンナ・シアター」
- 日本「イエローマン・グループ」
- 日本「劇団あしぶえ」

全リ演〈東〉

第8回作家会議の報告

栗木英章（劇団名芸）

●総会のたびに創作の重要性が確認され、書き手の一人として、あるいは「作家会議」事務局として責任を感じてきましたが、やっと第8回目の集まりを持つことができました。

2月28、29日　桑名市民会館で

日時／2月28日(土)29日(日)
会場／三重県桑名市
市民会館会議室

会場は今年8月に開催される「全日本演劇フェスティバル」のメイン会場で、ちょうど28日に市民参加劇『巷説桑名萬古焼―沼波弄山物語』（作／栗木　演出／吉良史郎）が上演されていたので、その観劇と合わせての会となったわけです。したがって、この劇の仕掛人でもあり、フェスティバルに開催（助成金つき）への尽力をしてくれた劇団すがおの加藤武夫氏にすっかりお世話になりました。また準備を手伝ってくれた島田たろう氏、鈴木正彦氏にもあわせてお礼申しあげます。

●出席者

こばやしひろし、藤本昭（はぐるま）、鈴木弘文（夜明け）、柴野千栄雄（たけぶえ）、小島真木（静芸）、布施佑一郎（からっかぜ）、境野修次（石るつ）、土屋隆司（演集）、栗木英章（名芸）、伊藤豊子（はにわ）、島田たろう、鈴木正彦（個人）、長井満（柏崎演劇研究会）に、（西）から楠木幸男（和歌山）、東川宗彦（個人）のお2人、そして基調報告者として出席願った井上洋氏（名古屋学院大学助教授）の計16人である。

●討論作品

「イチャレバチョーデー
～少年たちの沖縄レポート」
作／藤本昭

「舞い降りた兵士」
作／島田たろう

「わが街は、緑なり」
作／柴野千栄雄

そして観劇作品として、前記『桑名萬古焼…』である。

●基調講演

井上氏は20数年前、名古屋演劇鑑賞会のサマーセミナーで私とバスにたまたま並んで座って以来、手紙などにより細々とつながりを持っていた縁で、今回やや強引に報告をお願いした。

彼の専攻はイギリス行政史（19世紀）であり、演劇とは少し距離をおいた観客の立場なのだが、リアリズム論の歴史的経緯や、私の拙い問題意識を記した愛知文団連の機関誌内容とも連動させて、私たちの立ち止まっている地点を的確に分析された。特に個人的にこたえたのは〝作劇の動機自体に潜む政治主義→主題の限定→笑い、批評性の喪失〟という指摘である。

氏の言うように〝メッセージ性は大事なことであると

して、そのメッセージは「伝える」のでなく、「提示して、それが伝わる（各自で多様に受けとめられる）」ということではないか〟について、今回の討論作品の話し合いでも論議が深められていったと思う。

よく準備された資料を紹介できないのが残念だが、末尾に記されたウェスカーの発言も示唆に富んでいて、読みながら私は、平田オリザの近著―「リアル」だけが生き延びる―の次の一節を思い出した。

……演劇はテーマではなく、作家、演出家の世界観で勝負する。……「私とあなたとはこんなに違うけど、一つの共同体がつくれますか」。演劇をつくることは、自己と他者を峻別するこの問いから始まる。……

●作品討論の概要

一、『イチャレバチョーデー～少年たちの沖縄レポート～』

〝出会えば友だち〟と言ったサブタイトルのつくこの作品は、沖縄へ修学旅行に行った高校生たちの行動をテンポよく追っているが、評価は厳しい。一見、現代的のようにみえて作者のドラマ観は古くて浅い。井上氏の「…善とか正義とか、悪とかいった観念を人格化したものを動かしているに過ぎない…」がそれを指摘している。ねばり強く創作を続けている彼の作品の、格闘、改稿、上演を期待したい。

二、『舞い降りた兵士』

これは名古屋演集の創設者で、東リ演元副議長の若尾正也氏への思いを脚本化したものと言える。私が中座した関係上、東川レポートを紹介させていただく。

――戦後ある程度時間が経過して、天国から正巳という人物が、婚約者であった女性の心の中へ舞い降りてきたというお話。「よくまとまっている」「いい演出と出会うことが大切」「最後の、夢だったのかというところはカットしてもいいのでは…」等々の意見――

私見だが、島田氏の古巣演集で上演が実現しないものだろうか。

三、『わが街は、緑なり』

すでに作者の地元（武生市）で上演された『君は、武生を見たか！』の改題で全体に好印象を与えた作品といえる。ここも東川レポートを借用させていただく。

―武生市に伝統越前打ち刃物職人のあとを受け継いだ伸行のところへ、幼なじみの奈津子（医者になってコンゴでNPO活動）が戻ってくる。医院の跡を継ぎ、伸行と結ばれるが……やんしき踊りや式部会の活動などがからみ進行していく。「テンポがよく好きな作品」「奈津子の内面がもう一つ分からない」「式部の風景をもっと入れてもいいのでは…」等々の意見――

四、『巷説　桑名萬古焼…』

自作の舞台を観てもらうのは、うれしい反面、冷や汗も、どっと出る。作品については甘い評価もいただいたが、結局、長短ともども歌舞伎畑出身の演出（吉良氏）に救われたというところだろう。地元密着型の創作と舞台化の実践ということで、今後も継続していく計画なので見守っていただければ幸いである。

●おわりに

〈東〉作家会議も、かつては故萩坂氏も力を注ぎ、岡安、平石、北野茨…と力量ある作者が参加、輩出していったが、現在は期待に応えるに到っていない。〈西〉は『ドラマの森』を刊行し続けて、間もなく4巻目が出されるということで、注目し、また学んでいきたいと思う。

今回初参加の長井氏は、地元紙「越後タイムス」に好意的な感想を寄稿してくださった。

ねばり強く書き続けている人も散在するし、基調報告してくださった井上氏のような逸材が各地にみえることも心強い。少々あせりながら、〈西〉

全リ演関東ブロック「新春大交流会」報告

2004年『夢と希望を語ろう』

久しぶりの関プロ新春交流会が東京都日野市の劇団「ひの」の稽古場で開かれました。

何回かの東会議の総会で、元気な活動報告もされていましたので、激励かたがた元気をもらいに劇団「ひの」でやろう。と関プロ事務局会議で出され、その場で「ひの」に電話を入れ、折よく劇団代表の佐藤利勝さんがいましたので、申し入れをすることになりました。突然のことでびっくりしていました。

とも交流しつつ、この作家会議を続けていきたいと思う。全リ演のより多くの参加を期待して、とりあえずのまとめとさせていただく。

〈以上〉

その後、快く引き受けていただき、実行委員会からの「つまみは乾き物だけではなくて」とか、「やはり刺身はあったほうが」とかの身勝手な注文ごとも快く受け入れていただきました。

実行委員会では、何人くらいの規模にしようかとか、ところで「ひの」の稽古場の広さはどれくらいあるだろう、とか、何人ぐらい入れるのかな、とかと鳩首協議。まず、各劇団、何人ぐらい見込めるか出し合おうということになり、その結果、「ひの」は場所提供者だから多くを見込めるので、予算のこともあり、全体で40人を目標にしよう、となりました。さて、次は当日の会の内容について。今の若手は、他の集団の活動がどうなっているのか知りたがっているし、交流したがっているとの認識のもとに、固苦しいことは無しにして、自由交流をメインにしようと衆議一決。でもそれでは締まりがないから、全リ演事務局長・城谷護さんから事務局報告を簡単にしていただいて、その後、各集団の活動報告を手短かにやって、あとは自由交流ということに落ち着きました。

さて、当日の2月29日の暖冬の中でも一段と春めいてきた日曜日。事務局実行委員メンバーは、昼12時JR日野駅集合で路線バスで劇団「ひの」へ。バス停で降りて劇団に向

かう途中、「ひの」の皆さんが『新春交流会』の看板を道路の目に付くところに取り付けているところでした。とりあえず「ご苦労様」とエールの交換。民家が建ち並ぶ路地を通って劇団「ひの」の稽古場へ。

稽古場は、民家を改造したもの。よき協力者の篤志家(劇団員?)が提供してくれた由。しかも、な・な・なんと、ここに4000万円貯めて新稽古場を建てるんだそうな。すでに積み立てが始まっていて、現在の到達点が棒グラフで表示されておりました。この意気込みやいかん。劇団「ひの」の熱気に圧倒されそうです。

さて、「ひの」の劇団員総出での心のこもったたくさんの手料理。「乾き物だけでなく」とか言った実行委員の面々、感動ひとしおで、感謝、感謝。

出席予定の顔ぶれがあらかた揃ったところで、司会者から開会宣言。実行委員長の「石るつ」境野さんは、中部で昨日から全リ演劇作家会議があり開会に間に合わず。城谷事務局長の事務局報告。昨年末にあった韓国馬山での「日韓演劇交流協定書」調印式と今年の桑名での「全日本演劇フェスティバル」を中心に報告。つづいて各集団の活動報告に入る前に、東京芸術座の若手による過激なパフォーマンスのハダカ踊り、もとい、水着姿による集団ダンス。そして、各集団活動報告。石るつの順番に境野さん間に合う。劇団「ひの」は劇中歌を披露。今日の手作り料理は、劇団「ひの」のサポーターのみなさんの作とか。こういう人々によって私たちの活動は支えてもっているのだなぁとつくづく感じ入ったことでした。

乾杯のご発声は、京浜協同劇団長老の細田寿郎さんにお願いしました。

後は自由交流。初対面でも演劇活動仲間、すぐに打ち解けていくつかの交流グループができました。予定の3時間があっと言う間に過ぎ去るほどの盛り上がりようでした。とりあえず中締めをと、実行委員長境野さんの締めの言葉があり、去り難い人たちでその場で二次会。「ひの」さんの後片づけのことも考えて1時間で散会。有意義な1日でした。

「ひの」の新稽古場建設へカンパ5万2000円が集まりました。

ちなみに参加者45人以上。参加費1000円。各集団、お酒1本持ち寄り。

参加劇団=青年劇場・京浜協同劇団・蒼生樹・石るつ・劇団埼芸・土くれ・劇団「ひの」・東京芸術座。個人参加は川島柳一・よしだはじめ・油上恵子の各氏。

劇団「ひの」のみなさん、ありがとうございました。

(文責・東京芸術座・郡司)

電話番号の訂正

劇団未来半島の連絡先、電話、FAXは次の通りです。

〒035—0053
青森県むつ市緑町26の2
㈱丸二物産内　仁木　宏
TEL
0175—22—2048
FAX
0175—23—4875

河東けいさんに心のこもったおめでとう

神戸　平田　康

開西芸術座の、というより関西を代表する女優、河東けいさんの大阪市文化功労賞受賞をお祝いする会が、4月26日に兵庫県立原田の森美術館で開かれた。

出席は、京阪神の演劇人はもちろん、おけいさんが副会長を務める東灘文化協会、彼女が主宰する朗読教室の受講生、女子大の同窓生、神戸で長年彼女と親交のあった人びとなど、100人を越した。

第二次世界大戦の戦時中、敗戦、戦後の激動期を大阪、東京、神戸で過ごし、阪中正夫に出会って演劇に志して半世紀。「長い間には『もう辞めよう』と思い詰めたこともある。…女の立場ゆえの、関西であるがゆえの口惜しさも幾度か味わった」とおけいさん自身は回想する。絶えず時代と社会に広い目配りをしながら、演劇に関しては自分に対しても他に対しても厳しい目を持ち続けたその歩みが、今は大きく花開いている。『セールスマンの死』のリンダの演技、『この子たちの夏』の大阪初演をはじめ、その活動は目覚しい。

私個人では、アイルランド研修の準備活動を身近に見て、そのひたむきさとエネルギーに舌を巻いた。ある意味では無謀とも思われる計画を実現に漕ぎつけ、そして豊かな成果を持ち帰ったことに脱帽した。

「会」は、祝辞、「河東けいのあゆみ」のスライド、鏡開き、歓談と進んだが、圧巻はおけいさんを含む関芸ベテラン女優たちによる詩の朗読だった。茨木のり子／作「わたしがいちばんきれいだったとき」。もっと多くの若い演劇人に聞かせたかった、というのが素直な感想、もったいなかった。全体に手づくりの細やかさと温もりの感じられる、気持のいい会だった。

「これからも、身体の続くかぎり、人間への愛を謳い度いもの」というおけいさんの願いが長く大きく実現することを祈念したい。

藤沢薫さんの「わが芝居人生」
だれもが喜んだ出版祝う会

素晴しい本が出版されたーと参加者のだれもが我事のように喜んでいるのが、ひしひしと伝わってくる会だった。

4月24日（土）京都タワーホテルで開かれた藤沢薫さんの「わが芝居人生」出版を祝う会には京阪神はじめ全国から駆けつけた150人を越える人たちで賑わった。

この会の案内が送られてきた時、呼びかけ人の数（58人）と多彩さに驚いた。

当日会場で配られた記念ブックレットに180人もの人が声を寄せている。北は北海道から南は九州まで、各界各層の人たちが50年を越える演劇活動を賛え、藤沢さんの厳しく真摯な生き方に共鳴する声、声……。

会はそんなみんなの思いが朗らかな笑いとなってあふれ、だれもが親しくなれる雰囲気だ。

「若駒」の打つ祝い太鼓に迎えられ、広い宴会場に入るともういっぱいの人たち。

茂山あきら氏が朗々と謡い上げる狂言「福の神」のうたで華やかに開会。京芸の次世代たち、竹橋団、赤土綾子、小池貴史の司会で進行していった。

祝辞が続く。滋賀で生まれ、京都で育った藤沢さんは、学生時代（龍谷大）に芝居に興味を持ち、52年卒業と同時に結成3年目の京都芸術劇場（現・京芸）に入団し、60年に劇団代表となる。

ずーっと京都にこだわり続け「京都から一流を目指す」が持論で、職業劇団としての厳しい経済状況の中、妥協のない舞台づくりを展開、俳優、演出家、劇団代表として京芸を引張り続けてきた芝居人生。その節目、節目になった舞台や出逢った人々、観客との交流を鋭く暖かい筆致で描かれたこの本は、自分たちの軌跡と重なる、その感動を誰もが語り合った。

藤沢さんはちょっと照れながらーでも最高の笑顔でみんなと交流していた。

最後の「若駒」の創作獅子舞ー寺踊りーは圧巻で、舞台狭しと踊りまくり、会場に飛び出していって厄を除き福をもたらすという獅子頭での頭噛み（?）になり、ユーモラスにやさしく参加者の頭を次々にカポッカポッと噛んでいき爆笑のうちにお開きとなった。

（赤松比洋子）

梶武史さんを偲ぶ会
大きな感動と涙に包まれた

4月7日に他界した劇団四紀会創立メンバーの1人、梶武史を追悼し、「梶武史さんを偲ぶ会」が、5月22日に兵庫県立美術館原田の森ギャラリーで開かれ、劇団員32人を含む133人の参加で、会場はあふれかえりました。

西リ演からも、在神劇団はもちろん、尼崎・大阪・京都・和歌山そして愛媛からもご参加いただきました。本当にありがとうございました。

会は、黙祷、来賓代表4氏による偲ぶことばに続き、梶の舞台写真や国鉄職員時代のものなど、さまざまな姿がスライドに映し出され、参加者の皆さんは、在りし日の梶の姿を、懐かしく見守っていました。

その後、彼が演技指導に赴いていた合唱団TERRA（テラ）の皆さんによるロシア民謡などが披露され、ペットボトルを利用して作ったという花束が、梶夫人である大村園子氏に手渡されました。

縁の深かった方々からの思い出が述べられた後、彼が構成を担当した「五十年目の戦場・神戸」の終景を初演時の出演者が再現、さらに参加者全員による「千の風になって」の合唱と続きました。

最後に、お礼のことばの中で、大村園子氏から「家族にあてた手紙に『最高の人生だった』と記されていた」ことが伝えられ、まさに天寿を全うした彼の姿に、会場は大きな感動と涙に包まれました。

梶武史――改めて彼の偉大さと優しさに感じ入った、素晴らしい偲ぶ会となりました。彼もきっと、喜んでくれていることと思います。

（里中）

「子どもの夢・子どもの劇」
――劇団ともだち劇場の記録――

終戦の翌年から1983年までの37年間、大阪市で活躍した児童劇団の歩みが綴られている。大阪放送劇団などで数多くのラジオドラマにも出演した泉田行夫氏を中心とする劇団のリーダーたちの姿を、共に活動してきた戎一郎氏が描いている。その多彩な活動ぶりに舌を巻いた。「演劇会議」の印刷を担当してくれている（株）シイームの出版である。税込1800円。

（城谷譲）

2004年7月中旬以降の公演

●劇団通信の中から7月中旬以降の公演をまとめましたので、都合のつく方はぜひ観劇しあってください。
●今後、公演予定については、劇団通信とは別にして、公演日・会場・タイトル・作・演出をはっきりと書いてお送りください。

劇団あしぶえ	7/11・18・19	しいの実シアター	彦市ばなし	木下順二／作　園山土筆／演出
〃	8/1	ビッグハート出雲	〃	〃
劇団蒼生樹	7/17・18・19	横浜市教育文化ホール	明日　一九四五年八月八日・長崎	井上光晴／作　小松幹生／脚色　濱田藍行／演出
劇団はぐるま	7/17・18	岐阜市民会館	アラビアものがたり　消えたオアシス	いずみ凛／作　汲田正子／演出
劇団コーロ	7/16・17	東京・三百人劇場	聖の青春	大崎善生／作　いずみ凛／脚色　菊池隆／演出
〃	8/30	広島・アステールプラザ中ホール	〃	〃
青年劇場	7/20	新宿・朝日生命ホール	真珠の首飾り	ジェームス三木／作・演出
関西芸術座	7/30～8/8	関西芸術座スタジオ	満月の夜は、なぞだらけ	澤田隼子／原作　勇光佳加／脚色　松本昇三／演出
劇団銅鑼	7/13・14・20・23	岐阜・沼津・東京・横須賀	センボ・スギハラ	平石耕一／作　山田昭一・平石耕一／演出
神戸ドラマ館ボレロ	8/7・8	神戸アートビレッジセンター	見果てぬ夢	堤泰之／作　三村省三／演出
テアトルハカタ	8/22	九州エネルギー館ホール	ブレーメンの音楽隊	本田恵子／脚色・演出
劇団名芸	8/28	天白文化小劇場	十二の月のおくりもの	真日芳枝／脚本・演出
〃	9/4	南文化小劇場	〃	〃
劇団コーロ	9/3・4・5	ワッハ上方	剛（たけし）＆剛（たけし）(GO&GO)	内場勝一郎／原作　土屋弘之／脚色　村上嘉利／演出
劇団銅鑼	9/2・9・10・18・25・29	東京・千葉・埼玉	Big Brother	小関直人／作　山田昭一／演出
演劇集団あり	9/15	米子市公会堂	ら抜きの殺意	永井愛／作　田中小百合／演出
劇団からっかぜ	9/18・19	アトリエ公演	闇に咲く花	井上ひさし／作　布施祐一郎／演出
劇団生活舞台	9/17・18	少年科学文化会館	ゆかいなどろぼうたち	T・エグネール／原作　高尾豊／脚色・演出
青年劇場	9/18～29	紀伊國屋サザンシアター他	夜の笑い・第2部接触	島尾敏雄「接触」より　飯沢匡／作　松波喬介／演出
演劇集団和歌山	9/25	和歌浦アートキューブ	月の砂漠	楠本幸男／作　山入桂吾／演出
劇団大阪	10/8～10・15～17	谷町劇場	日暮町風土記	永井愛／作　熊本一／演出
劇団きづがわ	10/15～17	クレオ大阪東	稲の旋律	佐伯洋・西村慶悦・松本雅人夫／脚色　林田時夫／演出
演劇集団土くれ	10/14～16	麻布区民センター	ムーランルージュ	斎藤憐／作　石塚幹雄／演出
劇団埼芸	10/16・17・23・24・11/6・7	劇団埼芸稽古場	かあちゃん	山本周五郎／原作　佐藤浩平／脚色　川村武夫／演出
テアトルハカタ	10/17	九州エネルギー館ホール	悟空の大冒険	徳満充一／作　中村ジョー／演出
劇団未来	11/12～14・19～21	劇団未来ワークスタジオ	なにわラプソディ	和田澄子／作　森本景文／演出

編集後記

☆イラクに派兵された自衛隊は、米・英軍の指揮下である多国籍軍に加わるという。憲法が蹂躙されつづけている。また、年金改悪は、多数が反対あるいは審議をつくせと言っている。

☆朝日（6月22日付）の世論調査で小泉支持40％、不支持が42％と支持を上まわった。選挙できっぱりとした審判を!!

☆表紙について一部で、その号の主な編集企画にそった内容をという声がある。しかし、「チラシ」活用は、その提供劇団の活躍などの紹介があり、面白い試みではないでしょうか。そこで、再々のお願いです「チラシ」の提供をぜひ!!　ぜひ!!

☆次号では、企画の中心に戯曲をすえたい。そこで90枚（400字づめ）程度の作品を紹介したいのです。これはと思う作品を提供してください。お願いします。

（境野）

〔原稿の送付について〕

・次号（11月号）の締切は9月20日です。

戯曲などは作品ができたときにすぐ送ってください。また、劇評なども各劇団で依頼して上演が終わり次第送ってください。

①戯曲は、境野修次または、栗原省へ。

②劇団通信および舞台写真は、㈱シイーム内　石田章へ

③それ以外の原稿は、必ず、東会議は境野修次、西会議は赤松比洋子に送ること。

※原稿は、メールまたはフロッピーを送っていただければ効率もよく助かります（その場合は念のため原稿のコピーもあわせてお送りください）。

後藤　陽吉
〒184-0014
小金井市貫井南町5-12-13
TEL&FAX　0423-81-1590

栗原　省
〒643-0111　和歌山県
有田郡吉備町庄684-32
TEL　0737-52-5963
FAX　0737-52-6099

境野　修次
〒272-0136
市川市新浜1-23-5-103
TEL&FAX　047-356-7217

赤松比洋子
〒663-8141
西宮市高須町1-1-11-859
TEL&FAX　0798-45-3307

㈱シイーム
〒547－0027
大阪市平野区喜連5－1－45
TEL 06-6707-3833
FAX 06-6799-3833
E-mail
shiimu @ lime.ocn.ne.jp

演劇会議　115号　2004年7月3日発行　　定　価　700円（送料240円）

編集長　後藤陽吉
編集委員　境野修次　よしだはじめ　郡司　勇　栗原　省　赤松比洋子　楠本幸男
発行所　〒212-0052　神奈川県川崎市幸区古市場2-109　京浜協同劇団
TEL/044-511-4951　FAX/044-533-6694

誌代振込先（郵便振替）口座番号00200-4-78639
全日本リアリズム演劇会議事務局（〒212-0052　神奈川県川崎市幸区古市場2-109　京浜協同劇団・城谷護）